

第 27 回  
専門日本語教育学会  
研究討論会誌



2025 年 3 月 8 日 (土)  
於：江戸川大学 駒木キャンパス

専門日本語教育学会

THE SOCIETY FOR TECHNICAL JAPANESE EDUCATION



## 第 27 回 専門日本語教育学会研究討論会誌

### 目次

#### ●専門日本語教育学会特別企画

「日本語教育におけるオンラインコンテンツの活用法」

- 趣旨 司会：岩崎拓也（筑波大学） ..... 1
1. オンライン日本語コースの構築と運営  
—日本の大学・大学院で学ぶ人のための渡日前日本語準備講座での実践—  
大津友美（東京外国語大学） ..... 1
2. オンラインコンテンツは誰が作るのか？  
—研究の種を考える—  
伊藤秀明（筑波大学） ..... 2
3. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」にみる日本語教育学論文  
今村志紀（国立国語研究所） ..... 2

#### ●口頭発表(1)

1. 基礎文法と専門語彙を同時に学ぶ試み  
—介護現場での必要性から—  
神山英子（都留文科大学） ..... 3
2. 高度外国人材の雇用において必要とされる日本語能力と異文化理解  
—中小企業の外国人社員を対象として—  
大久保雅子（早稲田大学） ..... 5

#### ●ポスター発表(1)

- A1. 中級留学生はプレゼンテーションの発表資料に対してどのような質問を行うか  
—TEachOtherS によるアノテーションからみて—  
徐煉（国立国語研究所） ..... 7

A2. 大学初年次生の論証型レポートにおける文献活用 嶋田大海（青山学院大学）	.....	9
A3. 留学生と日本人学生の指導に『高専留学生の実験レポートの書き方』テキストを用いた実践に関する報告 梅木俊輔（仙台高等専門学校）・山田朱美（津山工業高等専門学校）	.....	11
A4. 論文読解における中級学習者の主語のとらえ方の変化 桑原陽子（福井大学）	.....	13
B1. 英語で研究する工学系留学生はなぜ日本語を必要とするか —留学生と教員のニーズ調査を踏まえて— 古市由美子・牛山和子・猪狩美保・劉羅麟（東京大学）	.....	15
B2. 責任を伴う発信活動が伝達技能向上にもたらす効果 高木佳奈（九州工業大学）	.....	17
B3. 第一言語の違いによる文章の見方・記憶に関する研究 小林紗寧（第一工科大学学生）・高島一郎・ローズ平田昌子（第一工科大学）	.....	19
B4. 台湾人日本語学習者の作文に見られる段落構成の特徴 喬曉筠（政治大学）	.....	21
B5. 中国人日本語学習者の依頼のEメールにおける課題 —読み手評価と推敲支援の視点から— 須賀和香子（総合研究大学院大学大学院生）	.....	23
C1. 介護福祉士国家試験合格を目指すベトナム語母語話者向けの漢字語彙自習教材開発の試み —「生活支援技術」科目に出題される二字漢字語を対象に— PHAN THI MY LOAN（大阪大学）・佐々木良造・比留間洋一（静岡大学） ・道上史絵（立命館大学）	.....	25
C2. 介護の日本語教材情報提供の取り組み 中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス） ・布尾勝一郎（立命館アジア太平洋大学）・奥村匡子（神奈川大学）	.....	27
C3. 「医療コミュニケーションのための日本語」における授業実践報告 浅里仁・樋口壮美・寺菌佑介（神奈川歯科大学）	.....	29

## ●ポスター発表(2)

- A5. 学術論文読解の導入支援のための「構成要素色塗りメソッド」を用いたワークショップの実践と課題  
大島弥生（立命館大学）・生天目知美・今村圭介（東京海洋大学）  
・小畑美奈恵（創価大学）・安高紀子（明治大学） ..... 31
- A6. 修士課程大学院生による学会誌論文要旨作成の課題  
—執筆過程に着目して—  
朱雅蘭（一橋大学大学院生） ..... 33
- A7. 大学院オンライン・ゼミナールにおける留学生のコメントの特徴と変容  
烏日哲（国立国語研究所） ..... 35
- A8. 工学部学生の卒業時における自身の日本語力評価と初年次日本語教育との関連性  
中川祐香・杉山明（大阪産業大学） ..... 37
- A9. 社会学資料分析型論文における研究主題と引用形態の選択に関する一考察  
向井留実子（愛媛大学）・中村かおり（拓殖大学）・近藤裕子（山梨学院大学） ..... 39
- B6. 日本図書コードを用いた日本留学試験読解問題文出典の分析  
林希和子（大阪大学）、佐々木良造（静岡大学） ..... 41
- B7. 大学における発達障害のある留学生に対する「合理的配慮」をめぐる課題  
—日本語教員・心理職教員へのインタビューを通して—  
安田真由美（長崎外国語大学） ..... 43
- B8. 共生社会における専門的能力としての日本語母語話者の日本語コミュニケーション能力の育成  
千葉月香（愛知県立大学） ..... 45
- B9. 日本語教師のアスリート留学生に対する教育観  
—教師の語りから見えた視点の転換—  
正宗鈴香（大東文化大学）・日野純子・東会娟（帝京大学）  
・中山由佳（山梨学院大学） ..... 47
- B10. 専門用語の説明における定義記述語彙の可能性について  
森口稔（長浜バイオ大学） ..... 49

C4. 生理学語彙リストの見出し語設定方針の検討 —長単位からの再分割と形態素解析結果との比較から— 河住有希子（日本工業大学）・藤田恵（日本国際教育支援協会）	..... 51
C5. 外国人家事支援人材に対する渡日前研修の実態調査 今西利之・渡辺史央（京都産業大学）	..... 53
C6. 非日本語母語話者の介護職対象の日本語教材開発に向けた、介護の日本語教材の変遷 の調査 田辺淳子（愛知学院大学）	..... 55
<b>●口頭発表(2)</b>	
3. 日本留学試験読解問題文の内容分類および文字数と文章難易度の分析 佐々木良造（静岡大学）・林希和子（大阪大学）	..... 57
4. 見出しの読み取りが学部留学生の要約文作成に与える影響 —新聞社説の論説文を原文として— 湯浅千映子（大阪観光大学）	..... 59
5. 日本語学習者用の辞書に求められる情報とは —情報の提示順序に着目して— 吉甜・佐野彩子・石黒圭（国立国語研究所）	..... 61

専門日本語教育学会特別企画

## 日本語教育におけるオンラインコンテンツの活用法

司会：岩崎拓也（筑波大学）

### 趣旨

オンラインコンテンツの活用が一般化した現在、日本語教育の方法論や学習環境は新たな局面を迎えている。専門日本語教育においてもオンライン教材やデータベースを活用した学習支援が広がる一方、その効果を最大限に引き出すためには、更なる議論が必要である。本シンポジウムでは、オンラインコンテンツの開発過程や、教育実践、成果を共有することを目的とする。また、データベースの構築や運用についても、学習者と教育者双方にとって最適な学習環境を設計するために、今後の専門日本語教育研究においてどのような研究が求められるのかという方向性を探る。

### 発表 1

#### オンライン日本語コースの構築と運営

#### —日本の大学・大学院で学ぶ人のための渡日前日本語準備講座での実践—

大津友美（東京外国語大学）

東京外国語大学では、2021 年度より「日本の大学・大学院で学ぶ人のための日本語準備講座（以下は OPJLC）」を開講している。これは、日本の大学・大学院に正規生として入学予定の人を対象に、5～6 週間程度の渡日前の日本語準備教育を提供するオンラインコースである。ライブレッスン型とオンデマンド型の 2 種類があり、初級 1 から中級 2 までの 4 レベル構成である。本発表では、OPJLC での実践を紹介する。オンライン日本語コース構築の過程で何を検討する必要があったのか、コース運営を通して、どのようなことが課題となっているのか、今後の方向性についても述べたい。また、OPJLC の特徴の一つに、オンライン教材を独自に開発したことがあるので、その活用の仕方についても紹介する。

本発表でオンライン日本語コースの構築や運営、オンライン教材開発の具体例を示すことによって、オンライン日本語教育のコースデザインや教材開発のためにどのような研究が必要になるかなど、意見交換のきっかけとしたい。

## 発表 2

## オンラインコンテンツは誰が作るのか？—研究の種を考える—

伊藤秀明（筑波大学）

本発表では、筑波大学が開発した「就活 JUMP スタート」についてコンテンツの開発過程を紹介した上で、ユーザーが研究として間接的にコンテンツ開発に関わっていく方法について述べる。

コンテンツ開発は機関や研究グループのプロジェクトであると考えられがちである。しかし、より良いコンテンツ開発は開発としてのプロジェクトのみでは終わらず、開発メンバーによるコンテンツ開発からユーザーの利活用へ、そしてユーザーの利活用から開発メンバーによるコンテンツ開発へ、という循環で成り立っている。そのため、コンテンツを開発していない人であっても、そのコンテンツを利用することで新たな研究を生み出す可能性を持っている。

本発表でコンテンツ開発に関わる間接的な研究として必要とされる視点についても示すことで、今後より多くの人々がコンテンツ開発研究に関わるきっかけを作りたい。

## 発表 3

## 「日本語研究・日本語教育文献データベース」にみる日本語教育学論文

今村志紀（国立国語研究所）

「日本語研究・日本語教育文献データベース」は、日本語学・日本語教育学分野における研究を支援する文献情報のデータベースで、国立国語研究所が提供している。今回は、トピックを「データベースの紹介」「データベースから見える日本語教育学論文」「今後の方向性など」の三つに大別して説明する。

まず「データベースの紹介」においては、このデータベースの源流である『国語年鑑』（1954-2009）と『日本語教育年鑑』（2000-2008）からの移行経緯や、他のデータベースと比べた際の本データベースの特徴、収録内容などを紹介する。

次の「データベースから見える日本語教育学論文」では、実際のデータベースでの検索結果などをもとに、日本語教育の研究者にとってどのような使い方ができるか、を具体的に紹介していく。そのうえで、「今後の方向性など」も示しながら、このデータベースが、日本語教育研究者の一助となれるよう、情報提供の機会としていきたい。



# 基礎文法と専門語彙を同時に学ぶ試み

— 介護現場での必要性から —

Attempt to learn basic grammar and specialized vocabulary at the same time:

A study on the Japanese language proficiency expected by Japanese caregivers from foreign caregivers.

神山 英子\*

KAMIYAMA, Hideko

キーワード：外国介護人材，基礎文法と専門用語の習得

Keywords: Foreign Caregivers, Acquisition of basic grammar and specialized terminology

## 1. はじめに（背景および目的）

日本では、2008 年から外国人介護人材の受け入れ制度を開始、拡大してきた。2024 年 10 月 1 日現在、介護関連では 4 種の受入の仕組みである EPA（経済連携協定）介護福祉士・候補者在留者（在留資格は特定活動）、在留資格「介護」、技能実習、特定技能が存在し、その在留者数は増加の一途を辿っている。それに伴い、外国人介護人材に関する研究も増え、介護現場で必要な「コミュニケーション」に対する課題が指摘されている（神山 2022）。また、「令和 4 年度外国人介護人材に関する実態調査結果<sup>※1</sup>」によると、「日本語の習得を十分にしてほしい」（EPA）、「日本語の理解や会話レベルにより、業務内容に制限がかかっている」（在留資格「介護」）、「日本語、慣習等が慣れるまで問題」（技能実習）、「日本語能力が低い」（特定技能）と、日本語能力が問題視されているという現状がある。

発表者は介護の日本語教育に携わっているが、日本人職員側から、外国人介護人材のコミュニケーション能力としての日本語の力を不安視する声も聞かれる。そのような中でも、明らかに日本語能力は低くとも、現場の日本人職員から評価が高く信頼されている外国人介護人材に遭遇することがある。そこで、なぜ日本語教師から見れば日本語能力が低くても、現場では評価が高くなるのか、現場での会話を再現してもらい、その要因を分析し、現場の日本人職員から高く評価される力をつける日本語教育の実現を目的とし、考察することにした。

\*1 都留文科大学語学教育センター特任准教授

## 2. 方法

まず、食事介助・排泄介助・移動介助・入浴介助・着脱介助という 5 場面で、利用者とのような会話をしているか、また、日本人職員とのような会話をしているか、という項目で、同時期に来日した来日 1 年目の 4 人の外国人介護人材（特定技能）に再現してもらい、どのような文法・語彙を使っているか分析した。その後、現場で評価の高い外国人介護人材が発話の際に使っていた文法と語彙の特徴を使った副教材を作成し、介護の日本語を学ぶ来日してすぐの外国人介護人材に授業を実施し、アンケートを行った。尚、本発表は、研究協力者に対し倫理的配慮を行っており、施設名や個人名が特定されないことを説明し、同意を得ている。

## 3. 結果および考察

現場で評価の高い外国人介護人材は、初級で学ぶ基礎文法（文型）を多用しながらも、同じ専門語彙を頻繁に使い、敬体と常体を同じ利用者に対して使っており、心理的な距離を縮めながらも敬意を表していたことがわかった。

逆に評価が低い外国人介護人材は、単語のみで基礎文法（文型）さえ使っておらず、ところどころ専門語彙を多く単発で使っており、文になっておらず、敬語も常に使っているという特徴が見られた（表 1）。

また、評価の高い外国人介護人材は、表情が豊かで笑顔が多く見られ、相槌などの非言語コミュニケーションも多用していた（表 2）。

表1 対利用者使用する文法項目と特徴

	評価が高い職員	評価が低い職員
「～ませんか」	よく使う	使わない
「～ましょう」	よく使う	少なく、平調
「～です」	使わない	よく使う
専門用語	文で複数回	単語で使う
敬語を使う	使ったり使わなかったり	常に使う
非言語コミュニケーション	表情・相槌	あまり見られない

表2 対職員使用する文法と特徴（報告場面）

	評価が高い職員	評価が低い職員
「～ので」と「～から」	使い分けている	「から」のみ使う
イントネーション	文頭・文末が自然	文末のみで不自然
複文の使用	使えている	単語のみが多い

結果を参考に、初級総合教科書を使用した副教材を作成し、介護の日本語の授業を3ヶ月間実施した。

#### 初級文法指導例

ニーズ：「不測の事態に対応してほしい」という

介護職員の要望に応えるために

文型：『みんなの日本語初級Ⅱ』第28課 練習B6

副教材①：レクリエーションに行きたくない利用者さんを「～し、～し」の文型を使って誘いましょう。

副教材②「～し、～し」の文型と「内出血・転倒防止・移乗」を使ってリーダーに利用者の報告をしましょう。

実施後に外国人介護人材にアンケートを行ったところ、「簡単な文法で言いたいことが言えるようになった。」「初級で学んだ文法を使った専門用語の覚え方がわかった。」という回答があった。

現行の指導方法として基礎文法を学んでから専門語彙を学ぶことが主流だが、時間が限られている外国人介護人材には、基礎文法と専門語彙を同時に学ぶ方が、効果が高いのではないかと発表者自身の中で問いが生じたこともあり、基礎文法と専門用語を同時に学ぶ副教材を作成した。理由としては、専門用語を記憶する現行の方法に関しては、場面は揃えてあるが、文脈とは切り離されており、「いつ専門

用語を使うべきかわからない」というアンケートでの自由記述があったからだった。

その後、ベトナム及びインドネシアの技能実習生送り出し期間で基礎文法と専門語彙を同時に学ぶ授業を試行した。ある送り出し機関の事業所からのクレームには、「日本語を知っているのに話さない。」というのがあり、講師へのアンケートでは、クレーム改善につながるとのコメントも得られた。

#### 4. おわりに

介護の専門日本語教育については、介護福祉士国家試験対策に関するものが多く、それも重要だが、国家試験を受験する前の入職後すぐの時期に現場で必要なことを考えれば、初級レベルのテキストに専門用語を使用した日本語教育を実施することも外国人介護人材にとって、有用な方法であることがわかった。本発表は、少人数での考察で、短期間の試みであることから、今後引き続き考察する必要がある。

(h-kamiyama@tsuru.ac.jp)

#### 付記

本研究は JSPS 科研費 20K20696 の助成を受けたものです。

#### 注

注1 公益社団法人全国老人福祉施設協議会介護人材対策委員会外国人介護人材対策部会

<https://mitte-x-img.istsw.jp/roushikyo/file/attachment/480997/pdf>

#### 参考文献

- 立川 和美：介護分野における専門日本語教育—教科書教材を中心に—，流通経済大学社会学部論叢，22（2），pp.77-94(2012)
- 神山 英子：介護施設に就労する技能実習生についての一考察—接触部面の視点から—，三重大学国際交流センター紀要，17号，pp.1-14(2022)
- 布尾 勝一郎・中川 健司・角南 北斗：「やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集」の開発と拡充—介護福祉士国家試験を目指す外国人介護労働者を対象として—，専門日本語教育研究，25巻，pp.91-98(2023)

# 高度外国人材の雇用において必要とされる

## 日本語能力と異文化理解

— 中小企業の外国人社員を対象として —

Japanese Language Proficiency and Cross-Cultural Understanding Required for Employing Highly Skilled Foreign Professionals: Focusing on Foreign Employees in Small and Medium-Sized Enterprises

大久保 雅子<sup>※1</sup>

OKUBO, Masako

キーワード：ビジネス日本語教育、異文化コンフリクト、事前教育

Keywords: business Japanese education, intercultural conflict, pre-training

### 1. はじめに

厚生労働省によると、日本の外国人労働者数は 2007 年度以降で過去最高を更新しており（2023 年 10 月末時点）、外国人材の雇用は年々拡大している。また、政府は経済成長や国際競争力の強化を目的として、高度な専門知識や技能を持つ外国人材（以下、高度外国人材<sup>1)</sup>）の受け入れを推進している。高度外国人材は近年増加傾向にあり、出入国在留管理庁の調査によると、2024 年 6 月末時点において、高度外国人材として在留資格を有する労働者数は 51,289 人に達している。

一方、中小企業の最大の経営課題である人手不足は年々深刻化していると言われている。そのため、外国人材の採用を検討している中小企業が多く存在する。現在、常時雇用従業員数に占める外国人材の割合は、大企業より中小企業の方が高いことがわかっている。出入国在留管理庁によると、2023 年に 100 人未満の企業等に就職した留学生は全体の 53.3%を占めていることがわかっており、中小企業で働く外国人材に関する問題点を明らかにし、それに対する解決策を検討することが急務であると考えられる。

安部(2019)は、中国人留学生と日本人社員間の日本の職場における異文化コンフリクトの認識の差を明らかにし、対話による異文化コンフリクト解決を目指したビジネス日本語教育を提案している。実際の異文化コンフリクトの事例を構築することができ

れば、さらに具体的な教育方法の検討が可能となると考えられる。

### 2. 調査

本研究の目的は、以下の三つを明らかにし、ビジネス日本語教育としての支援方法を検討することである。

- (1) 中小企業が求める高度外国人材の日本語能力
- (2) 中小企業が採用した高度外国人材の業務に対する評価
- (3) 中小企業が必要としている日本語教育支援

目的を達成するために、東京都内の中小企業 2 社を対象として、人材採用の最終決定を行う代表取締役社長に半構造化インタビュー調査を実施した。A 社（電子部品の製造）では 3 名の高度外国人材（台湾人 1 名、中国人 2 名）について、B 社では 2 名の高度外国人材（ともに中国人）について語ってもらった（表 1）。インタビューを録音した音声は文字化し、SCAT 分析を行った。

表 1 A 社、B 社が採用した高度外国人材

対象	出身	役職	最終学歴
A1	台湾	研究職	修士（日本）
A2	中国	研究職	学士（日本）
A3	中国	研究職	博士（中国）
B1	中国	研究職	修士（中国）
B2	中国	経営管理職	修士（日本）

<sup>※1</sup> 早稲田大学日本語教育研究センター准教授

### 3. 結果および考察

分析の結果、以下の点が明らかになった。

- ①高度外国人材としての実務に特化した高い日本語能力が求められる。
- ②高度な日本語能力を持つ高度外国人材でも、文化的なニュアンスや暗黙の了解に対応できていない。また、業務上の基本プロトコルに対する文化的な常識の違いが、業務に支障をきたす。
- ③文化的ギャップを克服するための事前教育が必要である。

本調査結果から、経営者は高度外国人材に対して、業務上の課題があると感じていることが明らかとなった。経営者が高度外国人材に求めていることとして、次の点が挙げられる。まず、高度外国人材として求められている役割を果たすには、現状の日本語能力に満足することなく、継続的に日本語能力を高めていく姿勢が必要である。次に、高度外国人材は異文化を理解するだけでなく、職場で求められる基本プロトコルを受け入れる柔軟性が必要である。最後に、入社前の段階で、事前教育等により日本の企業文化を理解することも必要である。

大久保(2023)でも指摘されているように、中小企業において独自に事前教育を提供することは難しいため、ビジネス日本語教育として異文化理解のワークショップや研修プログラムの開発等を行い、企業がこれらの情報にアクセスしやすい環境を整備していくことが求められている。

### 4. まとめ

現在、日本国内では高度外国人材の獲得支援のため、様々な取り組みが行われている。厚生労働省では「雇用管理改善に役立つ好事例集」、日本貿易振興機構（ジェトロ）では、「高度外国人材活用資料集」を発信し、企業に対する支援を行っている。しかしながら、本調査結果からは異文化コンフリクト等による問題点が存在することも浮き彫りとなった。安部(2009)では、従来のビジネス日本語教育では、常に年功序列や強固な上下関係を背景とした敬語表現等が重視されており、職場における現状が教育実践の場に取り入れられているとは言い難いというこ

とが指摘されている。今後、異文化コンフリクトの事例検討の数を増やし、高度外国人材の採用を検討している企業に情報を提供していくことが必要であろう。

(okubom@aoni.waseda.jp)

### 注

注1 日本貿易振興機構（ジェトロ）では、大学・大学院卒業同等程度の最終学歴を有し、企業において、研究者やエンジニア等の専門職、経営に関わる役員や管理職等に従事する人々を高度外国人材と見做している。

### 参考文献

- 1) 安部陽子：中国人留学生と日本人社員への意識調査から見たビジネス日本語教育の在り方—対話による異文化コンフリクトの解決を目指して—, 専門日本語教育研究, pp.37-44 (2019)
- 2) 大久保雅子：ビジネス接触場面からみた日本語教育に関するケーススタディ—日本企業で働く日本人・中国人社員へのインタビュー調査から—, 第26回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.1-2 (2023)
- 3) 厚生労働省：「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和4年10月末現在）」(2023)  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_30367.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_30367.html)  
(2024.11.29 閲覧)
- 4) 出入国在留管理庁：留学生の日本企業等への就職状況について (2023)  
[https://www.moj.go.jp/isa/applications/resources/10\\_0013.html](https://www.moj.go.jp/isa/applications/resources/10_0013.html) (2025.1.18 閲覧)
- 5) 出入国在留管理庁：高度外国人材の受入れ状況等について  
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001427054.pdf>  
(2025.1.18 閲覧)
- 6) 中小企業庁：深刻化する人手不足の現状  
[https://www.chusho.meti.go.jp/pamphlet/hakusyo/2019/PDF/chusho/03Hakusyo\\_part1\\_chap4\\_web.pdf](https://www.chusho.meti.go.jp/pamphlet/hakusyo/2019/PDF/chusho/03Hakusyo_part1_chap4_web.pdf)  
(2025.1.18 閲覧)
- 7) 日本貿易振興機構（ジェトロ）：高度外国人材とは  
<https://www.jetro.go.jp/hrportal/forcompanies/about.html> (2025.1.18 閲覧)

# 中級留学生はプレゼンテーションの発表資料に対して どのような質問を行うか

—TEachOtherS によるアノテーションからみて—

What Kind of Questions Are Asked About Presentation Materials?:

An Analysis Based on TEACHOTHERS Annotations

徐 煉<sup>※1</sup>

XU, Lian

キーワード：プレゼンテーション、質疑応答、質問、事実を問う質問、思考を刺激する質問

Keywords: Presentation, Q&A sessions, questions, fact-based questions, thought-provoking questions

## 1. はじめに

大学の日本語授業では、アカデミック・スキルの養成として批判的思考を促すことが目標の一つである。批判的思考能力とは、「問題を明確にし、議論を分析し、論理的・合理的に推論する技能」

(Ennis1987) を意味し、「質問する力」は批判的思考の基本であり、各種の授業に不可欠である (King1995)。しかし、中上級程度の留学生は日本語能力がまだ高くないにも関わらず、大学で質問をするような活動を行う場面があり、その対策が必要だと考えられる。そこで、本研究は、まず、研究に関する文章のプレゼンテーションにおける質疑応答に参加したことがない中上級留学生が発表内容に対してどのような質問を行うかを調査する。

## 2. 調査対象および方法

調査対象者は、某大学の国際教育センターで開講されたプレゼンテーションの授業を履修した中上級 (N2) 中国人留学生 6 名である。履修者は、週 1 回 90 分の授業に出席し、日本語の文章の形式・構造を習得したうえで 1000 字程度の研究計画を作成した。その後、プレゼンテーション予備練習の一環として、国立国語研究所が開発した TEACHOTHERS を用い、3 回の授業にわたって各自で 5 人分の研究計画に質問のアノテーションをした。

TEACHOTHERS は協同型の作文教育支援システム

であるが、一つの発表資料に複数の学習者が個別にコメントした後、全てのコメントを統合できるので、学習者がメンバー同士の質問を観察するのにも利用できる。本調査では、複数の学習者がまず各自で、画面に表示された発表者の文章の中で気になった箇所を選択して質問を入力する。本研究の分析対象は、学生 6 人の質問のアノテーションである。分析方法としては、道田 (2011) の質問カテゴリー (16 種類) を参考に質問を分類しその傾向と特徴を分析した。

## 3. 結果および考察

分析の結果、「事実を問う質問」が 44 個、「思考を刺激する質問」が 28 個であり、全体の 7 割を超えている。「事実を問う質問」のうち、「具体例」を求める質問が 84% でもっとも多く、「単純な説明を求める」「事実確認」の質問も少数観察された。

以下の例において、学生 T が行った「アンケートにどんな質問が聞きたいですか？」という質問は、「具体例」を求める「事実を問う質問」に該当する。

種類	計 (%)	下位分類
事実を問う質問	44(51.2)	単純な説明を求める/具体例/事実確認
思考を刺激する質問	28(32.5)	なぜ/目的/結果/特徴/方法/比較/もし/可能性/場合/批判/具体的質問/関係/非単純説明
その他	14(16.3)	意図不明/不理解

※1 国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員

「アンケート形式」という方法に着目し、その実施内容の詳細を尋ねようとする視点から、学生 T は研究計画の中で重要な箇所注目し、具体的な情報を求める能力を備えていることが分かる。また、ほかの留学生の「具体例」を求める質問も類似しており、いずれも計画書内のキーワードや一部の表現に基づき、詳細な確認や掘り下げを目的としている。このように、「具体例」を求める質問は、質問スキルの初期段階において取り組みやすく、未経験者でも行えると思われる。

選択した研究計画の箇所：

中国の年上の人、中国の若者、日本の年上の人、日本の若者この4種類の人のアニメに対する考え方とその理由をアンケート形式で集める。

質問【具体例】：

アンケートにどんな質問が聞きたいですか？(学生 T)

一方、「思考を刺激する質問」のうち、「なぜ」を問う質問が40%近くで最も多く、ほかには、「可能性」「具体的質問」「批判」「場合」「関係」の質問も現れたが、いずれも5個以下であった。

下記の例では、学生 W の「なぜ終助詞は人間関係に影響を及ぼすのですか？」という質問は、「思考を刺激する質問」の中で「なぜ」に該当している。このような質問は、研究計画全体の内容への理解を求めず疑問点のみについて行うことができるため、比較的作成しやすいものである。その一方で、「可能性」や「批判」「比較」などの質問は文章全体の理解や質問者自身の思考を要し、行うことが難しいため、少数にとどまる傾向が見られたと考えられる。

選択した研究計画の箇所：

具体的には、終助詞が対話の流れや人間関係にどのような影響を及ぼすかを考察することを目指す。

質問【なぜ】：

なぜ終助詞は人間関係に影響を及ぼすのですか？(学生 W)

このように、未経験の中上級留学生でも単なる例や背景情報を求めるといった「事実を問う質問」だけではなく、質問者と回答者の両方の批判的思考を活性化するような「思考を刺激する質問」も行うことができることが分かった。しかし、今回のデータからみれば、中上級留学生の質問の種類は、「具体例」と「なぜ」を問うものに集中しており、練習の回数を重ねても、状況が変わらなかった。

#### 4. おわりに

本研究では、研究計画のプレゼンテーションにお

ける質疑応答に参加した経験のない中上級留学生が行う質問の傾向を分析した結果、「事実を問う質問」だけでなく、批判的思考を活性化する「思考を刺激する質問」も行えることが確認されたことから、未経験者としての中上級留学生にも一定の批判的思考力が備わっている可能性が示唆された。しかし、今回の調査においては、質問の種類が限定的であり、一部のカテゴリーが観察されなかった。中上級留学生の質問の種類は、「具体例」と「なぜ」を問うものに集中しており、練習の回数を増やしても、まだ何種類の質問が少数のみまたは不使用であった。これは、教育現場において質問の種類やその重要性を明示的に教える必要性を示している。また、質疑応答におけるさらなる練習機会の提供や、授業でより多様な質問形式を取り入れる必要があるだろう。今後、異なる日本語レベルの学習者やより多くの留学生を対象とし、質問力の伸びを支える効果的な指導方法を開発したい。

(zyoren384@gmail.com)

#### 謝辞

本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のサブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」の一環として実施された。本研究においてご指導や貴重なご意見をいただいた山口昌也先生に感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1) Ennis, R.H.: A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities, In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Eds.), Teaching Thinking Skills: Theory and Practice, New York, W.H. Freeman and Company
- 2) King, A.: Ask to THINK-TEL WHY: A Model of Transactive Peer Tutoring for Scaffolding Higher Level Complex Learning, Educational Psychologist, Vol.32, No.4, pp.221-235 (1997)
- 3) 道田泰司:「授業においてさまざまな質問経験をすることが質問態度と質問力に及ぼす効果」『教育心理学研究』, Vol.59, No.2, pp.193-205 (2011)

# 大学初年次生の論証型レポートにおける文献活用

Source Use in Argumentative Essays by First-Year University Students

嶋田 大海<sup>※1</sup>  
SHIMADA, Hiromi

キーワード：論証型レポート、引用部の機能、文章への統合ミス

Keywords: Argumentative Essay, Rhetorical Functions of Citation, Error in Quote Integration

## 1. はじめに（背景および目的）

アカデミック・ライティングでは、引用の手続きによって他者の言葉を文章の目的に応じて組み合わせながら論を進展させる。こうした性質は、学術論文に限らず、学生のレポート課題でも同様である。広くテキストを読み、調べた情報を統合しながら自分の文章に引用して用いることは、レポート執筆における成功条件といえる（Sun et al., 2022）。

しかし、重要な文章技術でありながら、引用は大学初年次生にとって特につまづきやすい学習項目である。近年、大学初年次におけるアカデミック・ライティング教育が普及してきているが、時任ほか（2022）では「【引用】や【資料の活用】のように、【主張】の裏付けとなる他者の文章を【根拠】として自身の文章に取り入れる方法や、その活用」（p.40）の指導不足が指摘されており、引用の困難さはその形式面に加えて、論展開に即した外部情報の活用にあると推察される。文献の引用に当たっては、機械的な情報のつなぎ合わせでなく、「[引用元の]《情報を再定義》して自身の論に位置づけ」（佐渡島、2014、p.27）ることが書き手に求められる。こうした点が、困難さの背景にあるのだろう。

そこで、本研究では大学初年次生が書く論証型レポートに焦点を当て、文章における引用部の機能を調査した。また外部情報の活用に関する背景を踏まえ、どのような文章への統合ミスが見られるかも探った。なお、論証型レポートは先行文献の調査に基づく「文献研究型」と実験やフィールド・ワークを伴う「実証研究型」に分けられる（渡邊、2022、p.2）が、本研究の対象は「文献研究型」である。

## 2. 方法

ライティング基礎講義を受講した人文・社会科学系学部の大学初年次生 23 名（日本語母語話者）が書いた論証型レポートを分析対象とした。本講義では各回でアカデミック・ライティングの技術を項目別に指導し、学期末に 3,000 文字の論証型レポートを課した。なお、引用に関わる講義回では、APA 書式に準拠した文中引用と文献一覧の書き方を解説すると共に、「自分の主張をサポートする」「引用内容を否定して自分の主張の正しさを示す」などの基本的な文献の活用法を紹介した。

文章データの分析には、オープン・コーディングを用い、テキストに「繰り返し現れる事象と事象が現れる文脈」（箕浦、2009、p.24）に着目してコーディングを行った。手続きを次に示す。①文章中で文献の著者名や引用注が含まれる箇所<sup>※1</sup>を引用部とし分析セグメントを特定する。②各セグメントに対し、前後の文章<sup>※2</sup>を参照しつつ、文章における引用部の機能、及び文章への統合ミスに注目してコードを付与する。③コード同士の内容を比較して類似コードを合わせ、より抽象度の高いカテゴリーにまとめる。④カテゴリー同士の包括関係に着目して主カテゴリーと下位カテゴリーの階層構造を整理する。

## 3. 結果および考察

コーディングの結果、文章における引用部の機能として〈主張の根拠付け〉〈事実認識の裏付け〉〈問題提起の材料〉〈言説/調査の提示（下位カテゴリーに、a.提示のみ、b.要約あり、c.独自解釈あり）〉〈先行する引用部の補足〉〈言葉の説明〉から成るカテゴリー構造が明らかとなった。

<sup>※1</sup> 青山学院大学 助教

次の例では、1つの引用部が〈事実認識の裏付け〉と〈問題提起の材料〉として機能している。

例) 日本語教育の規模が世界で一番大きい国は中華人民共和国である。国際交流基金によると全世界の日本語教育機関の「13.0%が中国」(p.14)であり、「教師数については中国(20,220人)が最も多」(p.27)いとある。さらに、「学習者数も最も多いのは中国(1,004,625人)」(p.27)であると述べている。では、中国はどのような日本語教育を実施してきたのだろうか。(下線は引用部)

この例では、引用部となる「国際交流基金」からの調査データの記述が、引用前の「日本語教育の規模が世界で一番大きい国は中華人民共和国である。」の〈事実認識の裏付け〉となると同時に、引用後の「では、中国はどのような日本語教育を実施してきたのだろうか。」の〈問題提起の材料〉として機能している。

一方で、文章への統合ミスには〈引用部と前後の文章が論理的に繋がらない〉〈引用部が前後の文章から独立し浮いている〉の2カテゴリーが見られた。前者は、一見引用部は文章に組み込まれているように見えるが、よく読むと論理関係に不備がある場合である。一方で、後者は前後の文と引用部の繋がりが弱く、引用部が唐突に現れる印象を読者に与える。引用部が長文となる場合に多く、その結果、引用部全体が浮いているように見える。

アカデミック・ライティングに不慣れな大学初年次生の場合、情報を提示する帰属 (attribution) 以外の引用の機能に十分な活用が見られない (Wette, 2018) と報告が為されていた。本研究でも〈言説/調査の提示〉が最頻出のカテゴリーであった点は類似していた。しかし、文章に帰納的にコーディングを行った本分析では、情報の提示に限らず論展開を支える引用の機能が幅広く用いられていることが明らかとなった。これらは大学初年次生が書く文章の実態を反映した文献活用の類型であり、各機能を明示的に指導することで引用における外部情報の効果的な活用に意識を向けさせることが期待できる。

#### 4. おわりに

本研究では、大学初年次生が書く論証型レポートに焦点を当て、文章における引用部の機能、及び文章への統合ミスを調査した。ただし、あくまで読み手視点の分析であり書き手の意図を直接捉えたものではない。ライティング力を含む学生の個別性を考慮に入れつつ、レポート執筆過程における書き手の引用の意図や工夫を探るインタビュー調査は今後の課題である。

(h.shimada@aoyamagakuin.jp)

付記 本発表は、JSPS 科研費 20K13091 の助成を受けた。

#### 注

注1 引用の区切りは必ずしも文単位ではないため「引用文」でなく「引用部」を分析セグメントとした。なお、本調査では直接引用と間接引用は区別していない。

注2 参照する「前後の文章」の範囲は、分析セグメントを含む段落内に限定した。

#### 参考文献

- 1) 佐渡島紗織: アカデミック・ライティング教育と情報リテラシー—《情報を再定義》し意見を構築できる学生を育てる—, 情報の科学と技術, 64(1), pp.22-28 (2014)
- 2) 時任隼平・三井規裕・福山佑樹・西口啓太: 初年次のアカデミックライティングに関する実態調査, 関西学院大学高等教育研究, 12, pp.31-45 (2022)
- 3) 箕浦康子編著: フィールドワークの技法と実際 II 分析・解釈編, ミネルヴァ書房 (2009)
- 4) 渡邊淳子: 大学生のための論文・レポートの論理的な書き方 (改訂版), 研究社 (2022)
- 5) Sun, Q., Kuzborska, I. & Soden, B.: Learning to construct authorial voice through citations; A longitudinal case study of L2 postgraduate novice writers, System, 106, pp.1-14 (2022)
- 6) Wette, R.: Source-based writing in a health sciences essay; Year 1 students' perceptions, abilities and strategies. English for Academic Purposes, 36, pp.61-75 (2018)



# 留学生と日本人学生の指導に『高専留学生の実験レポートの書き方』テキストを用いた実践に関する報告

A practical report on the use of the textbook "How to write experiment reports for foreign KOSEN students" in teaching international and Japanese students.

○梅木 俊輔<sup>※1</sup> 山田 朱美<sup>※2</sup>  
UMEKI, Shunsuke YAMADA, Akemi

キーワード：専門日本語、アカデミックライティング、実験レポート、理工系、高専  
Keywords: Japanese for Specific Purposes, academic writing, test report, science and engineering, KOSEN

## 1. はじめに（背景および目的）

本研究は、中等教育年代における理工系の実験・実習に必要な学習言語の獲得を教育課題とする実践報告である。近年、学習言語に対する教育的取り組みは、留学生のみならず母語話者を対象としたものを含め増えつつある（バトラー，2011）。例えば、山田・加藤（2024）のように、予め添削ポイントのレクチャーを受けた日本人学生により、留学生が執筆した実験レポートの添削が可能となることや、添削することが日本人学生自身の学びとなることが報告されている。また、深川・深澤ら（2016）は、日本人学生と留学生に対する演習型の授業で、同一課題のもとに作成されたレジュメを比較分析した結果、研究テーマの設定、論理構成、引用の仕方、アカデミックな場面での日本語表現に程度の差はあるものの、日本人学生・留学生のいずれにも困難な点があり、指導が必要であることを指摘している。このように、日本語のアカデミックライティングに関する指導内容は、留学生と日本人学生との双方にとって一部共通していると考えられるが、特に理系分野のレポート作成に関し、両者間で具体的にどの程度、問題点の同異がみられるかという実態はあまり明らかにされていない。

そこで本研究では、山田・加藤（2024）を参考に、留学生向けに開発されたテキスト（山田・加藤，2022）を用いた指導を日本人学生にも同様にを行い、

留学生と日本人学生により作成された実験レポートを比較分析し、問題点の同異を明らかにする。

## 2. 実践の概要および分析方法

テキストの構成は、「1章 実験レポート作成のための一般的な注意事項」（内容は日本人学生向けの指導と同じ、解説動画付き）、「2章 良い実験レポートの書き方のポイント」（留学生特有の間違い事例の指摘）、「3章 留学生の実験レポートの間違いの分類とその理由」（5章の添削事例を分類し解説したもの）、「4章 アンケート」、「5章 実験レポート添削見本」、「6章 用語集」から成り、実験動画「斜面上の物体の運動」（物理）を含む。まず日本語教員がテキスト1～2章を中心に両学生に講義を行った上で実験動画を視聴し、実験内容の理解を確認後、各自がレポートを執筆した。なお、解説と実験の動画は各自の視聴を可とし、レポート執筆所要時間は2～4時間程度であった。

分析対象とするデータは、2024年から2025年にかけて国内高専の2年もしくは3年生に在籍する日本人学生および留学生（タイ2名、ラオス1名、ブラジル1名、いずれも日本語能力試験N3相当、もしくはそれ以上）が執筆したレポート8本（各4本）である。当学生たちの在籍高専では4年生の授業に実験レポートや卒業論文の書き方の基礎を学ぶ科目があるが、当学生たちはいずれも、そうした授業による体系的指導をまだ受けたことがない学生である。

分析にあたっては、まず山田・加藤（2022）の添削事例の分類をもとに、「日本語表現」、「書式（レポ

※1 仙台高等専門学校総合工学科 准教授

※2 津山工業高等専門学校海外展開促進 特命准教授

ート形式)」、「内容」という3つの観点から成る新たな分類を設定した。次に、レポート8本に対し予め日本語の教員1名と物理の教員1名が添削し得られた事例について、上記の観点から日本語教員1名が分類した。これをもとに、留学生と日本人学生双方における問題点を検討した。ただし、データ数が限られることから、量的分析は参考に留め、各添削事例の特徴に関する検討を中心に行った。

### 3. 結果および考察

図1と図2は日本人学生と留学生の各レポートに指摘された添削事例のうち、各全体の5%以上(日本人学生76件内4件以上、留学生106件内6件以上)あったものを頻度順に並べたものである。留学生に多かった事例のうち、「箇条書きは基本的に用いず、段落に分けて書く(字下げ)」、「用語を適切に用いる」、「図、表の番号と名前を書く(図は下側、表は上側にセンタリングする)」といった点については、日本人学生にとっても共通の困難点となることが示唆される。特に「箇条書きは基本的に用いず、段落に分けて書く(字下げ)」のように、同一段落内で改行し、字下げせず、その後の文を続ける事例が両学生ともに多く見られた。よって、段落を指導する際には、字下げしなければ、箇条書きと変わらないことを学生に認識させる必要がある。

一方、日本人にはない事例として「助詞」と「活用」の誤りがあった。また図2に記載はないが「コロケーション」の誤りが3件見られた。このように留学生固有の問題もある。さらに「考察の記述は、結果から得られる意見や判断を記述する」等、誰も間違わなかった項目が幾つかある。これらはテキストによる事前指導の有効性を示唆する。

### 4. おわりに

本研究は一つの試みとして、留学生向けテキストを用い日本人学生に指導した結果、特にレポートの書式や内容に関し、日本人学生に対しても一定の教育効果があることがわかった。また留学生には助詞やコロケーション等の指導が必要となる。本研究は、多様な学生に対しライティングを指導する現場で、

異なる専門の教員が協働する際の参照事例として専門日本語教育の発展に寄与すると考えられる。

(s-umeki@sendai-nct.ac.jp)

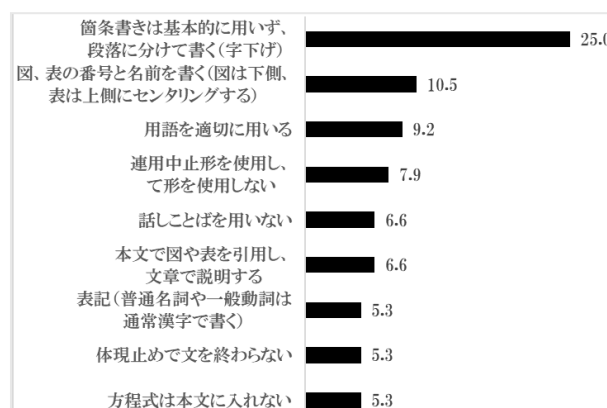


図1 日本人学生 (数値は全体の割合%)

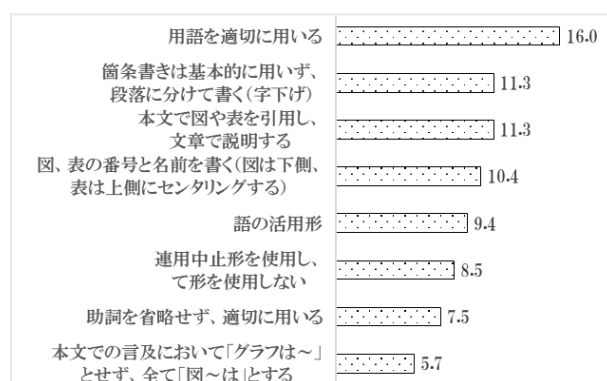


図2 留学生 (数値は全体の割合%)

### 付記

本研究はJSPS科研費JP21K13597の助成を受けた。

### 参考文献

- 1) バトラー後藤裕子：学習言語とは何かー教科学習に必要な言語能力，三省堂（2011）
- 2) 深川美帆・深沢のぞみ・札幌寛子・濱田美和：外国人留学生と日本人学生へのアカデミック・スキル指導についての考察ー演習型授業におけるレジュメの分析から一，金沢大学留学生センター紀要，Vol.19，pp.57-68（2016）
- 3) 山田朱美・加藤学：ここがポイント！高専留学生の実験レポートの書き方，津山工業高等専門学校（2022）
- 4) 山田朱美・加藤学：「高専留学生の実験レポートの書き方」テキストを用いたレポート執筆指導とその効果，第26回専門日本語教育学会研究討論会誌，pp.11-12（2024）

# 論文読解における中級学習者の主語のとらえ方の変化

The change of the identification of the subject in reading comprehension of research papers  
by a Japanese language learner at an intermediate level

桑原 陽子<sup>※1</sup>  
KUWABARA, Yoko

キーワード：論文読解、主語、中級学習者、縦断研究

Keywords: reading comprehension of research papers, subject, Japanese language learner at an intermediate level, longitudinal study

## 1. はじめに

本研究の目的は、学習者の論文の読み方の変容の一端を明らかにすることである。中級学習者1名を対象とした半年間にわたる論文読解の観察記録から、主文の主語の特定のしかたに注目し、時間の経過とともに主語と述語の対応関係の把握が正確になること、学習者の読みの方略が変化していることを示す。

日本語学習者の読む過程の分析は横断的研究が多いが(野田, 2020)、長期的に読みの過程を観察した研究も存在する。桑原(2024, 印刷中)は約半年の論文読解の観察データをもとに、名詞修飾節構造の読みの変化を分析した。その結果、文頭から逐語的に読む読み方から、文全体の構造を捉えようとする読み方になり、修飾節の範囲の特定が正確になっていくことを示した。

本研究では、文の構造の把握に不可欠な主文の主語の特定のあり方がどのように変化していくのかを記述する。

## 2. 方法

調査対象は、日本の大学院で教育を研究する非漢字系中級日本語学習者(以下Mとする)1名である。調査は、2022年9月から2023年2月までの18回で、1回の調査は1~2時間である。調査に使用した論文(1)(2)はM自身が選択した。

(1) 長崎栄三：算数・数学と社会・文化をつなげることの意義，算数・数学と社会・文化のつながり，明治図書出版，pp.9-18 (2001)

(2) 森川禎彦：自律的な学びへのイノベーション 探求するコミュニティを培う，研究紀要，4，pp.1-8 (2022)

調査は対面で行った。辞書やアプリを使って普段通りに論文を読み、1~2文ごとに理解した内容を日本語で説明してもらった。調査者はMが話した内容について質問し、特に主文の主語、動詞の動作主、修飾関係をどのように理解しているか確認した。調査中の様子は、Mの許可を得て録画した。

## 3. 結果および考察

Mが読んだ資料のうち節タイトルと箇条書きを除く225文と、録画されたMの発話や資料への書き込みなどの行動全てを分析対象とする。第1~9回を調査前半、第10~18回を調査後半とし、主文の述語に対応する主語が正しく特定できているかを分析した。結果を表1に示す。後半のほうが前半より主語を正しく特定できるようになっていることがわかる。

主語が正しく特定できなかった主要な原因には、次の3つが挙げられる。

表1 主語の把握の状況

	調査前半	調査後半
正しく特定できた事例数	42(35.6%)	49(45.8%)
正しく特定できなかった事例数	49(41.5%)	35(32.7%)
不明	27	23
総数	118	107

※1 福井大学グローバル人材育成研究センター准教授

(3) 主語が長い名詞節・名詞修飾節で、節中に助詞「が」「は」を含む。

(4) 主語が助詞「も」で示される。

(5) 主語が明記されていない。

これらの難しさを克服するために M が用いた方略は、次のようなものである。

(6) 文頭から逐語的に解釈するのをやめ、長い名詞節・修飾節の存在を意識して文の構造を掴む。

(7) 書かれていない主語について確認する。

(8) 「「が」の前が主語」のような明示的な手がかりを用いる。

(6)の「文頭から逐語的に解釈する」とは、(a)に対する(b)のような読み方である。理解できる部分を取り出して最初からつなげている様子がうかがえ、文の主語(下線部分)が意識されていない、意味に依存した読み方(丹羽, 2018)と言える。このような読み方は調査前半、特に初期に見られた。

(a) 算数・数学において社会や文化に目を向けることの必要性は、国立教育政策研究所が行ってきた IEA(国際教育到達度評価学会)の国際数学教育調査の結果に明らかである。この結果からは、わが国の算数・数学教育の学力水準の高さを示す証拠のほかに多くの知見が得られてきた。 (第2回)

(b) これは、社会と文化を目を向けることの必要で、国際教育の調査は、我が国、日本の学力のレベルが高いということ。

それに対して(c)に対する(d)は、主語と述語から成る最も単純な文型を捉えており、(6)「長い名詞節・修飾節の存在を意識して文の構造を掴む」読み方の例である。〈〉は M の行動で、波線部分は「意図された」の内容を示す名詞節である。

(c) ラーニング・コンパスという比喻は、生徒が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見いだす必要性を強調することが意図されたものである。 (第10回)

(d) 比喻は、…〈波線部分を指す〉意図されたもの M は波線部分を飛ばして、主語「比喻は」と述語「意図されたものである」が対応していることを捉

えている。また、(c)を読む際に「比喻は」の「は」を○で囲んだ。助詞を○で囲む行為は(8)と関わる。

次の(e)に対する(f)も、まず文の構造を捉えようとした例である。

(e) これからの社会を自ら切り拓いていくことができる資質・能力を、この義務教育課程の中でいかに子どもたちに培わせていくことができるかが<sup>i</sup>今日の大きな教育課題となっている。

(第14回)

(f) 前のことが全部、今の課題となっている。「が<sup>i</sup>」の前。「ことが」の前。培わせていくことが、課題となっている。

M は最初「が<sup>ii</sup>」に、その後「が<sup>i</sup>」に○をつけ、文の前半部分が長い主語になっていることに注目した。「が<sup>i</sup>」が主語を示すという誤った解釈をしたのは、(3)で示したように、(e)の主語が長い名詞節で節中に助詞「が」を含んでいることによる。

(d)(f)は、文全体の構造を意識しながら助詞に注目して主語を捉えようとした点で、(b)と大きく異なる。このような読み方は、調査後半で見られた。

M はこの調査以前に論文を読んだ経験がなく、特に、主語が長い名詞修飾節・名詞節で文の大半を占めることに対して戸惑う様子が観察された。日本語の読解教材にはない長い名詞修飾節や、主語と述語の距離の遠さなど、生の論文を読むことに特化した練習が必要であることが示唆される。

(kuwayo@gmail.com)

#### 参考文献

- 1) 桑原陽子：非漢字系中級学習者の名詞修飾節の読みの変化, ヨーロッパ日本語教育, 27, pp.145-157 (2024)
- 2) 桑原陽子：英語系中級学習者の名詞修飾節構造理解のプロセス-英語への翻訳プロセスを手がかりに, ヨーロッパ日本語教育, 28 (印刷中)
- 3) 野田尚史：日本語学習者の読解過程, ココ出版 (2020)
- 4) 丹羽順子：日本語学習者の読解における主語の特定-中級学習者と上級学習者の比較, 佐賀大学全学教育機構紀要, 6, pp.101-116 (2018)

#### 付記

本研究は JSPS 科研費 JP20K00724 の助成を受けた。

# 英語で研究する工学系留学生は なぜ日本語を必要とするか

—留学生と教員のニーズ調査を踏まえて—

Why do International Students of Engineering who Conduct Research in English Need to Learn Japanese:

Based on a survey of the needs of international students and faculty

○古市由美子<sup>※1</sup> ○牛山和子<sup>※2</sup> ○猪狩美保<sup>※3</sup> ○劉羅麟<sup>※4</sup>  
FURUICHI, Yumiko USHIYAMA, Kazuko IGARI, Miho LIU, Luolin

キーワード：大学院生、言語使用、実態調査、日本語力不足、研究生活上の困難

Keywords: Graduate students, Language use, Fact-finding survey, Lack of Japanese language skills, Difficulties in research life

## 1. はじめに

近年、日本語学習者のニーズはますます多様化・複雑化しており、それに伴い日本語教育を取り巻く環境にも大きな変化が見られる。また、大学の国際化が進む中で、大学院留学生への研究支援と日本語教育との連携、専門分野の教員（以下、専門教員とする）と日本語教員との協働の意義や重要性が指摘されている（太田編 2023；村岡編 2023；阿久澤ほか 2024）。

工学系研究科の大学院留学生（以下、工学系留学生とする）は、主に英語で研究活動を行っている。また、研究・教育の場である研究室で、一日の大半を過ごしており、日々実験などに従事しているため、日本語学習に割ける時間が限られている。

このような状況下で、工学系日本語教育の位置づけやあり方を明確にするためには、専門教員と日本語教員との間で共通理解を深め、協働体制を構築することが必要不可欠である。これにより、留学生教育をより効果的かつ円滑に進めることが可能になる。

本研究では、工学系留学生と専門教員との双方の視点からニーズを把握し、それに基づいたカリキュラムを作成することで、教育効果を高めることを目指す。そのため、本発表では、工学系留学生の言語使用実態を調査し、日本語がどのような状況で必要とされるかを明らかにすることを目的とする。

※1 東京大学大学院工学系研究科教授

※2 東京大学大学院工学系研究科特任准教授

※3 東京大学大学院工学系研究科特任講師

※4 東京大学大学院工学系研究科特任助教

## 2. 調査のフィールドと調査方法

東京大学大学院工学系研究科日本語教育コースは、主に工学系研究科、情報理工学系研究科の大学院生を対象とし、初級から上級まで 7 レベル 36 コースを開講し、年間延べ 1100 余名が受講している。本研究では、日本語教育コースを受講した工学系留学生と、同研究科の専門教員を調査対象とする。

調査①は、2019～2023 年に日本語教育コースの受講者を対象に実施した「言語使用実態調査（日／英）」である。そのうち、工学系留学生 523 名の回答データを基に、量的・質的に分析する。調査②は、2024 年に専門教員を対象に実施した「日本語教育ニーズ調査」である。123 名の教員から得られた回答データを量的・質的に分析する。なお、質的分析は分析基準の整合性と分析の妥当性を高めるために、調査者 4 名が共同で行った。

上記の調査に基づき、研究室における言語使用の実態と、日本語使用においてどのような困難点があるのかを明らかにする。

## 3. 結果および考察

まず、研究室における言語使用の分析結果について述べる。工学系留学生を対象とした調査①では、研究について話す際の英語の使用率は、教員とは 70-87%、日本人学生とは 64-73%、留学生間では 77-93% である。いずれも、英語が最も多く使用されており、5 年間の使用傾向に変化はほぼない。研究場面を細分化すると、

英語の使用率は、研究発表では 41-56%、研究に関する資料では 44-58%、打ち合わせでは 34-50%である。教員を対象とした調査②では、研究について話す際の英語の使用率は 60%である。

一方、工学系留学生在が研究室で雑談する際の英語の使用率は、教員とは 60-68%、日本人学生とは 37-53%、留学生同士では 69-82%である。調査②では、専門教員が留学生との雑談に使う言語は、英語が 50.4%、日本語が 39%、日英両方が 9.8%となっている。いずれも雑談の際は、研究について話す時ほど英語が使用されていない。このように、人間関係の構築に必要な雑談の場面においては、英語使用がまだ優勢であるものの、研究について話す場面と比べて日本語の使用が増えていることがわかる。

次に、工学系留学生在が目指す日本語のレベルと、教員が求める日本語レベルの分析結果である。調査①では、工学系留学生在が目指す日本語のレベルは、初級が 3-8%、中級が 17-27%、上級・超上級が 65-79%である。一方、調査②では、専門教員が留学生に求める日本語のレベルは、初級が 43.9%、中級が 30.9%、上級・超上級が 9.7%である。両者を比較すると、上級・超上級を目指したい工学系留学生在と異なり、専門教員は初級や中級を求めている場合が多い。ただし、レベルは異なるものの、日本語でのコミュニケーション能力が両者から求められている。

最後に、日本語ができず困る場面の分析結果である。工学系留学生在による自由記述を場面によって分類した結果、A.打ち合わせ、B.授業、C.実験、D.書類手続き、E.研究発表、F.履修選択、G.イベント、H.研究室での雑談、I.研究に関わる会話、J.テキストコミュニケーション、K.コミュニケーション全般、という 11 の場面があった。調査②では、専門教員に対して研究室での工学系留学生在が日本語ができないことが要因で困る場面について質問した。分析した結果、調査①の工学系留学生在のデータでも見られた A.打ち合わせ、D.書類手続き、E.研究発表、G.イベント、H.研究室での雑談、K.コミュニケーション全般の 5 つと、専門教員ならではの L.研究指導、という 6 つの場面があった。

さらに、調査①工学系留学生在が日本語使用において具体的に何に困っているかを明らかにするために、行

為に焦点を当てて再分類した。その結果、留学生は日本語を使って自身の意思を「表現」すること、相手の意図を「理解」すること、他者と双方向で「交流」すること、議論や活動に「参加」すること、研究に必要な事務手続きや実験作業を「実行」することができずに、困っていることがわかった。

#### 4. おわりに

工学系留学生在は主に英語で研究を行っているが、相手や場面に応じて日本語の使用を試みている。しかしながら、学内外で求められる日本語能力に対して実際の日本語力が不足していることが明らかになった。この日本語力不足という言語面の問題は、工学系留学生の情意面や実践面にも影響を及ぼしている。工学系留学生在が自己実現を達成するためには、日本語によるコミュニケーションが不可欠であり、日本語教育の重要性が示唆された。今後も、こうした工学系留学生のニーズに対応する具体的なカリキュラムの開発を引き続き進めていきたい。

また、日本語使用における困難点を克服するために、工学系留学生在は上級・超上級と高い日本語力を目指しているにもかかわらず、専門教員は初級・中級で十分だと考える場合が多い。この両者の認識の相違を解消するため、今後は、専門教員との協働体制を一層強化し、日本語教育に対する理解を促していくことも必要であろう。

(yumiko.furuichi@jlcse.t.u-tokyo.ac.jp

kazuko-ushiyama@jlcse.t.u-tokyo.ac.jp

igari.miho@jlcse.t.u-tokyo.ac.jp

liu-luolin@jlcse.t.u-tokyo.ac.jp)

#### 参考文献

- 1) 阿久澤弘陽・河内彩香・佐々木幸喜・河合淳子「理系教員が持つ留学生教育観の構造—留学生プログラムを運営する理系教員の葛藤—」『日本語教育』、187号、pp.74-89 (2024)
- 2) 太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美(編)『日本で学ぶ理工系留學生—教育・研究・留學生生活—』ココ出版(2023)
- 3) 村岡貴子(編)『大学院留學生への研究支援と日本語教育—専門分野の違いを超えて—』ココ出版(2023)

# 責任を伴う発信活動が伝達技能向上にもたらす効果

How awareness of responsibility may influence performance in oral communication

高木 佳奈<sup>\*1</sup>  
TAKAGI, Kana

キーワード：情報伝達、責任意識、聞き手配慮、書き取り

Keywords: Transmission of information, Awareness of responsibility, Consideration for the partner, Note taking

## 1. はじめに（背景および目的）

本研究は、学習者を話し手と聞き手に分け、話し手から提供される情報を聞き手が書き取る、という活動を行い、書き取ったものを成果物として評価の対象とすることで話し手側に伝達の責任が発生するという状況を作る試みについて報告する。責任が発生することにより、聞き手の理解に対する配慮を促進し、伝達効率への意識が高まることを期待した。高度人材として日本企業等で活躍することを目指す留学生には、正確な理解を伴わなくても楽しければいいという「おしゃべり」の段階を脱し、複合的な説明や自分の見解を論理的に聞き手の理解に配慮しつつ確実に伝える技能を獲得する必要がある。高木・山路(2020)は、工学系大学院留学生を対象に、運用技能の差をもたらす環境要因を分析し、口頭技能は気軽な雑談のみでは向上しにくい、実験の手順の指示など、伝達の質が結果を左右するような責任とリスクを伴うコミュニケーションを行う経験によって向上する可能性があることを示した。そこで、本研究では、同様に責任を伴うコミュニケーションを教室内で擬似的に発生させることを試みた。

## 2. 方法

責任を伴うコミュニケーションを教室内で擬似的に発生させる手段として「話し手から提供される情報を聞き手が書き取り、書き取ったものを成果物として聞き手の評価の対象とする」という方法を取った。伝達される情報の質と量が一定以上となるよう、活動に先立って教師が読み物を提供し、クラスで理

解を共有する機会を持った。伝え手は、提供された話題に関して類似／関連する事例や自身の見解を伝えるのだが、伝え手の伝達が必要を得なければ、聞き手は情報を得ることも書き取ることもできない。すなわち話し手の立場に立てば、自分の伝達の出来が悪いとクラスメートの学ぶ機会を奪い評価にも影響を及ぼすことになる。各回の進め方は以下のとおりである。1. 教員が提供する読み物を読み話題を共有する 2. 話題に関連する質問をきっかけに情報交換を行い、知識や考えを深める。3. 責任を伴う発信活動として前段階の情報交換で使った質問の中から教員がひとつ選び、学生は順に所感や自分の知る事例の説明などを行い、他の学生の説明をまとめ、「書き取りシート」に書き留める。活動後は「振り返りシート」に自分の説明の出来や次回気をつけたことを記入させ、学習へのメタ認知を行う機会を提供し、「書き取りシート」は伝え手に提供して自身の伝達の内省を促した。週1回全15回のコース中にこれを5回実施した。調査対象者は2023年短期留学生コースにおいて、この活動に全回参加した中上級レベルの2名の協力者A・B(Aは学部3年生、Bは4年生)である。協力者全員に研究に使用する旨口頭及び文書で説明を行い許諾を得た。本発表では第1回と第5回の成果と関連資料について質的分析を行った結果を示す。データは伝達活動の録音と書き起こし、書き取りシート、振り返りシート、コース開始時と終了時の意識調査、コース終了時に実施した質問紙調査の結果を含む。談話構成に関わる情報提示順、接続詞・接続助詞、発音、使用語彙、聞き手配慮に関わる言い換えに着目し、分析した。第1

<sup>\*1</sup>九州工業大学 非常勤講師

回と第5回はデータを比較するために同じ話題を使った。

### 3. 結果および考察

AもBも、第1回と第5回の伝達活動において談話構成に大きな変化が見られた。表1に第1回と第5回の発話例を示す。第1回において、Aは城が作られた経緯について語っている。そこでは、「チョンジョ」「先代の王」「先王の息子」の3名の人物が登場し、焦点が一貫しないため、聞き手にとって理解しにくい。「でも」「(それ)なら」と言った接続詞も使用されているが、それに呼応する情報は出現せず、聞き手にとって情報の相互関係が十分に理解できない。使用語彙は「先王」など聞き手にとって難易度の高いものも見られた。一方、第5回においては、Aは一貫して「チョンジョ」の視点で語り、接続表現を適切に使って事柄同士の関係や因果関係を示している(\_\_\_\_の部分)。聞き手配慮の面では、使用語彙も聞き手の理解が得られやすいものに変化させていた。時代背景の説明では「チョンジョが子どもの時」と述べた後に「おじいちゃんが王様の時」と言い換えることで情報を段階的に示し、複雑な内容を聞き手の理解に配慮しながら確実に伝えようとしている(.....の部分)。Bも、第1回と比べて第5回では焦点が一貫して語られるようになり、接続表現を適切に使って事柄同士の関係や因果関係を示し、聞き手の理解を得られやすくしていた。また、聞き手の理解を促すための言い換えも質と頻度が上がっていた。振り返りでは「どうやってわかりやすく説

明できるか? (B)」など聞き手の理解を得ることを重要目標と認識していることが窺われた。質問紙調査には「わざと難しい単語を使うのはむしろよくない(A)」といった記述が見られ、聞き手の側から考える意識が高まっていた。書き取りも回を重ねるにつれて質も量も向上した。この活動への学習者評価は「自分でもどのくらい(聞き手が)理解したかわかるし発表のどんな部分に問題があるのかわかるし役に立つ」など極めて肯定的だった。

### 4. おわりに

口頭の伝達と書き取りを組み合わせた活動は、責任を負って伝達活動を行う状況を作り出し、特に聞き手の理解に対する配慮の重要性を認識させる可能性があることが示唆された。今後さらなる検証を行い伝達技能向上を可能にする方法の開発へとつなげていきたい。

(kanatakagi.m@gmail.com)

### 参考文献

- 1) 高木佳奈・山路奈保子：口頭運用能力の差をもたらす環境的要因の分析-日本語コース修了後の追跡調査から-、語用論研究の可能性, pp.425-438, (2020)

表1 第1回と第5回の差

	第1回	第5回
A	韓国では、だいたい城は、ハニャンという今のソウルしかありませんでした。でも、なんかお一、チョンジョというチョソン[朝鮮]の王が実は先代の王の孫です。なら、その間の先王、先王の息子は実は先王に捨てられて、スウォンという地域捨てられました。その理由で先王の孫、孫という王、チョンジョという王がスウォンに来て、城を作ったなんです。	チョンジョは、あの城を作った理由は、昔からその理由が始めます。 <u>チョンジョが子どもの時、子どもの時のあの自分のおじいちゃんが王様の時、そのおじいちゃんから自分のお父さんが死にました。あの、<u>で、自分が王様になったとき、あの、そのソウルにある自分のお父さんの墓を運ぶために、</u>もっと楽な地域に運ぶために、</u> そのスウォンでハサンという城を作りました。



# 第一言語の違いによる文章の見方・記憶に関する研究

A study on how people perceive and remember texts depending on their first language

○小林 紗寧<sup>※1</sup> 高島 一郎<sup>※2</sup> ローズ 平田 昌子<sup>※3</sup>  
 KOBAYASH, Sayane TAKASHIMA, Ichiro ROSE HIRATA, Masako

キーワード：多文化共生、アイトラッキング、文章の認識、書字方向、記憶定着率

Keywords: Multicultural coexistence, eye tracking, text recognition, writing direction, memory retention

## 1. はじめに（背景および目的）

現代、在留外国人の増加に伴い「やさしい日本語」の必要性が高まっている。現に、2020年からのコロナ禍で在留外国人は一時減少したものの、2022年末にはコロナ前の人数を超え、2023年末での在留外国人数は341万992人と過去最高を更新している。しかし縦書きに不慣れな日本語学習者にとっては、4種の文字と2種の書字方向がある日本語の複雑さにより、日常生活や進学の足枷になるケースが多い。そのため日本社会における文化的障害を乗り越える方法を考える上で、書字方向による文章の見方や記憶定着率の違いを解明することは重要な課題である。以上の点から、本研究では横書きと縦書きの2種の書字方向の文章を見た際の視線の動きを解析し、書字方向の認識の仕方を検討する。また、書字方向の違いにより記憶への定着に変化が現れるのかを検証する。書字方向の認識の仕方の実験を行うにあたり以下2つの仮説を設定した。  
 仮説1：直前に読んだ書字方向の影響を受ける  
 仮説2：文章ブロック（縦長／横長のフレーム）の影響を受ける

## 2. 方法

被験者：ベトナム人8人（男性3人，女性5人，平均年齢 21.4 歳，SD=0.86）、ネパール人8人（男性5人，女性3人，平均年齢 22.6 歳，SD=0.99）、日本人8人（男性8人，平均年齢 24.3，SD=7.43）。

手続き：被験者にモニターに映し出される文章を黙読させた。文章は、正方形縦書き→横長縦書き→正方形

横書き→縦長横書き→正方形横書き→縦長横書き→正方形縦書き→横長縦書きの順に表示。また文章ブロックが分かりやすいよう文章にフレームを付けた。この文章を黙読する際の視線移動をアイトラッカー（Gazepoint,GP3 HD）で計測した。実験10分後と7日後、黙読した縦長横書きと横長縦書きの文章に関するテスト（各3問合計12問）を実施し、それぞれの書字方向の記憶定着率を解析した。

## 3. 結果および考察

正方形縦書きの文章を黙読した直後に横長縦書きの文章を見た際に視線が左上に動いた場合は仮説2、右上に動いた場合は仮説1とする。同様に、正方形横書きを黙読後、縦長横書き文章の左上に視線が移動した場合は仮説1、右上の場合は仮説2とする。上記のように実験結果を解析し、書字方向の認識方法においては3か国共通して文章ブロックの影響を受けやすいことが確認できた。解析結果を国別にまとめたものを表1に示した。さらにベトナムとネパールについて、日本語能力別にまとめたものが表2である。ネパールは上位・下位群ともに仮説2が80%近く、またベトナム上位群も仮説2の割合が高く、日本人と似た傾向が見られた。一方、下位群は仮説1が仮説2を上回る結果となった。理由としてネパール・ベトナムの上位群はN1レベルであり、試験対策の読解教材などで横縦両方の書字方向に接する機会がある。

表1 国別の書字方向の認識方法

	仮説1	仮説2
ベトナム	44.4%	55.6%
ネパール	22.7%	77.3%
日本	20.0%	80.0%

※1 第一工科大学工学部 学部生

※2 第一工科大学工学部 教授

※3 第一工科大学工学部 准教授

またネパール下位群も新聞配達の奨学生をしており、縦書きに触れる頻度が高かった。そのため、文章ブロックによりある程度書字方向が決まるという背景知識を持っていた可能性があり、日本語母語話者に近い反応がみられたと考える。ベトナム下位群はN3～4レベルのため、学習場面において縦書きの文章は稀で、さらに、まだ多様な日本語の文章スタイルに触れる頻度も少ないため、日本語の文章は横書きだという思い込みがある可能性が高く、文章ブロックの影響が他グループに比べて低かったと考えられる。

書字方向の違いによる記憶定着率の違いについて、10分後と7日後に行ったテストの結果を国別に表3、4に、ベトナム・ネパールの被験者については、日本語能力別の結果を表5、6にまとめた。

表2 日本語能力別の書字方向の認識方法

	仮説1	仮説2
ベトナム上位	33.3%	66.7%
ベトナム下位	55.6%	44.4%
ネパール上位	23.1%	76.9%
ネパール下位	22.2%	77.8%

表3 書字方向による記憶定着率の違い 10分後

	横書き	縦書き
ベトナム	77.1%	66.7%
ネパール	45.8%	68.8%
日本	70.83%	79.2%

表4 書字方向に記憶定着率の違い 7日後

	横書き	縦書き
ベトナム	66.7%	70.8%
ネパール	39.6%	45.8%
日本	56.3%	72.9%

表5 記憶定着率の違い 10分後：日本語能力別

	横書き	縦書き
ベトナム上位	70.8%	87.5%
ベトナム下位	83.3%	45.8%
ネパール上位	66.7%	79.2%
ネパール下位	25.0%	58.3%

表6 記憶定着率の違い 7日後：日本語能力別

	横書き	縦書き
ベトナム上位	54.2%	79.2%
ベトナム下位	79.2%	62.5%
ネパール上位	37.5%	50.0%
ネパール下位	41.7%	41.7%

遅延テストにおいても縦書きに慣れている日本語母語話者、ネパール上・下位、ベトナム上位群は、縦書きのほうが、記憶定着率が高い結果となった。

書字方向による読み速度の測定結果は、共通して縦読みの方が遅く、横読みと比較してベトナム+7秒、ネパール+4秒、日本+1.9秒となった。日本語に不慣れなほど読み速度が遅くなることが明らかになった。

#### 4. おわりに

本研究では書字方向の違いによる文章の認識の仕方、記憶定着率・読み速度の相違を明らかにするためにアトラッカーを用い、文章を認識した時の視線移動と記憶テストを実施した。その結果、日本語に不慣れなほど縦書きの判断が困難であり、日本での生活において文化的障害になりうると推測された。今後はなぜ縦書きの方が記憶に残るのかについて、アイトラッキングデータや停留時間、音読潜時データなどをさらに解析し、明らかにすることが求められる。

(21te520@ditu.jp)

#### 参考文献

- 1) 【第1図】在留外国人数の推移，法務省  
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001415139.pdf>  
(2024)
- 2) 楠 敬太・小澤 亘・金森 裕治：外国にルーツを持つ児童の読み困難度に関する基礎的研究（第2報），日本デジタル教科書学会発表予稿集，Vol.7, pp.9-10（2018）
- 3) 楠 敬太・小澤 亘・金森 裕治：外国にルーツを持つ児童の横書き・縦書きテキストにおける読み能力の違い，立命館人間科学研究，Vol40, pp.1-13（2019）

# 台湾人日本語学習者の作文に見られる段落構成の特徴

Features of Paragraph Organization in the Writings of Taiwanese Learners of Japanese

喬 曉筠<sup>\*1</sup>  
CHIAO, Hsiaoyn

キーワード：作文、段落、台湾人学習者、縦断研究、W-CoLeJa

Keywords: writing, paragraph, Taiwanese learner, longitudinal study, W-CoLeJa

## 1. はじめに

文章を書くことは、書き手の頭の中にある考えを文字で表現する作業であり、母語であっても認知的負荷の高い行為である。まして第二言語を用いる学習者の場合、その負荷がさらにかかるという<sup>1)</sup>。

これまで、学習者の作文を対象とした研究は、語彙、文法、文と文の接続など、専門日本語教育において重要な役割を果たすと考えられるさまざまな観点から行われてきた。これらの研究から、特に長い文章を書くさいに、文章構成の枠が明確でない点が課題として挙げられている<sup>2)</sup>。そこで、本研究では、書き手自身の考えを整理する過程と深く関連する文章構成に注目し、学習者がどのように文章を組み立てているのかを明らかにすることを目指す。また、先行研究の多くが横断的データに基づいており、一定の成果を上げている一方で、長期的な発達の側面を十分に捉えきれていない点もある。よって、本研究では、縦断的なデータを用い、日本語学習者の作文における段落構成の特徴について分析する。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査協力者

本研究は、日本語学習者の書く力の発達を縦断的に捉えることを目的とし、大学入学を機に本格的な日本語学習を開始した台湾人日本語学習者（以下、台湾人学習者）の書いた作文を調査したものである。途中で参加を辞退した者もあり、すべての調査回に参加した協力者 7 名を対象とした。以降、この 7 名を調査開始時に付与した個人識別番号で示す。

### 2.2 資料

大学 2 年次から 4 年次までの間、調査協力者が毎

年同じ時期に「過去と未来」というテーマの作文をパソコンで作成した。具体的には、「もしあなたが、①5 年前の自分に 1 時間会える、②5 年後の自分に 1 分間会えるとしたら、①と②のどちらに会いに行きますか。理由も書いてください。」という課題指示を与えた。

作成時間については、厳密な期限は設けていないが、長時間の中断なく、できる限り当日中に作文を完成させるよう伝えた。調査協力者の表現意欲を尊重しつつ、文字数の上限は設定せず、下限として 2 年次は 400 字、3 年次と 4 年次は 600 字を目安とした。合計 21 編の作文を収集し、分析に用いた。

### 2.3 分析方法

文章の段落構成の分析において、従来、「形式段落」と「意味段落」の 2 つの観点から検討されることが多い。形式段落は、複数の文が視覚的にまとまって見えるように書かれた形式上のまとまりを指すのに対し、意味段落は、テーマや内容上のまとまりを指す<sup>3)</sup>。どちらに重きを置くべきかについては研究者間で意見が分かれている。

ただし、指導の立場からすると、形式段落はその形式的特徴から比較的容易に特定できるため、文章構成の学習において有効な手がかりとなると考えられる。二通<sup>4)</sup>も、形式段落は書き手の論理構成と密接に関連しており、読み手の理解を助ける要素であると述べている。したがって、台湾人学習者の作文に見られる段落構成の傾向を解明する第一歩として、本研究では、形式段落に焦点を当てて考察を進める。宮澤<sup>5)</sup>にならい、改行一字下げによる文章の区分を「形式段落」とし、段落の区分に関わらない引用部分を文内の情報とする。以下では、段落構成を総段落数と段落別文字数分布という観点から分析する。

<sup>\*1</sup> 国立政治大学日本語文学科助理教授

表 1 作文の総段落数と総文字数

	TCA 005B		TCA 006B		TCA 007B		TCA 009B		TCA 010B		TCA 011B		TCA 020B	
	段	字数	段	字数	段	字数	段	字数	段	字数	段	字数	段	字数
2年次	8	952	4	585	3	578	3	500	4	1,340	4	553	4	767
3年次	5	766	5	844	4	596	4	1,231	5	1,100	4	759	4	978
4年次	5	704	4	854	4	587	4	1,066	5	885	4	1,145	3	1,900

### 3. 結果および考察

#### 3.1 段落数に関する分析

各作文の総段落数を整理すると、表1のようになる。全体として、4段落または5段落で構成されることが多く、学年間で大きな相違はなかった。また、2段落以下の構成は皆無であり、1編のみが過度に細分化しているように見受けられた。台湾人学習者は段落の重要性を理解し、意識的に段落分けを行っているとは推察される。事前アンケートで、ほとんどの台湾人学習者が母語での文章作成を苦に思わないと答えており、母語での文章作成経験が日本語の文章構成を意識させる要因の一つであると考えられる。

#### 3.2 段落別文字数分布に関する分析

段落の長さに基づいて段落構成を均衡型、山型、谷型、発展型、収束型、変動型の6つに分類し、各調査回における分布タイプを下記の表2に示す。

作文の約半数が、最初と最後の段落の文字数が相対的に少ない山型に該当し、学年が上がるほどその傾向が強まった。次いで多いのは、変動型である。山型とは対照的に、学年が上がるにつれて減少傾向にある。これは、学年が低い段階では日本語に十分に熟達していないため、自分の考えを適切に表現できず、文章が冗長になったり簡潔になりすぎたりするなど、文字数を学習者自身が十分にコントロールできず、増減する可能性が示唆される。

表 2 段落別文字数分布タイプ

	均衡型	発展型	収束型	山型	谷型	変動型
2年次	1	-	1	2	-	3
3年次	-	-	-	4	1	2
4年次	-	2	-	4	-	1
合計	1	2	1	10	1	6

#### 4. おわりに

本研究では段落数と段落別文字数分布の観点から分析を試みたが、台湾人学習者の作文における段落構成の特徴を特定するためには、別の観点を加えた多角的な考察が必要である。たとえば、各段落の機能、一人ひとりの段落に対する意識、および、母語での文章作成経験が与える影響など、より質的な側面の解明を今後の課題としたい。

(hychiaio@nccu.edu.tw)

#### 付記

本研究は、科研費 JP21H04417 および国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の研究成果である。

#### 参考文献

- 1) 保田幸子：「書く力」の発達—第二言語習得論と第二言語ライティング論の融合に向けて—, くろしお出版 (2024)
- 2) 石黒圭：説得力のある全体構造の作り方, 石黒圭編, わかりやすく書ける作文シラバス, pp.225-244, くろしお出版 (2017)
- 3) 森山卓郎・渋谷勝己編：明解日本語学辞典, 三省堂 (2020)
- 4) 二通信子：アカデミック・ライティング教育の課題—日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から, 北海学園大学学園論集, 110, pp.61-77 (2001)
- 5) 宮澤太聡：説得力のある段落構成の組み立て方, 石黒圭編, わかりやすく書ける作文シラバス, pp. 199-224, くろしお出版 (2017)

# 中国人日本語学習者の依頼の E メールにおける課題

—読み手評価と推敲支援の視点から—

Issues for Chinese learners of Japanese in request emails:

Readers' impressions and assisting with improvement

須賀 和香子<sup>※1</sup>

SUGA, Wakako

キーワード：中国人日本語学習者、依頼メール、読み手評価、推敲支援

Keywords: Chinese learners of Japanese, request email, readers' impressions, assisting with improvement

## 1. はじめに

日本で E メールは、大学の学生と教員のやり取りやビジネス等で広く使われており、有用なツールの一つである。しかし、文章だけで情報を伝えなければならず、書き方ひとつで印象が左右されるため、日本語学習者にとっては習得が難しい。したがって、日本語学習者を対象とした Eメールの研究は、これまで数多く行われており、近年では、問題点を分析するだけでなく、書き手の意識に着目したものも見られる（横川他 2024）。しかし、特定の相手に送る Eメールでは、読み手がどのように受け取るのかという点が重要な観点であると筆者は考える。読み手の評価を加味した学習者のメールの研究には胡（2014）があるが、まだ多いとは言えない。

本研究は、日本語学習者が書いた依頼メールを対象に、読み手が引き受けたいと思うメールはどのようなものか、また、学習者がどのような参考資料をもとに推敲すると、より印象の良いメールが書けるのかという点を明らかにするものである。

## 2. 方法

本研究では、中国在住の中国人中級日本語学習者 40 名（大学生）に、「面識のない日本人教授への講演依頼メール」を作成してもらった。それを、3 名の日本語教師が「依頼を引き受けたいか」という基準で順位付けをし、上位群 13 名・中位群 13 名・下位群 14 名に分けた。さらに各群のメールの違いを見るため、今回のメールには必須であると考える 10

項目「①件名・②宛名・③書き出し挨拶・④名乗り・⑤事情説明 1（大学で講演会があること）・⑥事情説明 2（担任からの紹介で連絡したこと）・⑦依頼文・⑧講演テーマの説明・⑨末尾の挨拶・⑩署名」の有無・失礼さを調べた（分析 1）。

さらに、参考にする資料と修正の関係を調べるため、順位付けをもとに学習者を 4 グループに分け<sup>※1</sup>、各グループに異なる資料（A：丁寧なメール B：失礼なメール C：依頼の表現集 D：資料なし）を見せた。その資料を参考に自身のメールを修正してもらい、修正後のメールを分析 1 と同様に、10 項目への言及の有無・失礼さについて調べた。（分析 2）

## 3. 分析 1 の結果

表 1 は、10 項目への言及の有無と、言及有りのうち、失礼だと感じるものの数を示している。

上位群のメールには依頼メールに必要な項目が書かれているものが多く、読み手の信頼を得るものと

表 1 各項目の言及の有無と失礼な表現の数

		① 件名	② 宛名	③ 書き出し	④ 名乗り	⑤ 事情 1	⑥ 事情 2	⑦ 依頼	⑧ テーマ	⑨ 挨拶	⑩ 署名	合計
上位群	有	13	13	13	11	11	8	12	12	10	10	113
	(失礼)	1	1	4	6	1	3	5	0	1	5	27
	無	0	0	0	2	2	5	1	1	3	3	17
中位群	有	13	13	11	9	10	9	11	13	9	8	106
	(失礼)	2	4	0	6	3	2	7	10	2	6	42
	無	0	0	2	4	3	4	2	0	4	5	24
下位群	有	13	12	14	8	7	8	11	12	10	4	99
	(失礼)	2	4	4	5	4	4	7	7	2	2	41
	無	1	2	0	6	7	6	3	2	4	10	41

※1 総合研究大学院大学 博士後期課程

なっている。それに対し、中位群のものは、各項目への言及は下位群よりなされているが、失礼な書き方であるものも多くみられること(表1 ドット箇所)、また、下位群のメールには必要なことが書かれていないものが多いことがわかる(表1 グレー箇所)。

#### 4. 分析2の結果

参考にする資料と修正の関係を調べるため、4つのグループについて、修正前後のメールを比較し、改善の有無を示したものが表2である<sup>注2</sup>。

表から、プラス修正が多いものの順に A→C→B→Dとなっており、丁寧なメールや表現集などを参考にすると正しく修正できることがわかる。しかし、表現集を参考にしたCはマイナスの修正も多い。

また、B・C・Dグループには、修正前後で失礼さに変化がないメールも多い。特に、④名乗り⑤⑥事情説明⑧テーマなどはB・C・Dでは修正後でも失礼さを感じるものが多い(表2 グレー箇所)。事情説明やテーマ説明は内容に合わせた文を書く必要があり、参考資料によって修正ができるかどうかには差が出たものと思われる。それに対し、⑩署名はBやDグループでも比較的プラスの修正があり(表2 ドット箇所)、形式的なことは修正されやすいと言える。

これらの結果から、学習者は場面や内容にあう表

現を選択することや、自身の力で失礼かどうかを判断することは難しいと言えるであろう。

#### 5. 考察と今後の課題

本研究から、依頼遂行のためのメールには、必要な項目を適切に書いて相手の信用を得ることが重要であること、また、見本となるような丁寧なメールを参考にして書くのが良いことが明らかになった。しかし、角度を変えて見ると、失礼なメールや自身のメールを参考にすると適切には書けないということもできる。つまり、日本語での丁寧/失礼なメールには何が必要で何が不必要なのかを判断することは困難であるということができるといえる。ここから、ビジネス日本語教育においてメールを扱う際には、メールの表現だけではなく、日本語における丁寧さとは何かという考え方も伝えていくことが重要であると言える。それらを知ることで、今後、日本社会と関わり様々なメールと接しながら、自身のメールを振り返り、自身の力でブラッシュアップさせていける力を養うことができるのではないだろうか。

(w. suga@ninjal.ac.jp)

#### 謝辞

本発表は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」の研究成果である。

表2 修正前後のメールの改善の有無

		① 件名	② 宛名	③ 書出し	④ 名乗り	⑤ 事情1	⑥ 事情2	⑦ 依頼	⑧ テーマ	⑨ 挨拶	⑩ 署名	合計 (%)
A	+修正	5	4	4	6	5	5	4	5	4	3	45(45)
	-修正	0	0	1	0	2	1	1	0	0	1	6(6)
	失礼さ 無変化	0	0	0	1	1	1	4	3	3	2	15(15)
B	+修正	1	2	1	2	1	0	1	0	2	5	15(19)
	-修正	1	0	1	0	2	1	0	1	1	1	8(10)
	失礼さ 無変化	1	0	2	6	4	5	4	6	2	3	33(41)
C	+修正	3	0	1	3	2	0	2	2	5	2	20(22)
	-修正	0	2	3	0	1	2	1	1	1	0	11(12)
	失礼さ 無変化	2	2	3	5	4	6	4	3	0	6	35(39)
D	+修正	0	1	2	0	2	1	2	0	2	4	14(14)
	-修正	0	1	1	0	2	0	2	1	0	1	8(8)
	失礼さ 無変化	2	0	1	7	3	9	5	6	4	3	40(40)

#### 注

注1 推敲時の授業欠席、および修正後のメール未提出者が3名いたため、分析2のデータは37名分である。

注2 各グループの人数は、A:10名 B:8名 C:9名 D:10名 の計37名である。

#### 参考文献

- 胡芸群：メールに対する読み手の評価－読み手の属性による評価の観点の違い－、一橋大学国際教育センター紀要，5号，pp.81-91（2014）
- 横川未奈，村岡貴子：日程再調整のビジネスEメールを作成する際の書き手の意図－日本語母語話者と非母語話者へのインタビュー結果の比較－，多文化社会と留学生交流，大阪大学国際教育交流センター研究論集，28号，pp.73-85（2024）

# 介護福祉士国家試験合格を目指すベトナム語母語話者 向けの漢字語彙自習教材開発の試み

— 「生活支援技術」科目に出題される二字漢字語を対象に—

Development of a self-study Kanji vocabulary curriculum for native Vietnamese speakers preparing for the national examination for care workers: Focus on two-character Kanji words in “Life Support Technology”

○ファン ティミーロアン<sup>※1</sup> 佐々木 良造<sup>※2</sup> 比留間 洋一<sup>※3</sup> 道上 史絵<sup>※4</sup>  
PHAN, Thi My Loan SASAKI, Ryozo HIRUMA, Yoichi MICHIGAMI, Fumie

キーワード：介護福祉士、国家試験、漢字語彙、漢越語、ベトナム語母語話者

Keywords: Care worker, National examination, Kanji vocabulary, Sino-Vietnamese words, Native Vietnamese speaker

## 1. 本研究の背景と目的

厚生労働省によれば 2023 年現在日本で働く外国人医療・福祉従事者のうちベトナム出身者が最多であり、その多くが在留資格上、就労継続のため介護福祉士国家試験の合格が必須となっている。しかし介護の専門用語は漢字が多く、学習には一定レベルの漢字の習得が必要である（中川他 2011）。介護の日本語教材の中には、日本語の漢字語彙にベトナム語の漢越音<sup>注1</sup>を併記しているものがあるが、それらを列記するのみの教材が多く、実際には使用されない漢越語があっても説明が十分にされていない。また業務か試験か学習目的が曖昧な教材が多い。よって本研究で開発する教材は次の点を目指す。1) 国家試験対策に特化する。2) 両言語に存在する二字漢字語のみを扱う。3) 文字単位で漢越音を対応させ、マップ化することで視覚的に分かりやすく提示し、漢字学習に対する心的なハードルを下げる。

## 2. 教材作成の方法

教材開発の第一段階として、問題数の最も多く、介護現場（実践）と密着した分野である生活支援技術」科目を対象とした。まず第 24 回（2012 年）か

ら第 35 回（2023 年）までの国家試験問題文の中から「生活支援技術」科目を対象に漢字を抽出した結果、異なりで 1,091 字、延べで 17,417 字が抽出された。うち、問題指示文にのみ使われる「問・題・適・切」を除き出現頻度の上位 10 文字を調べたところ、高いほうから「用・介・選・護・者・最・利・食・入・行」であった。これら 10 字の中から、日越共通二字漢字語が 2 語以上抽出できた「用・利・入・行」を対象に語彙マップを作成した。単漢字には音読みと漢越音を付し、マップの下部には実際の試験問題文から抽出した例文とそのベトナム語訳を提示した。

## 3. 教材の試作

作成している教材のサンプルは次のとおりである。

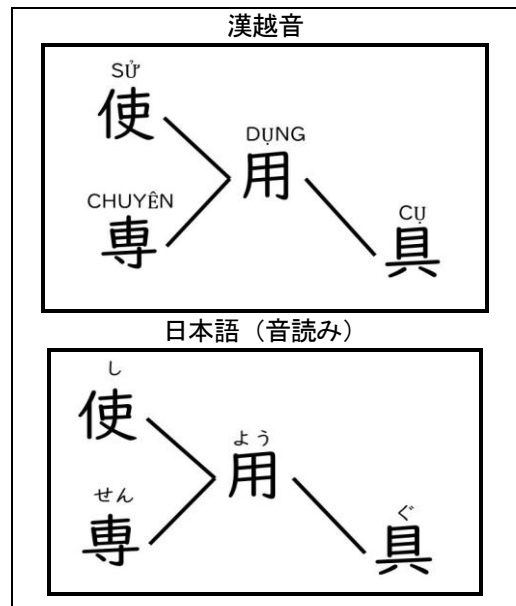


図 1 語彙マップ

※1 大阪大学外国語学部准教授

※2 静岡大学国際連携推進機構特任准教授

※3 静岡大学国際連携推進機構講師

※4 立命館大学理工学部准教授

[例文] 注2

### 1. 使用

入浴関連用具の**使用方法**に関する次の記述のうち、最も適切なものを1つ選びなさい。

Hãy chọn 1 đáp án đúng nhất trong số các mô tả dưới đây về cách sử dụng các dụng cụ tắm rửa.

### 2. 専用注3

義歯は、流水下で**専用**のブラシを用いて洗浄する。

Vệ sinh răng giả bằng cách sử dụng bàn chải chuyên dụng cọ rửa dưới vòi nước đang chảy.

### 3. 用具

歩行のための福祉**用具**に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

Hãy chọn một đáp án đúng nhất trong số các miêu tả dưới đây về dụng cụ hỗ trợ việc đi bộ.

### 4. 用いる (もちいる)

水洗いできるウール・絹には、液体酸素系漂白剤を**用いる**。

Sử dụng thuốc tẩy tạo bọt dạng nước đối với các loại khăn len, lụa có thể giặt nước.

## 4. 試作教材の評価

作成した試作教材をベトナム人介護関係者 3 名 (表 1 参照) に見てもらったところ、①学習法の選択肢が増える、②学習を開始して間もない時期から国家試験問題に慣れることができる、③漢字の読みも覚えやすくなる、④対象者として漢字初学者が考えられる、といったフィードバックが得られた。

	性別 (年齢) 注4	日本語能力	職業
協力者 1	男 (25)	N3	技能実習生
協力者 2	女 (28)	N3	特定技能労働者
協力者 3	女 (43)	N1	介護施設の看護師

## 5. まとめと今後の課題

以上のフィードバックから、本教材は国家試験を目指すベトナム語母語話者向けの新たな漢字語彙教材を提案できており、目的の一つである漢字学習の

不安を軽減させる効果が期待できるだろう。一方で、短時間で効果的な学習を行うためにはベトナム語訳の配置場所の工夫、練習問題の追加が必要だという意見もあり、限られた学習時間を有効に使える教材が求められていることも明らかとなった。

これらの意見を検討し、教材を改善するとともに、他科目についても開発を進めていく予定である。

(ptmloan.hmt@osaka-u.ac.jp)

## 注

注 1 ベトナム語の約 7 割を占めるとされる中国語由来の漢字語彙 (漢越語) のベトナム式発音。

注 2 紙幅の制限のため、例文は一語につき一文のみ掲載する。

注 3 2017 年の問題をもとに作成した。

注 4 2024 年 5 月時点の年齢

## 参考文献

- 厚生労働: 『外国人雇用状況』の届出状況表一覧 [別表 7] 国籍別・産業別外国人労働者数 (令和 5 年 10 月末時点) (2023)  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001195789.pdf> (最終閲覧日 2024 年 11 月 20 日)
- 国際交流&日本語支援 Y 編: 介護の言葉と漢字ハンドブック (ベトナム語版), 光洋スクエア, 初版第 1 刷発行 (2013)
- 松田真希子: ベトナム語母語話者のための日本語教育 ~ベトナム人の日本語学習における困難点改善のための提案, 春風社 (2016)
- 中川健司・中村英三・角南北斗・齊藤真美: 二漢字語を介した介護専門用語学習について, 第 37 回日本語教育方法研究会会誌, pp.30-31 (2011)
- 富田健次: ベトナム語 はじめの一歩まえ, DHC (2001)

## 謝辞

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「ベトナム語母語話者の漢越語を利用した介護分野の漢字語彙学習教材の開発: 学際的研究」 (研究代表者: PHAN THI MY LOAN) の助成を受けたものである。



# 介護の日本語教材情報提供の取り組み

Providing Information on Japanese Language Teaching Materials for Caregiving

○中川 健司<sup>※1</sup> 角南 北斗<sup>※2</sup> 布尾 勝一郎<sup>※3</sup> 奥村 匡子<sup>※4</sup>  
NAKAGAWA, Kenji SUNAMI, Hokuto NUNOO, Katsuichiro OKUMURA, Kyoko

キーワード：介護の日本語教材、情報提供、ウェブサイト

Keywords: Teaching Materials for Caregiving, Providing Information, Website

## 1. はじめに（背景および目的）

外国人介護人材（以下、介護人材）への支援で使用する介護の日本語教材は、介護人材の学習目的、学習段階、日本語力、母語等により適切なものが異なる。受け入れの枠組み拡大に伴い介護人材が多様化する中、学習者に適した教材の情報提供の必要性が増している。本研究では、これまで行われてきた、対面イベント、インターネット上それぞれの介護の日本語教材の情報共有の取り組みを概観し、どのような情報提供の形が望ましいのかを検討する。

## 2. これまで行われてきた情報提供の取り組み

### 2-1 対面イベントによる情報提供

対面イベントによる介護の日本語教材に関する情報提供として、ア. EPA介護福祉士候補者対象教材説明会、イ. 看護と介護の日本語教育研究会「教材広場」<sup>1)</sup>、ウ. 介護の日本語学習支援ワークショップ<sup>2)</sup>が行われてきた。アは発表者の研究グループがEPA介護福祉士候補者の渡日後研修において、開発した教材の説明を行ったものである。イは、16点の教材の開発者が、教材の開発意図、効果的な使い方などをポスターセッション形式で紹介するという形を行ったものである。ウは、一般社団法人介護の日本語学習支援協会が開催したワークショップで介護人材の学習環境別に利用できる教材を紹介したものである。

### 2-2 インターネット上の情報提供

インターネット上の介護の日本語教材に関する情報提供としては、エ. 「NIHONGO eな」<sup>3)</sup>、オ. 「介護の日本語 学習支援ブログ」<sup>4)</sup>、カ. 看護と介護の日

本語教育研究会教材リスト<sup>5)</sup>がある。エは、国際交流基金が運営する日本語学習者向けにウェブサイトやアプリなどを紹介しているポータルサイトである。オは、発表者らが運営する支援者向けに介護の日本語に関する記事を掲載しているウェブサイトである。カは、看護と介護の日本語教育研究会が定期的に公開している介護人材を対象とした教材リストである。

## 3. 方法

教材の情報提供においては、A.教材の概要、B.使い方の説明、C.教材へのアクセシビリティ（その教材がすぐに利用／購入可能か）の3点が重要であると考えられる。本研究では、発表者のグループが、上記のア～ウの対面イベント、およびエ～カのインターネット上の計6つの取り組みでの市販教材、自主制作教材、ウェブ教材に関するA～Cの情報を◎、○、△の3段階で評価した（表1）。対面イベントのア～ウにおける市販教材の「C.教材へのアクセシビリティ」の例で◎、○、△の違いを説明する。アでは、特定の市販教材を紹介したが、教材の内容に関する説明のみで購入方法に関する説明は特になく△とした。イでは会場に書店ブースがあり、参加者は紹介された市販教材をその場で購入できたため「◎」とした。ウでは、教材の著者、出版社、価格のみ提示した時もあれば、書店ブースがあった時もあったため、「○／◎」とした。

## 4. 結果および考察

### 4-1 市販教材について

市販教材のA.教材の概要、B.使い方の説明が◎となっているもののうち、ア、イ、オの教材の説明は、その教材の開発者自身によるものである。また、ウにつ

※1 横浜国立大学教授 ※2 フリーランス

※3 立命館アジア太平洋大学教授 ※4 神奈川大学助教

表1 各取り組みが提供する教材情報への評価

取り組みの形態		時期	教材数	市販教材			自主制作教材			ウェブ教材		
				A	B	C	A	B	C	A	B	C
対面イベント	ア	2013～2018	4	◎	◎	△				◎	◎	◎
	イ	2018	18	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	ウ	2022～	17	◎	◎	○/◎				◎	◎	◎
インターネット上	エ	2010～	1							◎	◎	◎
	オ	2020～	16	◎	◎	○				◎	◎	◎
	カ	2019～	103	○	△	○	○	△	○	△	△	◎

いてもワークショップの講師が緻密な教材分析を行ったうえで説明を行ったものである。それに対して、カは、教材に関する報告を受けて教材リストに追加している形を取ったものであり、リスト作成者が必ずしもその教材の内容や使い方について熟知しているわけではないことに加え、スペースの関係もありBについては十分な情報提供がなく△となっている。

#### 4-2 自主制作教材について

自主制作教材は、積極的な広報を行うことが難しいため、支援者がある存在を知るのも、実物を入手するのも容易ではない場合が多い。その意味で情報提供の対象とする意義は大きい、実際には自主制作教材を扱っている取り組みは多くない。イは教材の開発者自身が教材の説明を行ったため、教材の内容や使い方に加え、入手方法に関しても情報提供することができた。

#### 4-3 ウェブ教材について

ウェブ教材は、A～C全てでア～オについては◎とした。これは、ア、イ、エ、オが教材開発者自身による説明であり、ウも前述のように教材分析を行った講師による説明であることが大きい。また、ウェブ教材の場合、リンクを掲載すれば容易に教材にアクセスできるため、どの取り組みでもCは◎となっている。

### 5 おわりに

本研究では、対面イベント、インターネット上の介護の日本語教材の情報提供の取り組みのそれぞれを概観し、望ましい情報提供の形を検討したが、その結果、以下の点が明らかになった。

①教材開発者による情報提供の重要性：教材、特に自主制作教材の概要や使い方を効果的に伝えるため

には、開発者自身の関与が不可欠である。開発者による説明は、教材の意図や活用方法を深く理解する上で重要であり、支援者にとって有益な情報となる。  
②アクセシビリティ確保の必要性：特に市販教材においては、購入方法に加え教材を直接入手可能な環境が必要であり、出版社や書店の協力も重要となる。  
③対面イベントのコスト：イで全ての項目が◎であるように対面イベントは有用性が高いが、実施にかかるコストや継続性の低さなどの点で、課題が残る。

このように、介護の日本語教材の情報提供においては、教材開発者、出版社、書店との連携を強化し、教材の概要、使い方、アクセシビリティの3点を充実させることが重要となる。発表者らはこれらの点を踏まえて、有益な情報提供を継続的に進めるように、各教材の情報を支援者視点で検索および比較できるウェブサイトを開発中である。

(nakagawa-kenji@ynu.ac.jp)

#### 参考文献

- 1) 看護と介護の日本語教育研究会ウェブサイト  
<http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/kangokaigoN-SIG/>
- 2) 中川健司・齊藤真美・布尾勝一郎・角南北斗・奥村匡子 (2024) 「支援者への支援を目的とした介護の日本語ワークショップ開催の試み」『2024年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.305-310
- 3) 「NIHONGO e な」 <https://nihongo-e-na.com/jpn/>
- 4) 中川健司・角南北斗・齊藤真美・布尾勝一郎・橋本洋輔 (2020) 「支援者への支援を目的とした、介護の専門日本語学習支援情報サイト」『2020年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.301-305

# 「医療コミュニケーションのための日本語」における 授業実践報告

A report on classroom practice in Japanese for medical communication

○浅里 仁<sup>※1</sup>  
ASARI, Jin

○樋口 壮美<sup>※2</sup>  
HIGUCHI, Takemi

○寺菌 佑介<sup>※2</sup>  
TERAZONO, Yusuke

キーワード：留学生の医療コミュニケーション、行動中心アプローチ、歯科医療用語、  
医療面接ロールプレイ、臨床医の参画

Keywords: International student medical communication, Action-oriented approach,  
Dental terminology, Medical interview role-play, Clinical practice

## 1. はじめに（背景および目的、方法）

神奈川歯科大学は、“大学の世界展開力強化事業”でも謳われた Campus Asia を本学の新たな国際化指針として位置づけ、2011 年度に初めて韓国から 9 名の留学生が入学した。その後、2013 年度からは台湾からの留学生が、その後も中国、モンゴル、カナダなどからの留学生も入学し、現在（2024 年度）は 6 学年で 112 名の留学生が在籍している。留学生のための日本語支援は従来 1～3 年生時で行われていたが、臨床実習での医療コミュニケーションの充実を目的に、2023 年度より 4 年生時で臨床系歯科医師と日本語教員が共同で演習を行っている。

本発表は 4 年生の「医療コミュニケーションのための日本語」の授業の実践報告である。OSCE（歯科学生の臨床能力を客観的に評価する試験。4 年生が臨床実習に進むために必要な知識や技術を有しているか確認する目的で行われる）では、留学生は日本語学習者ゆえに、学習方法に悩み、結果機械的な暗記に頼らざるを得ない状況があった。一方で近年、言語教育全般においては、行動中心アプローチの提唱が目立っている。櫻井（2016）では CEFR の提唱する行動中心主義アプローチを「社会的存在としての学習者、彼らが実生活で直面している/するであろう課題が出発点となる。そしてその最終目標である課題を積み上げて行くことが授業のプロセスとなり、これらの課題を支えるために文法・語彙の指導があ

る」と述べている。このことから、本授業では、「医療面接が適切に遂行できること」とする最終目標を達成するため、クラスという社会において、ほかの学生と関わりながら学習を進めることによって、自ら学びをつかみ取る自立的学習力を育くめるような細かなステップを構築し、実践した。以下「歯科医療用語学習」「医療面接ロールプレイ」で行った実践内容とアンケート結果である。学習者は留学生 22 名、うち韓国人留学生 8 名、台湾人留学生 11 名、中国人留学生 3 名である。アンケート方法は、選択肢を含むアンケート用紙に手書きで自由記入する方法で行った。

## 2. 実践 1 と結果

まず「歯科医療用語学習」では、使用頻度の高い歯科医療用語をリストとしてまとめ、漢字の読み、ディクテーションといった音と文字の一致を確認することに評価において、語彙テストを実施した。表意文字である漢字は、漢字語を使用したコミュニケーションにおいて正確な読み方と発音を改めて構築しておく学習方法でなければ、漢字圏の学習者にとってはデメリットとなる。この状況を踏まえ、ディクテーションやアプリ教材、グループワークをもとに、耳から入る語彙学習を行った。

また、稲田他（2022）では、医学部留学生が患者とのコミュニケーション上の困難点の一つに「専門用語の言い換え」があると述べている。本学の留学生も同様の難しさを感じており、位相を特徴とする

※1 神奈川歯科大学歯学部 小児歯科学講座 准教授

※2 神奈川歯科大学歯学部 総合歯学教育学講座 特任講師

日本語で学んだ医療用語を患者に対し、わかりやすく説明することを苦手としている。そのため、何が医療用語で何が患者へ説明するやさしい言葉なのかを確認したり、協働作業として学習者同士の発話から語彙のバラエティを習得したりすることを目的に練習を行った。具体的な学習方法は、医療用語を各自予めわかりやすく説明するメモを準備させ、授業でほかの学生と協働で説明内容を共有したり、意見交換したりする場を設けた。その後、担当教員が確認しフィードバックを行った。

アンケート結果では、「間違えて覚えていた漢字の読み方が訂正できてよかった」「医療用語が聞き取れるようになった」など好意的なコメントが多くあった。また、「語彙テストに医療用語の意味をわかりやすく記述する問題があったほうがいい」「リストアップされた医療用語が主にどの場面で使われるか知りたかった」といった意欲的なコメントも見られた。

### 3. 実践2および結果

医療面接ロールプレイでは、3つのステップを設定した。まず、「ステップ1」は、医療面接の流れを①口の中②体全体③まとめの3つのシーンにわけ、それぞれのポイントを十分理解し、できるようになってから次のシーンの練習に移った。次に「ステップ2」はOPIの初級タスクで求められる「正確な表現、語彙が流暢にアウトプットできる」評価で質問項目が述べられるよう、またほかの学生の言い回し、教員の指導をより幅広く取り入れるため、輪になって1人1項目ずつ質問をして医療面接練習を行った。最後の「ステップ3」は「ステップ1」の①～③を通してペア練習後、3名（臨床医1名、日本語教員2名）の教員全てに1対1で医療面接を行った。

アンケート結果では、「ステップ1」と「ステップ3」は、「とてもよかった」「すこしよかった」が約90%で、「まったくよくなかった」が0%であったのに対し、「ステップ2」は、「とてもよかった」が22%、「まったくよくなかった」が13%と意見が分かれた結果となった。前者では「ほかの学生の声がか聞こえる」「臨機応変や流れが覚えられる」が好意

的な意見であったのに対し「ほかの学生と順番が違う」「一連的な練習じゃなかった」が「全くよくなかった」という意見にあり、「少しよくなかった」には「はずかしさのため、よくできなかった」という心理面での困難点を挙げる意見もあった。

### 4. 考察と課題

以上のことから、最終目的のためにステップをつくっていく構築過程について、学習者に対し明確かつ十分な理解を得たのちの進行が重要であることがわかった。これには臨床医の参画が必須であると思われた。また心理的な面の支援方法の模索、さらに登院後、ステップを作る練習方法が学習者の自立的な学びへどのような影響があるのか、また各評価方法についても今後の課題であると考えられた。

(asari@kdu.ac.jp

higuchi@kdu.ac.jp

terazono@kdu.ac.jp)

### 参考文献

- 1) 櫻井直子：CEFRの理念を基盤としたカリキュラムとは－B1レベルの教科書作成の実践から－日本語教育方法研究会誌 Vol.23 No.1 pp.4-5 日本語教育方法研究会 (2016)
- 2) 稲田朋晃・品川なぎさ・吉田素文：医学部留学生が臨床実習時に感じたコミュニケーション上の困難点 医学教育 2022, 53 (1) : pp.65-69 日本医学教育学会 (2022)
- 3) 稲田朋晃・品川なぎさ・丸山岳彦・松下達彦：医学語彙テストの開発と評価 専門日本語教育研究 23 pp.19-26 専門日本語教育学会 (2022)

# 学術論文読解の導入支援のための「構成要素色塗りメソッド」を用いたワークショップの実践と課題

Facilitating Academic Paper Reading Through the "Color-Coding Method for Structural Elements": Workshop Practices and Issues

○大島 弥生<sup>※1</sup> ○生天目 知美<sup>※2</sup> 今村圭介<sup>※3</sup> ○小畑 美奈恵<sup>※4</sup> ○安高 紀子<sup>※5</sup>

OSHIMA, Yayoi NABATAME, Tomomi IMAMURA, Keisuke OBATA, Minae ATAKA, Noriko

キーワード：論文の展開、論文初学者、大学院生、アカデミック・ライティング

Keywords: Research paper structure, Beginner in academic paper, Graduate student, Academic writing

## 1. 背景および目的

日本語学術論文（以下、論文）に触れた経験の少ない学部留学生や修士1年生・研究生・大学院受験予備教育段階の学生等、論文の初学者にとって、独力で論文を読解し作成することには困難がある。

そこで発表者らは、所属分野の論文に頻出する展開と表現の短時間での導入を目指し、構成要素ごとに色を塗って展開を把握する「構成要素色塗りメソッド」を考案し、大学院生等へ向けた3時間程度のワークショップ（以下、WS）実践を重ねた。

## 2. 方法

WS資料作成の際の論文の構成要素については、二通ら(2009)、佐藤ら(2013)を主な参照元とした上で簡易化した分類を用い、対象者の多くが理解しやすい論文から用例を作成し、当該論文の一部分に実際に構成要素別（[背景][研究の目的][先行研究の引用][データ][考察]等）の色塗り作業を行わせる課題を個別とペアとで実施した。本発表では、WSの時間配分・留意点・作業指示の詳細、資料の作成手法を具体的に紹介し、参加者から得た自由記述式アンケート調査の分析に基づく成果と課題を報告する。

## 3. WSの構成・準備・実践

### 3. 1 時間配分（基本的構成）と実践方法

本WSは講義90分と実践90分で構成される。基礎

編と応用編に分かれた講義（90分）の後、基礎編は事例・統計分析型と歴史叙述型の実践グループ、応用編は一つのグループで実践を行う。基礎編の講義では、論文執筆の基礎、論文の構造、色塗り作業について説明を行う。応用編の講義では基礎編の論文の基本構成と序論の構成パターンを確認した上で、論文の一貫性を作る言語表現技術、資料から主張への展開について説明を行う。

### 3. 2 基礎編の色塗り実践

講義で色塗りの方法（構成要素の色、Adobeソフトウェアの使い方など）を簡単に説明するとともに、色塗りによって論文の構成や表現を学ぶ方法を説明する。実践では、指定した論文の流れを確認した上で、論文の一部を使用し、色塗り作業を行っていく。

色塗り実践では、論文全てを扱うことはできないが、構成要素は全て扱うことができるように、色塗り作業を行う部分を事前に指定しておき、実践を行う。色塗り作業をする中で構成要素への意識を高めた上で、各構成要素を特徴づける文章表現について実例を見ていくことで、文章表現の習得にもつながるようにしている。また、色塗り作業の結果をグループで共有する時間を持ち、解釈の違いについても議論できるようにしている。その中で指定論文の文章の課題も明らかになるように構成されている。

### 3. 3 応用編の色塗り実践

応用編の参加者は既に論文を執筆中、あるいは論文執筆の経験がある学生が多いため、個別の構成要素の理解促進だけではなく、構成要素の組み合わせパターンや主張を明確に伝える言語表現技術など、

※1 立命館大学経営学部教授 ※2 東京海洋大学学術研究院教授

※3 東京海洋大学学術研究院准教授 ※4 創価大学総合学習支援セ

ンター助教 ※5 明治大学国際日本学部特任講師

詳細な内容を議論できる。実践課題は、論文構造上重要性が高いと思われる 3 段落程度の長さの箇所（序論、概念整理、先行研究を踏まえた RQ 提示、RQ への答え、事例の総括、結論）を設定した。設定にあたっては、講義において取り上げた観点（論文の一貫性、資料から主張への展開）や、応用編で扱った事例分析型論文や歴史叙述型論文に見られる複数の理論や概念の整理が含まれ、記述方法の妥当性について参加者と議論が可能な箇所を選択した。

WS では参加者は個別で実践課題の色塗り作業を行った後、ペアで各々の結果を比較し、話し合った結果を全体で共有する。その後、講師側から一例として結果を提示し、注目点や表現の解説を行う。

表現については一文レベルの典型表現だけではなく、(1)(2)のような複数の文によるパターンも取り上げ、色塗りを切り口に検討している。

(1)[先行研究]は[指摘内容]と述べている。つまり、[要約]と換言することができる。[先行研究]は[要約]を指摘していると考えることができる。  
 (2)[先行研究]の述べる[指摘事項]は、本稿における[論点]と考えることができる。[先行研究]は[対象]を例としているが、[根拠]ため、[論点]においても十分援用することは可能である。

その他、論文の主張キーワードとなる表現が主張を伝えるのに適切な表現か、他の表現はないかなど、参加者との議論も色塗りを糸口に行っている。

#### 4. アンケートの分析

WS 後に「WS で新たに学んだこと、今後の論文作成に活かそうな事」を参加者に自由記述式アンケートで調査した結果、4 年間で 54 名（母語話者含む）から回答を得た。回答から、A. 論文の読み方に関する理解、B. 読み方から書き方への転移、という学びを得ていたことが明らかになった。

A. 論文の読み方に関する理解は以下に分類できる。

①全体構成への意識：全体や段落構成の理解を通じて執筆の際に全体俯瞰が可能となる。

記述：「自身で論文を書く際、論文の構造がわかるように書くという気づきを得た。論文における各段落・文が、論文全体のなかで何を意味する要素なのか、どのような位置づけなのかを明確にしていくことの必要性を学んだ。」  
 (2022MI 基礎 C)

②効率的な読解：読解が効率的になる。

記述：「論文の構成が少しずつわかってきました。効率的に文献を読むように頑張っていきたいです。」(2023DI 基礎 C)

③参照可能性の判断：論文読解の際に自分の執筆の模範になりうる論文かどうか判断できる。

記述：「同じ分野の他の論文の構成を模範にしたり、反面教師にするための色付けの仕方、述べたいことの種類を明瞭にすることの大切さ。」(2023M2 基礎 C)

B. 読み方から書き方への転移は以下に分類できる。

①読解と記述の循環：読解と記述の循環を作れる。

記述：「序論本論結論という 3 つを意識し、自分がいま書いているのはどこに当たるかを考えつつ論文を書いていきたい。」(2024MI 基礎 C)

②資料に基づく考察：論文記述において資料にもとづく考察ができる。

記述：「論証の仕方がよく理解できた。特に歴史叙述型における、資料と考察の繰り返しの仕方は経験的にも理解できた。」(2024M2 応用 C)

#### 5. まとめと今後の課題

本実践で行った構成要素色塗りメソッドは、精読を目指した手法ではない。色塗りをすることによって、細部の読解を経ずに構成要素の展開パターンが可視化され、参加者同士お互いの読解の異なりを共に可視化しながら構成要素分類の基準を説明しあえること等の効果を上げたと思える。一方で、論文内容の深い理解にまでは至らない、構成要素の典型的展開を過剰に一般化する危険性を認めないなど、今後につながる課題の改善が必要と考えられる。

(yayoi@fc.ritsumei.ac.jp)

#### 付記

本研究は科学研究助成事業 23K00640 の助成を得た。

#### 参考文献

- 1)佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子：学術論文の構造型とその分布：人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に、154,日本語教育, pp.85-99 (2013)
- 2)二通信子, 大島弥生, 佐藤勢紀子, 因京子, 山本富美子: 留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック, 東京大学出版会 (2009)

# 修士課程大学院生による学会誌論文要旨作成の課題

—執筆過程に着目して—

Challenges Facing Master's Students in Writing Academic Journal Article Abstracts:  
A Focus on the Writing Process

朱 雅蘭<sup>※1</sup>

ZHU, Yalan

キーワード：アカデミック・ライティング、論文要旨、執筆プロセス、読み手意識

Keywords: Academic Writing, Abstracts, Writing Process, Audience Awareness

## 1. 研究背景と目的

学術論文の読者は、要旨を事前に読むことで本文を読むかどうかを判断することが多い。このため、筆者が要旨を書く場合、本文の内容を限られた字数で簡潔にまとめると同時に、読み手を引き付ける工夫も必要になる。特に、日本語教育学という学際的領域の場合、要旨の構成が一定ではなく、作成経験に乏しい大学院生の要旨では、本来不要な構成要素の挿入や、本文とのズレ等の問題が指摘されている（三谷 2022）。しかし、従来の先行研究では、大学院生の要旨に現れた課題を、構造やインタビューの回答から捉えることが多く、どのように情報を取捨選択し、要旨に影響を与えるのかがわからず、執筆過程を含めて分析する必要がある。

そこで、本研究では、日本語教育分野の大学院生が要旨を作成する際、どのような課題があるか（課題 1）、また、なぜそのような課題が生じたのか（課題 2）について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究では、大学院生の要旨作成の課題を明らかにするために、日本語教育分野の修士 2 年の中国人大学院生 3 名を対象に、400 字の要旨作成調査及びフォローアップインタビュー（以下、FUI と略す）を行った。調査協力者の内訳は表 1 の通りである。

表 1 調査協力者の内訳

番号	研究方向	字数	執筆時間	操作数
AdC1	語彙習得	428	37 分	179
AdC2	談話分析	398	1 時間 22 分	198
AdC3	談話分析	397	1 時間 4 分	117

※1 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

調査に用いた原文は、学会誌『日本語教育』に掲載されたアカデミック・ライティングの研究論文、山本・二通（2015）である。調査の流れについて、協力者の許可を得たうえで、タイトル、要旨本文とキーワードを事前に伏せておいた原文を提示し、オンライン（VooV Meeting）の録画機能を付けながら要旨を作成してもらった。指示文は、「以下の論文をお読みになった上で、論文の著者になりきって、論文のタイトルとキーワードを決め、400 字の要旨を作成してください。」である。また、要旨調査後の 1 週間以内に、録画による再生刺激法を用いて、執筆過程における変更箇所の理由と困難点について尋ねた。方法に関して、課題 1 では、原文の要旨の構成要素の有無を基準として、三谷（2022）の構成要素の分類をもとにコーディングし、原文の要旨と協力者の要旨を比較し、分析を行った。また、課題 2 では、田中・石黒（2018）を参考に、「参照系」「入力操作系」「修正・推敲系」に分けて執筆過程をタグ付けし、FUI の回答と合わせて考察した。

## 3. 分析結果と考察

分析した結果、執筆時の書き手立場と読み手立場によって、「要旨の構成要素への認識」「原文の情報の取捨選択」「字数制限内の構成要素の配分」という 3 つの課題があることがわかった。

以下、3.1 節では書き手立場、3.2 節では読み手立場の場合の課題について述べる。

### 3.1 書き手立場の要旨作成の課題（AdC2, AdC3）

AdC2 と AdC3 の要旨では、原文の要旨の構成要素がほぼ揃っているが、情報の抜け落ちが見られた。

AdC3の要旨では、【v. 結論】の研究意義については言及されていない。執筆過程からみると、AdC3は、「①入力」（40箇所、34%）と「⑥本文」（34箇所、29%）の割合がその他より高いことから、論文本文を依拠しながらまとめていたことがわかった。FUIでも、「原文をもとに言い換えた」「新情報が含まれていないかを何度も確認した」という語りから、AdC3は、原文を理解し忠実に再現することを重要視し、書き手立場から要旨を作成していたことが窺えた。しかし、論文要旨への認識を尋ねた際、「どのような背景から課題を見出し、どのような手法を用いて結論に辿り着いたのかについて含む」と研究意義を必須の構成要素として見なしておらず、要旨の構成要素への認識による課題が見られた。

また、AdC2の要旨では、【v. 結論】の研究意義については言及されてはいるが、【iv. 研究結果】の情報が一部抜け落ちており、原文の要旨にない新情報が含まれていた。執筆過程からみると、【ii. 研究目的】（59箇所、30%）と【v. 結論】（56箇所、28%）では「⑧変更」「⑩挿入」「⑪削除」のような推敲は見られたが、基本的には一文内の形式と文法の修正であることから、内容面の推敲には至らなかった。FUIでは「筆者が何を表したいか考えていた」「（研究結果では）論理構造パターンを理解するために矢印で示していたが、今読み返すと、どういう意味なのか、読み手にはやさしくない」という語りから、AdC2は筆者の伝達内容を理解することを中心とした書き手立場から要旨を作成していたことを内省し、読み手を意識していなかったことで情報の取捨選択の問題が生じたと考えられる。

### 3.2 読み手立場の要旨作成の課題（AdC1）

AdC1の要旨では、字数制限を超えただけでなく、【v. 結論】も抜け落ち、原文の要旨にない【i. 研究背景】も含まれている。執筆過程からみると、「⑤本文」（33箇所、18%）を参照しながら「①入力」（36箇所、20%）し、特に【i. 研究背景】（82箇所、46%）に割り当てた部分が多かった。AdC1は、最初に【ii. 研究目的】をまとめていたが、途中から【i. 研究背景】を3文も挿入していた。その理由について尋ねると、「ネットで調べた結果、必須の

構成要素に研究背景が書かれていなかったが、それがなければなぜこの研究を進めるかわからず、読み手を惹きつけられないと判断したので書き足した」と述べている。このことから、AdC1は、当該分野に詳しくない読み手を想定し、研究背景と研究意義を読み手に理解してもらうことを重要視していることがわかった。しかし、構成要素の配分について考慮しておらず、字数制限で必須要素である【iv. 研究結果】と【v. 結論】が抜け落ちてしまった。

### 4. まとめと今後の課題

3名の大学院生の要旨の執筆過程を分析した結果、筆者の立場から書き手立場で要旨を作成し、読み手を意識していないこと、読み手意識を持っているが、構成要素の配分に気を配っていないことに起因すると考えられる。これに鑑み、書き手立場の場合、筆者でも要約者自身でもなく論文の読み手を想定したうえで作成・推敲を重ねることが重要である。一方、読み手立場の場合、制限字数内で構成要素をバランスよく割り当てて、要旨全体の整合性を意識させる必要があると示唆された。

しかし、今回は他者の論文要旨を作成していたため、論文の理解が結果に影響される。今後は、協力者自身の論文要旨の執筆過程など、理解による影響を最小限に抑えたうえで分析する必要がある。

(zhuyalan0814@gmail.com)

#### 注

注1 構成要素に関しては三谷（2022）を参照されたい。

注2 執筆過程のコーディング（「①入力」「⑥本文」など）は田中・石黒（2018）をもとに改変したものである。

#### 参考文献・調査資料

- 1) 田中啓行・石黒圭「日本語学習者の作文執筆修正過程—中国人学習者と韓国人学習者の修正の位置と種類の分析から—」『国語研究所論集』14, pp.255-274 (2018)
- 2) 三谷彩華「大学院生の研究論文の要旨作成における課題—日本語教育学専攻の大学院生の要旨作成調査を通して—」『日本語教育研究』59, pp.193-207 (2022)
- 3) 山本富美子・二通信子「論文の引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究—」『日本語教育』160, pp.94-109 (2015)



# 大学院オンライン・ゼミナールにおける 留学生の質疑者としての参与と適応

Participation and Adaptation of International Students as Questioners in Graduate Online Seminars

烏日哲<sup>※1</sup>  
WuRija

キーワード：アカデミック日本語、教室談話、日本語学習者、質疑応答、コメント  
Keywords: Academic Japanese, Classroom Discourse, Japanese Language Learners,  
Question and answer session, Comments

## 1. はじめに（背景および目的）

ゼミナール（以下ゼミ）は大学院生にとって重要な研究の場であるが、教師によって一方的に行われる講義とは異なり、教師と学習者が参加者として対等な立場で双方向的に交流できる学習形態をとるため、高度な日本語力が要求される。ゼミで専門性の高い学術的な日本語をその場で理解し、さらに外国語である日本語を用いてその場で発話を組み立て、自分の意見を相手に伝えるということは、留学生にとって至難な業ともいえる。

国内外の大学生や大学院生を対象にしたアカデミック・ジャパニーズに関する近年の研究には、留学生の学術コミュニティへの参加を記録したケース・スタディー研究（郭2016）、ゼミ談話における「ブレイクダウン」がどのように起こりどのように修復されるかに注目した談話分析研究（嶺川2000）、発話機能の観点から質疑応答の発話の特徴を分析した徐（2021）、オンライン・ゼミナールにおける参加者間の社交について扱った石黒（2022）などがあるが、実際、留学生がゼミに参加する過程でどのようなプロセスを経てゼミ活動に適応していくのかについては、十分に研究がなされていない。また、オンラインでのゼミ活動が急速に広まった現状において、オンラインゼミでの談話がどのようになされ、それが留学生の適応プロセスにどのように影響しているかについても研究の余地がある。

本発表の目的は、ゼミ談話の複雑なやりとりの中で、留学生の質疑の際の談話が、ゼミ回数が重なる

につれ、どのように変容していったかについて、2020年4月～2022年3月まで行われた縦断ゼミ談話データを用いて考察し、留学生のゼミへの適応過程を明らかにすることである。

## 2. 方法

本発表の分析対象である大学院ゼミには、日本語学や日本語教育学を専攻する大学院正規生、大学院修了生と大学院研究生など合わせて常時26名前後の受講生がおり、中国語母語話者・ベトナム語母語話者・日本語母語話者で構成される。留学生は日本語学習歴などの面で多様な背景を持っているが、日本語レベルは全員N1以上である。

データの収集方法は、週に1度オンライン上で行われるゼミの様子を、Web会議システムの録画機能を用いて録画した。

本発表では、留学生のゼミ参加初期と半年後、1年後の3段階の各3回分、計9回のゼミ発表における質疑応答やコメントの文字化データを用いて留学生の発話の変化を考察した。

## 3. 結果および考察

考察観点①「ゼミでどのように話すか」：

留学生がコメントをするさいに、率直に意見を述べるか、前置き表現を用いて婉曲的に表現するかなど、ポライトネスに関わる行為的側面において話し方の変化が見られた。ゼミの初期段階（例1）では、単刀直入に質問を投げる発話からゼミの回数が重なるにつれ、前置き表現を駆使することで自己の専門

※1 国立国語研究所 研究系プロジェクト非常勤研究員

知識の欠如をフォローしながら質問をする発話が考察された。例2はS1が発表者に質問をするさいの発話である。まず、「発表者への感謝を表す」発話から、「発表に対する感想を述べる」発言をし、最後に「これからする質問についてフォローする」発話という3つのステップを踏んでから質問内容に入っている。こうした「礼儀的な発話」(徐, 2021)の重ね使いはゼミ初期に見られなかった話し方である。

例1：(ゼミ初期のS1のコメント)「えーと、まず、ちょっとわからないけど、ここでいう「学習者」とは中国人母語話者のことでしょうか」

例2：(一年後のS1のコメント)「ご発表ありがとうございます。興味深く聞かせていただきました。初歩的な質問で申し訳ありませんが、……」

考察観点②「留学生はどのような関係性の中で話すか」:

大学院ゼミには、研究生から修士・博士課程の学生、修了生、そして教員まで様々な立場の参加者がおり、周囲との上下関係や親疎関係によって役割や行動が異なってくる。本発表では、留学生がコメントをするさいにゼミ初期のころ、発表者との関係性のみを中心に発話を組み立てていたが、質問被りの場合に前置き表現を使うなど、質問者同士の関係性にも気を配れるようになっていることが分かった。

例3：(ゼミ初期のS2のコメント)「あの一、すみません、研究目的のところですが、……」

例4：(一年後のS2のコメント)「あの一、ちょっといいですか、さっきの〇〇さんがおっしゃったことともちょっと被るかもしれませんが、……」

例3と例4はいずれも発表者に向けた質問の発話であるが、例4のS2のコメントでは、前発言者への配慮と質問内容が前件と内容的につながりがあることを予告している。このような発話が話者交替による聞き手の負担を減らすうえで効果的であり、前発言者との発話内容的な重なりを自覚した上での発言

であるという意思表示で、トラブル回避にもつながると思われる。

#### 4. おわりに

鳥(2020)では、ピアレスポンスの協同学習において、作文修正のきっかけの一つとして「他者に行ったコメント」が挙げられている。今後の研究では、留学生の質疑応答やコメントの表現のバリエーションの広がりや変容は、具体的になにをきっかけに、どのようなルートをたどったのかについて詳細に分析していく必要がある。また、ゼミでのコメントは、誤字脱字など表記に関わるものから、データ解釈など内容に関わるもの、研究全体の枠組みに関わるものまで様々である。ゼミでの立場や専門知識の有無によってコメントの内容がどのように変容していくのか、内容的な側面に着目していく。

(wurija@ninjal.ac.jp)

付記 本発表は、JSPS 科研費 22K00655 (研究代表者: 鳥日哲) の助成を受けたものである。

#### 参考文献

- 1) 石黒圭: コロナ禍におけるオンライン・ゼミナールの可能性—オンラインのゼミ談話に見るコミュニケーション活動の豊かさ—, 社会言語科学, Vol.25, No.1, pp.39-54 (2022)
- 2) 鳥日哲: 論文作成における表現修正のリソース—学習者は何をきっかけに論文を修正するのか—, どうすれば論文・レポートが書けるようになるのか, pp.27-47 (2020)
- 3) 郭菲: 中国人留学生の日本の大学院の学術的コミュニティへの参加—文系大学院生のケース・スタディー—, 阪大日本語研究, Vol.28, pp.109-141 (2016)
- 4) 徐煉: 大学院のゼミ談話における質疑応答の特徴の分析—発話カテゴリーと発話機能の設定に向けて—, 一橋日本語教育研究, Vol.9, pp.61-76 (2021)
- 5) 嶺川由季: 大学院のゼミの談話におけるコミュニケーション・ブレイクダウンの修復について—『対話』と『共話』の視点から, 国際協力研究誌, Vol.6, No.1, p.105-117 (2000)

# 工学部学生の卒業時における自身の日本語力評価と 初年次日本語教育との関連性

The Relationship between Engineering Students' Self-evaluation of Japanese Language Proficiency  
at Graduation and First-year Program for Japanese Language Education

○中川 祐香<sup>※1</sup> 杉山 明<sup>※2</sup>  
NAKAGAWA, Yuka SUGIYAMA, Akira

キーワード：工学部学生、初年次教育、日本語力、自己評価

Keywords: Engineering Students, First Year Experience, Japanese Proficiency, Self-evaluation

## 1. はじめに（背景および目的）

工学系の学生には、卒業後は技術者として日常的に技術文書の作成能力が求められる。しかし、学生にはそのような意識がないことが多く、書くことや読むことに苦手意識を持つ者も多い。大阪産業大学工学部でも、以前より学生の作文能力の低下に苦慮している状況にあった。そこで、2019年度より学部日本語教育専門教員を配置し、初年次日本語科目の改革に着手した。本学工学部の学生のニーズおよび教員の要望に合わせた教科書<sup>1)2)</sup>を開発し、2020年度から入学生全員に対して通年の日本語教育（以下、工学部日本語科目）を実施している（中川 2023<sup>3)</sup>）。本科目は大学生としての普遍的な日本語表現の習得に加え、技術者として将来社会に出ていくための基礎日本語力の養成を目指し、デザインされている。

本稿では、2020年度に工学部日本語科目を受講した2023年度卒業生に対し実施した「日本語力に関するアンケート」の結果について報告する。当該学年はコロナ禍の影響により、前期はオンデマンド形式、後期はハイブリッド形式で授業を受けた学年である。本研究の目的は、「入学時から現在までのコミュニケーション能力の自己評価の変化」と「コミュニケーション能力の向上に対する工学部日本語科目の寄与についての評価」との相関を検討することにより、工学部日本語科目の授業効果を明らかにすることである。

## 2. 方法

調査は、2023年度卒業予定の工学部学生 371名に対し、2024年1月16日～3月15日に Google Forms を用いた質問紙法で、研究室毎に実施した。

調査では、①「基本的な書き方のルール」、②「論理的に文章を書く力」、③「文章を読む力」、④「信頼性のある資料を探す力」、⑤「話を聞いて理解する力」、⑥「わかりやすく話す力」について、入学時と現在の能力について質問した。また、①から⑥の指標に対する調査対象者の自己評価を、「まったくなかった／ない（1点）」、「ほとんどなかった／ない（2点）」、「ややあった／ある（3点）」、「かなりあった／ある（4点）」の4件法により回答を求める形式とした。加えて、各指標について、自身の能力の向上に工学部日本語科目が寄与した程度を、「まったく役に立たなかった（1点）」、「ほとんど役に立たなかった（2点）」、「やや役に立った（3点）」、「かなり役に立った（4点）」の4件法により尋ねた。最後に、「工学部日本語科目は1年生に勧めたい授業か」について、「まったくそう思わない（1点）」、「そう思わない（2点）」、「そう思う（3点）」、「強くそう思う（4点）」から1つ選ぶとともに、その理由も求めた。選択肢の得点化は「1」、「2」、「3」、「4」による4件法を用意した。

## 3. 結果および考察

調査対象者の回答のうち、当該科目未受講であった編入学生および過年度卒業生3名分のデータを除

※1 大阪産業大学工学部特任講師

※2 大阪産業大学工学部教授

表1 平均及び標準偏差

	①基本的な書き方のルールを運用する力		②論理的に文章を書く力		③文章を読む力		④信頼性のある資料を探す力		⑤話を聞いて理解する力		⑥わかりやすく話す力	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
入学時	2.53	0.71	2.19	0.75	2.57	0.82	2.15	0.86	2.67	0.69	2.15	0.81
現在	3.01	0.52	2.88	0.57	2.96	0.64	3.02	0.65	2.99	0.58	2.73	0.66
現在－入学時	0.47	0.69	0.69	0.68	0.39	0.69	0.87	0.84	0.33	0.59	0.58	0.68
工学部日本語科目の寄与	3.21	0.62	3.14	0.61	2.97	0.62	3.13	0.69	2.95	0.64	2.97	0.70

表2 相関係数

	コミュニケーション能力の自己評価の変化（入学時から現在まで）					
	①基本的な書き方のルールを運用する力	②論理的に文章を書く力	③文章を読む力	④信頼性のある資料を探す力	⑤話を聞いて理解する力	⑥わかりやすく話す力
コミュニケーション能力の向上に対する工学部日本語科目の寄与についての評価	.210 **	.332 **	.363 **	.442 **	.312 **	.172 **

\*\* p&lt;.01

外し、190名の回答を分析対象とした（回収率52%）。

表1に各指標の平均と標準偏差を示す。いずれの指標においても平均値は入学時より現在が高い。「現在－入学時」の値は、④「信頼性のある資料を探す力」が平均値0.87（標準偏差0.84）と突出している。次に「現在－入学時」の平均値が高いのは、②「論理的に文章を書く力」0.69である。「工学部日本語科目の寄与」の平均値は、①「基本的な書き方のルールを運用する力」が3.21と最も高い。

表2に「入学時から現在のコミュニケーション能力の自己評価の変化」と「コミュニケーション能力の向上に対する工学部日本語科目の寄与について評価」の相関係数を示す。いずれの指標においても1%の有意水準を上回り、相互の関連性が認められた。中でも④「信頼性のある資料を探す力」は0.442を示し、他の項目と比べ相対的に高くなっている。全体を見ると、②書く力（0.332）と③読む力（0.363）の相関係数が、⑤聞く力（0.312）と⑥話す力（0.172）より高い。この結果と平均値の変化を合わせて解釈すると、入学前には乏しかった「資料を探す力」と「書く力」が当該科目によって涵養されたと推察できる。また、2020年度の授業がオンラインで実施されたことによる影響も大きいと考えられる。

また、「1年生に勧めたい授業か」という質問には91%の学生が肯定的に回答した。記述式回答には「レポートや卒論作成、就職活動に役立った」とい

う意見が大半を占める。「そう思わない・まったくそう思わない」という回答の中には「2年次以降に学習したほうが身につく」、「2年次以降も行うべき」という意見が複数あり、専門科目と連携した継続的な日本語教育が求められていることがわかる。

#### 4. おわりに

本稿では、工学部日本語科目の授業効果を知るために、入学時と卒業時のコミュニケーション能力の自己評価の変化と、コミュニケーション能力の向上に対する当該科目の寄与についての評価との相関を検討した。その結果、6つの指標のいずれにおいても相互の関係性は示された。その中でも「資料を探す力」の相関係数が相対的に高い結果となった。

同調査に加え、今後は、工学系学生が就職後に求められる能力についての実態を明らかにするため、卒業生に対する追跡調査を実施する予定である。

(nakagawa-y@ge.osaka-sandai.ac.jp)

#### 参考文献

- 1) 中川祐香：楽しく学ぶ 理系の日本語トレーニング，ナカニシヤ出版（2025）
- 2) 中川祐香・藤浦五月：レポートの筋トレ，国書刊行会（2024）
- 3) 中川祐香：工学系学生に求められる日本語力を養う教材開発，大阪産業大学論集 人文・社会科学編 48，pp.47-59（2023）

# 社会学資料分析型論文における 研究主題と引用形態の選択に関する一考察

A Study on the Relationship Between Research Topics and Citation Patterns  
in Sociological Data-Analysis Papers

○向井 留実子<sup>※1</sup> 中村 かおり<sup>※2</sup> 近藤 裕子<sup>※3</sup>  
MUKAI, Rumiko NAKAMURA, Kaori KONDO, Hiroko

キーワード：資料分析型、研究主題、一次資料、引用形態、引用動詞

Keywords: Data-analysis papers, Research topic, Primary sources, Citation patterns, Citation verbs

## 1. はじめに（背景および目的）

学術論文の引用表現の先行研究には、人文・社会科学系分野の資料分析型論文における引用・解釈構造を分析した山本・二通（2015）、歴史学・国際政治学・地域研究の資料分析型論文における史料の引用・解釈部分に頻出する語彙の特徴分析をした生天目・大島（2018）、日本語教育学と文学の論文の引用方法や、引用動詞の種類と文末形態の使い分けを明らかにした中村他（2023）などがある。いずれも分野を軸に分析した論考であるが、学術論文の構造型の違いを分析した佐藤他（2013）は、分野よりむしろ研究主題（以下、主題）や研究方法が構造型に関連していることを指摘している。主題は分析対象となる資料の種類にも密接に関係しており、それを引用する際の表現等にも影響すると思われる。そこで、本研究では同じ分野で主題の異なる論文における引用形態、特に直接引用、引用動詞、引用標識の「～によると」「～によれば」（以下、～バ、～ト）の使用傾向を観察することで、主題が引用形態の選択に与える影響を明らかにすることを目指した。

## 2. 方法

分析対象は社会学分野の査読付き学会誌に掲載された資料分析型の論文 9 編（著者 3 名（A・B・C）×3 編）である。資料分析型の場合、分析対象とな

※1 愛媛大学国際連携推進機構非常勤講師

※2 拓殖大学外国語学部教授

※3 山梨学院大学共通教育センター教授

表 1 各論文の主題／一次資料の詳細

	論文 1	論文 2	論文 3
A	社会運動の様々な現象の解明／雑誌の投稿欄		
B	特定人物の社会学への貢献／記録・論文等	海外特定理論のメディア研究への影響／海外論文等	特定行事での知覚の身体への影響／明治期記録等
C	労働市場の様々な実態の解明／統計データ		

る一次資料が多様であるため、表 1 では、主題と一次資料の詳細を示した。A と C は 3 論文で主題が共通するが、B は論文間で異なっている。論文 1 は 3 名とも同じ学会誌に掲載されたもので、論文 2、3 はそれぞれ異なる学会誌のものである（以下、A1、C3 のように提示）。1 人の著者から 3 編としたのは、同じ著者でも主題や投稿する学会誌によって書き方が異なるかを観察するためである。これらの論文の引用箇所（出典が提示されている箇所）について、直接引用（文内での「文」の引用、ブロック引用（以下、直接、ブロック）か、その引用元が一次資料か先行研究等の二次資料か（以下、一次、二次）、引用動詞の種類、～バと～トの有無について量的・質的に分析した。

## 3. 結果および考察

抽出された引用箇所は合計 540 件で、表 2 は各論文の引用総数、直接、ブロック、～バ、～トの数（それぞれ総、直、ブ、バ、トと提示）と、引用元が一次か二次かの数（一、二と提示）を示したものである。

表2 各論文の引用総数と引用タイプ・引用標識別数

		総(一/二)	直(一/二)	ブ	バ	ト
A	論文1	97(56/41)	24(19/5)	10	0	1
	論文2	75(38/37)	17(13/4)	7	1	0
	論文3	64(16/48)	14(4/10)	6	2	0
B	論文1	69(26/43)	23(11/12)	6	12	0
	論文2	64(43/21)	1(0/1)	0	16	0
	論文3	47(38/9)	10(8/2)	18	2	0
C	論文1	41(0/41)	3(0/3)	0	8	0
	論文2	32(0/32)	0(0/0)	0	11	0
	論文3	51(0/51)	3(0/3)	0	7	0
計		540	95	47	59	1

分析の結果、全論文に共通する点と主題によって異なる点が、ブロック、引用動詞、引用標識それぞれで見られた。まず、ブロックでは、直接が一次二次の別なく用いられるのに対して、一次のみの使用であった。これは中村他（2023）で示された文学での使用と共通している。Cにはブロックはなく、それにあたる場所に一次に基づく数式、図表が示されていた。主題による分析対象の違いがブロックの有無に影響したと考えられるが、一次二次の使い分けには共通性が見られた。

引用動詞は41種類あったが、全論文共通して多かったのが「指摘する」46件「論じる」32件であった。一方、アカデミック・ライティング指導でよく取り上げられる「述べる」は10件のみで、うち9件がB1とB3の直接かブロックで用いられ、その6件が「以下のように述べている」の形だった。これは解釈なしで中立的に引用内容を示す「述べる」と、引用元の表現自体を重視するB1とB3の主題とに親和性があるためと思われる。B2にブロック引用がなかったのは、海外の資料を用い、思想内容に重点を置く主題のためと考える。

引用標識については、～トが1件～バが59件で、計60件中33件は[人名]を伴う形であった。向井他（2022）は、～バは人物名や個人記録を情報源として、考え・知見を述べる場合に用いられる傾向があり、判断の根拠になることが多いとしているが、本研究では全論文でその傾向が見られた。～バが特にB1とB2、Cに多いのは、先行研究の理論に基づいて展開する主題であるためであると考えられる。一方、AやB3に少ないのは、Aは雑誌の読者投稿欄の発言に対して、B3は明治期の記録に対して著者独自の解釈をして、ある現象を説明す

ることが主題となっており、いずれも他者の言説より著者の解釈が中心になることによると考えられる。

掲載誌による引用形態の書き分けについては、AとCの3論文間で大きな違いは見られなかった。一方、Bの論文間には違いが見られたが、その違いは、AやCの主題の違いによる特徴と共通する点が見出せることから、主題によるものであると考えられる。

#### 4. おわりに

調査の結果から、引用形態の選択には、社会学資料分析型論文に共通する点と、主題によって異なる点があることが示唆された。それらの点を総合的に検討することで、ライティング指導への示唆が得られるのではないかとと思われる。その検討は今後の課題としたい。

(rumukai@l.u-tokyo.ac.jp)

#### 付記

本研究は、JSPS23K00625の助成を受けている。

#### 参考文献

- 1) 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子：学術論文の構造型とその分布-人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に-, 日本語教育, Vol.154号, pp.85-99 (2013)
- 2) 中村かおり・向井留実子・近藤裕子：文学研究者を対象とした引用形態の使い分け意図に関する調査報告, 2023年度日本語教育学会秋季大会予稿集, pp.201-206 (2023)
- 3) 山本富美子・二通信子：論文の引用・解釈構造-人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究-, 日本語教育, Vol.160, pp.94-109 (2015)
- 4) 生天目知美・大島弥生：資料分析型論文の史料引用における引用・解釈の特徴-歴史学/国際政治学/地域研究を対象に-, 専門日本語教育研究, Vol.20, pp.12-31 (2018)
- 5) 向井留実子・中村かおり・近藤裕子：学術論文における「～によると」「～によれば」の使用環境, 2022年度日本語教育学会春季大会予稿集, pp.70-75 (2022)

# 日本図書コードを用いた 日本留学試験読解問題文出典の分析

Analysis of Sources of Reading Tests in the EJU Using the Japan Book Code

○林 希和子<sup>※1</sup> ○佐々木 良造<sup>※2</sup>  
HAYASHI, Kiwako SASAKI, Ryozo

キーワード：日本留学試験、日本図書コード、読解、出典分析  
Keywords: EJU, Japan Book Code, reading, Source Analysis

## 1. はじめに（背景および目的）

今日、EJU（日本留学試験）は多くの高等教育機関で入学試験やその一部として用いられている。また、その問題は出版されて公開されていることから、大学入学前の学習教材として、日本語学校や大学の予備教育でも用いられている。門倉（2001）は、アカデミック・ジャパニーズの定義にあたり、いまだ漠然としたものであるとし、「日本留学試験の『日本語』の試験問題のあり方がAJの内容を今後、既成事実に規定していくことになりかねない」（p. 124）と述べている。EJUの問題を分析して検討することは、アカデミック・ジャパニーズとは何かを考える一つの材料となるだろう。

では、EJUはどのような題材を用いて、日本の大学等で必要とする日本語能力を測ろうとしているのか。日本学生支援機構のHP上で公開されているシラバスには、読解の「出題される文章や談話の種類」について、「説明文・論説文・（大学等での勉学・生活にかかわる）実務的・実用的な文書／文章など」<sup>2)</sup>と示されているものの、この文から具体的にどのような分野、レベルの説明文・論説文が出題されるのか、学習者が具体的にイメージすることは難しい。

そこで、本調査ではEJU読解問題として出題された文章の出典を日本図書コードの分類記号（Cコード）を用いて分類し、EJUの読解問題の出題分野や内容の傾向を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

EJUは2002年から年に2回実施されており、2010年にはシラバスの大幅な改定が行われた。今回の調査では2002年第1回から現在（2024年10月時点）手に入れることができる2023年第2回までの41回の試験問題734題について出典の調査を行なった。EJUの読解問題の本文テキストの多くは書籍からの引用であるが、シラバス改訂前の問題には図1のように書籍からの引用ではなく作問者によって作成されたと思われる問題文（以下オリジナル問題）が多くあった。これらは図1のとおり2002年の第一回では20題中9題も見られたものの、徐々に減り、2018年以降は出題されていない。

今回の調査では、87題あったオリジナル問題と、掲示板などのテキストから必要な情報を読み取るいわゆる「キャンパス・ジャパニーズ」の問題40題、雑誌26題、新聞またはHPの記事30題、メール文12題を合わせた195題を除く535題の問題の出典について、Cコードを用いて分析を行った。

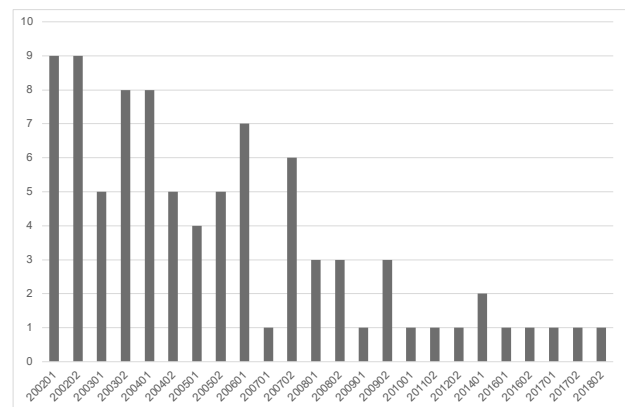


図 1 EJUにおけるオリジナル問題数

※1 大阪大学日本語日本文化教育センター 非常勤講師

※2 静岡大学国際連携推進機構 特任准教授

### 3. 結果および考察

C コードの分類は「日本図書コード管理委員会」がガイドラインを作成して表記基準を定めており、1桁目が「読者対象」、2桁目が「発行形態」3桁目と4桁目が「分野と内容」を表している。

調査の結果、「読者対象」は改訂前 121 題、改訂後 251 題と多くが「一般」向け書籍から出題されて出題されていた。「読者対象」の分類による出典の傾向に変化はなかった(表 1,  $p = 0.6863$ , フィッシャーの正確確率検定(両側)による, 度数に 0 を含む列を除く)。また、「専門」からの出題は改訂前 15 題 (9%)、改訂後 39 題 (11%) にとどまった。EJU の目的が「日本の大学等で必要とする日本語力(中略)の評価を行うこと」<sup>2)</sup>であることから考えると、「一般」からの出題を減らし「教養」あるいは「専門」からの出題を増やすことも考えられよう。

「分野と内容」の「大分類」では、改訂前後で出題の傾向に 5%水準で変化がみられた(表 2,  $p = 0.0172$ , フィッシャーの正確確率検定(両側)による, 度数に 0 を含む列を除く)。自然科学などは改訂前後で出題数の変化はないが、哲学・宗教・心理学などは減り、社会科学などが増える傾向が見られた。

### 4. まとめと今後の課題

EJU の読解問題は C コードの「読者対象」で「一般」に分類される出典が多いことがわかった。また、「大分類」では、社会科学、自然科学、哲学・宗教・

心理学からの出題が多いことがわかった。こうした分野の読み物を積極的に読むことは、EJU の読解問題の対策となるだろう。

今後の課題として、C コード「読者対象」あるいは「大分類」の分類ごとの文字数と文章難易度のデータから、分類による比較検討を進めたい(佐々木・林 TBA)。

(blb1012kiwa5@gmail.com)

### 謝辞

本研究は JSPS 科研費 23K20472 (代表: 太田亨・金沢大学) の助成を受けたものである。

### 参考文献

- 1) 門倉正美: アカデミック・ジャパニーズとは何か, 日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ, アカデミック・ジャパニーズ研究会, pp.123-132 (2001)
- 2) 日本学生支援機構「日本留学試験 (EJU)」: <https://www.jasso.go.jp/ryugaku/eju/index.html> [2024/11/4 最終閲覧]
- 3) 日本図書コード管理センター: ISBN コード/日本図書コード/書籍 JAN コード利用の手引き 2010 年版, p.15 (2010)
- 4) 佐々木良造・林希和子: 日本留学試験読解問題の出題分野の分類および文字数と文章難易度の分析, 第 27 回専門日本語教育学会研究討論会誌, ページ未定, (TBA)

表 1 C コード「読者対象」による出典の分類

	一般	教養	実用	専門	婦人	学参 I (小中)	学参 II (高校)	児童	雑誌 扱い	計
改訂前	121	33	0	15	0	0	0	2	0	171
改訂後	251	61	9	39	0	0	0	2	2	364

表 2 C コード「分野と分類」の「大分類」による出典の分類

	総記	哲学・ 宗教・ 心理学	歴史・ 地理	社会 科学	自然 科学	工学 工業	産業	芸術・ 生活	語学	文学	計
改訂前	3	28	4	48	40	0	1	10	9	28	171
改訂後	16	35	3	115	87	19	11	26	6	46	364



# 大学における発達障害のある留学生に対する 「合理的配慮」をめぐる課題

—日本語教員・心理職教員へのインタビューを通して—

Issues Surrounding "Reasonable Accommodation" for International Students with Developmental Disabilities at Universities: Based on Interviews with Japanese Language Teachers and Psychologists

安田 眞由美 ※<sup>1</sup>  
YASUDA, Mayumi

キーワード：合理的配慮、発達障害、留学生

Keywords: reasonable accommodation, developmental disabilities, international students

## 1. はじめに（背景および目的）

現在、国公立、私立を問わず、すべての大学等において「合理的配慮」の提供が義務化された。これにより、日本語の授業においても「合理的配慮」を求められることが多くなってきたが、実際にどのような配慮が提供され、どのような課題があるのか、明らかになっていない。

そこで、本研究は、主に自閉スペクトラム症（以下、ASD）のある留学生への「合理的配慮」について、大学に所属する日本語教員（5名）と心理職教員（4名）への半構造化インタビューを通して、配慮の実態や課題を明らかにする。なお、調査実施前に、大学の研究倫理審査を受けていること、関係者全員と関係機関に口頭及び紙面で説明を行い、紙面で同意を得ていること、発表に際し、個人情報および倫理面に配慮するため、重要な部分以外、加工している箇所があることを申し添えておく。

## 2. 方法

インタビューは一人あたり1時間から1時間半で実施し、録音した。それを文字化した後、分析した。日本語教員、心理職教員への質問項目を以下に示す。

### 【日本語教員への質問】

●日本語の授業内における当該学生の状況（出席率、課題提出率、試験受験率、得点率、授業内の人間関係、教師の評価など）

●日本語学習における当該学生の状況（日本語レベル、4技能（読解、聴解、作文、会話）別、項目（文法、語彙、文字）別）

●日本語教員の支援の有無、支援の内容と効果

●問題点（制度や支援そのものにおける問題点）

### 【心理職教員への質問】

◆当該学生の状況（国籍別、障害種別在籍状況など）

◆当該学生の日本での生活面における状況（困り感、求めていること）

◆当該学生への支援の実態（支援の有無、支援につながるまでのプロセス、支援内容と効果など）

◆問題点（制度や支援そのものにおける問題点）

## 3. 結果および考察

インタビュー結果を以下に示す。

### 【心理職教員】

(1) 短期留学生からの配慮申請が多いが、学内の所属が明確でないことが多く、積極的な対応に結びつきにくい。

(2) 「試験時間」と「提出期限」の「延長」を授業担当者をお願いすることが多い。

(3) (2) だけでは単位取得につながらないことが多いため、実際は授業担当者が「教育的配慮」で対応している。

(4) 「教育的配慮」の中には「合理的配慮」とは言えない、公平性に欠く不適切なものもある。

(5) 生活上の配慮を求められることもあるが、大学が提供するものは修学上の配慮だけである。

※<sup>1</sup> 長崎外国語大学外国語学部准教授

「合理的配慮」の提供が必要な場合、入学前に申請し、根拠資料や支援履歴を提出する。入学後は学修を支援する部署の心理職教員が面談し、修学上必要な配慮が検討される。自分の国で受けている配慮と同等の配慮を求める留学生も少なくないが、同等には提供できないことが多いという。

#### 【日本語教員】

- ①配慮依頼のあった学生が授業に来なかったため、単位は成立しなかった。
- ②「試験時間の延長」の依頼があったが、実際は必要なかった。
- ③発表やグループワークができない学生に対する対応が分からなかった。
- ④常に教員としかペアやグループを組めなかった。
- ⑤テーマとは無関係の発表をしたり、レポートを提出したりしてきたので困った。(単位不成立)
- ⑥授業中、授業とは全く違うことに熱中していたため注意したが、改善されなかった。
- ⑦「合理的配慮」だけでは単位取得が困難な場合、特に短期留学生に対しては「教育的配慮」をしたことがある。

上の(1)～(5)、①～⑤を分析していく。

大学が提供する合理的配慮として、「試験時間」と「提出期限」の「延長」を依頼することが多い((2))が、日本語教員5人全て、実際は「試験時間の延長」は必要なかった(②)と答えている。

また、大学が提供するものは修学上の配慮だけであり、生活上の配慮は行わない((5))が、配慮依頼のあった学生が授業に来ず、単位が成立しなかった(①)という回答があった。授業に来られない理由の一つに、時間管理がうまくできず、朝起きられないことが挙げられるが、授業に出席するために、朝、起こすというような支援は行われていなかった。

さらに、「試験時間」と「提出期限」の「延長」だけでは単位取得につながらないため、授業担当者が「教育的配慮」で対応している((3))との回答通り、日本語教員5人全てが「教育的配慮」をしたことがある((7))と答えている。特に、日本語教員の回答で目立ったのは、協働学習における問題であった(③、④、⑤)。協働学習では、対話を通して学習

者同士が互いの力を発揮し協力して学ぶことが求められるが、配慮依頼のあった ASD のある学生は他者とうまく対話ができず、グループワークに参加しなかったため、協力して学ぶことはできなかった。そして、協働学習の成果を発表することもできなかったが、適切な代替課題もないまま、単位を取得できたという。このような「合理的配慮」とは言えない公平性に欠く不適切な「教育的配慮」が行われた

((4))背景には、大学から提供される「合理的配慮」が、日本語の授業、特に協働学習における当該学生の問題を解決するための配慮としては機能しなかったこと、授業担当者の「合理的配慮」への理解不足や、「教育的配慮」が十分に議論されないまま教員個人の裁量に委ねられていることが挙げられる。

#### 4. おわりに

日本語の授業現場において、大学から提供される「合理的配慮」だけでは当該学生の問題に十分に対応できているとは言えないこと、特に協働学習においては大きな課題があることが明らかになった。適切な「合理的配慮」の提供のため、常に日本語教員と心理職教員が情報交換をしたり、日本語教員に対する研修の機会を設けたりする必要がある。発達障害のある日本語学習者の学びを保障するため、適切な「合理的配慮」の提供は喫緊の課題である。

(yasuda@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp)

#### 付記

本研究は、科学研究費基盤(C) 21K00644 の助成を受けたものである。

#### 参考文献

- 1) ジュディット・コーモス, アン・マーガレット・スミス(著), 竹田契一(監修), 飯島睦美他(訳): 学習障がいのある児童・生徒のための外国語教育, 明石書店(2017)
- 2) 幕内充編: 自閉スペクトラム症と言語, ひつじ書房(2023)
- 3) 安田真由美: 自閉スペクトラム症のある日本語学習者への指導と支援—言語能力, 言語運用能力, 情意要因から考える—, 新長崎学研究センター紀要, 2, 67-84(2022)

# 共生社会における専門的能力としての日本語母語話者の日本語コミュニケーション能力の育成

Fostering Communication Skills in Native Japanese Speakers  
as Technical Japanese Skills in the Convivial Society

千葉 月香<sup>※1</sup>  
CHIBA, Tsukika

キーワード：共生社会、地域日本語教育、日本語調整能力、自治体による取組み

Keywords: Convivial Society, Community-based Japanese Language Education, Japanese Communication Skills, Measures by Local Government

## 1. はじめに

2019年に公布・施行された日本語教育推進法や、同年に開始された文化庁<sup>注1</sup>の地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業（以下、「体制づくり推進事業」）等により、多くの自治体で地域日本語教育の取組みが行われるようになった。地域日本語教育の目的は多様な住民が共生できる社会の実現であるが、地域社会における日本語コミュニケーションの問題は日本語非母語話者の日本語力の不足だけでなく、日本語母語話者の日本語調整能力の低さにも要因がある（日本語教育学会、2009）。

本発表では、日本語母語話者の調整能力、コミュニケーション能力を「共生社会における専門的能力」ととらえ、地域日本語教育の場での育成について検討したい。

## 2. 先行研究と研究課題

共生社会におけるコミュニケーション言語としての日本語について岡崎（2007）は日本語母語話者か非母語話者かに関わらず所有権を持たない「共生日本語」と表し、義永（2015）は「自分の話し方を変えて新しいバラエティを非母語話者と協働してつくっていかうという姿勢」と述べている。つまり、日本語の調整能力とは目の前の相手とコミュニケーションを行うために、自分もつ様々な知識や能力を駆使した言語的手段の一つと定義づけられる。その意味で、構造、語彙の選択や情報の取捨選択で一定

の調整ができる「やさしい日本語」を包括し、さらに双方向性と動的側面をもつ能力であるとする。

これまでボランティアにより支えられてきた地域日本語教育に自治体が主体となって関わることで、取組みが大きく進む可能性がある。その要因の一つは、財源確保に貢献する「体制づくり推進事業」である。本稿では共生社会の実現に大きな影響を与えると考えられる「体制づくり推進事業」の中で、非母語話者の日本語習得と両輪で地域社会における日本語コミュニケーションを支える、日本語母語話者のコミュニケーション能力育成を目指した取組みを取り上げる。その実施状況から、今後の地域日本語教育における日本語母語話者に対する自治体の施策の在り方を考察したい。

## 3. 方法

### 3-1. 対象

「体制づくり推進事業」の補助対象は都道府県と政令指定都市<sup>注2</sup>である。都道府県は広域自治体としての役割が大きく、方針の策定や域内の市町村への啓発等、間接的な取組みが期待される背景もあることから、本発表では政令指定都市を対象とする。また、政令指定都市による「体制整備事業」の令和4年度実施団体報告書14団体分を対象とする<sup>注3</sup>。

### 3-2. 分析方法

「体制づくり推進事業」事業報告書の取組内容の記述を参照し、日本語母語話者のコミュニケーション

<sup>※1</sup> 愛知県立大学外国語学部国際関係学科講師

ン能力の獲得を目指した取組から、(1) 目的と(2) 内容を抽出し、取組状況や傾向を検討する。

#### 4. 結果

(1) 目的は、①日本語学習支援者育成（非母語話者の日本語学習を支援するためのコミュニケーション能力の獲得）と②市民性教育（知人・隣人・同僚・部下・上司等の言語使用者としてのコミュニケーション能力の獲得）の2種類に分けられた。

(2) 内容は大きく①「やさしい日本語」講座等による座学、②対話・協働の場としての地域日本語教育への参加の2種類が見られ、①の座学で得た知識の実践として②が位置付けられている場合もあれば、①・②がそれぞれ独立している場合もあった。

表1 取組み団体数（目的・内容別）

(1)目的 \ (2)内容	①講座	②教室参加
①日本語学習支援者育成	5	3
②市民性教育	6	2

#### 5. 考察

外国人住民の増加により、行政職員や図書館員、観光業等の外国人対応が想定される者の日本語調整能力の課題提起（柳田，2023：阿部・加藤・新居，2023）が行われている。今回の結果も合わせると、現行の日本語母語話者を対象としたコミュニケーション能力育成には、外国人対応担当者育成、日本語教育人材（日本語学習支援者）育成、市民性教育という3つの側面があると言える。

外国人対応担当者や日本語教育人材はコミュニケーションの目的が情報伝達や日本語習得支援と明確であるのに比べて、市民同士の私的領域のやりとりは相対的に動的なコミュニケーションである。一方で、日本語教育学会（2009）の言う地域社会における日本語コミュニケーションの問題の解決に向けては、市民性教育が最も重要であると考えられる。

またその前提に立てば、自治体における地域日本語教育は非母語話者への言語学習支援的機能よりも、母語話者による「共生日本語」としての調整能力の獲得や受入れ社会への啓発・教育の場としての機能

を重視して設計すべきではないか。

#### 6. おわりに

法施行や「体制づくり推進事業」の開始により、地域日本語教育の取組みの規模が大きくなるとともに、より一層多様化している。しかし、日本語非母語話者の日本語習得のための取組みが占める割合が大きく、日本語母語話者のコミュニケーション能力についてはあくまで日本語学習支援や特定の担当者への働きかけにとどまる。引き続き、共生社会の構成員としての市民に対する取組みを充実させる具体的な方策を検討したい。

(chibat@for.aichi-pu.ac.jp)

#### 注

注1 2019～2023年度までは文化庁が所管、2024年度より文部科学省に移管された。

注2 「体制づくり推進事業」の補助事業者は都道府県、政令指定都市、又は自治体から指定を受けた地域国際化協会等の団体である。本発表では地域国際化協会等の団体も、その団体が指定を受けた都道府県または政令指定都市と同等とみなし、「都道府県」及び「政令指定都市」と表す。

注3 発表応募時点（2024年11月末）で公開されているもののうち最新年度。

#### 参考文献

- 1) 阿部治子・加藤佳代・新居みどり編著：図書館員のための「やさしい日本語」, 日本図書館協会（2023）
- 2) 岡崎眸：共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために, 雄松堂出版（2007）
- 3) 日本語教育学会：平成20年度文化庁日本語教育研究委託外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」のための日本語教育事業）,（2009）
- 4) 柳田直美：接触場面におけるコミュニケーション方略を母語話者はどのように学習するか, 待遇コミュニケーション研究, 20, pp.83-97,（2023）
- 5) 義永美央子：日本語教育とやさしさ, ことばの「やさしさ」とは何か 批判的社会言語学からのアプローチ, 三元社, pp.19-43,（2015）

# 日本語教師のアスリート留学生に対する教育観

—教師の語りから見えた視点の転換—

Japanese Language Teachers' Views on Education for International Student Athletes : A Change in Perspectives from a Teacher's Narrative

○正宗鈴香<sup>※1</sup> 日野純子<sup>※2</sup> 東会娟<sup>※3</sup> 中山由佳<sup>※4</sup>  
MASAMUNE, Suzuka HINO, Junko TOU, Kaiken NAKAYAMA, Yuka

キーワード：アスリート留学生、学習者主体、教育観、学習者観

Keywords: International student athlete, Learner centered, Views on education and learners

## 1. はじめに（背景および目的）

スポーツ推薦で入学する留学生（以下、アスリート留学生<sup>注1</sup>）に対する日本語教育のあり方について、近年議論が始まっている。アスリート留学生の多くは、学業に加えて大学での競技力向上を主要な目標としており、部活が彼らにとって主たるコミュニティとなる。入試時に求められる日本語力は、一般留学生と同等のレベルを要求されることは少なく、入学後の日本語学習においては、学習目的、取り組み方、到達度などに個人差が見られる。このように、一般留学生とは異なる文脈や特性を持つアスリート留学生に対し、従来の日本語教育方法、すなわち、文法や語彙の習得に重点を置くといったアプローチの適用は難しい。そのため、教師側も現場でどのような実践を目指すべきか模索している現状がある。

現在、アスリート留学生に対する日本語教育実践研究には、立川（2023）や中山他（2024）等があり、学習者の関心に寄せた授業内容とその成果が報告されている。一方、日本語教師がどのような考えや視点を持って実践に取り組んでいるかに焦点を当てた研究は管見の限りない。そこで、本研究ではアスリート留学生を担当する日本語教師に行ったインタビュー調査を基に、教師が考えるアスリート留学生に対する「教育の姿」をカテゴリー分析により考察し、専門性を高めた日本語教育構築に向けた示唆を得る。

## 2. アスリート留学生の特性

本研究と同一のインタビュー調査を用いて分析した日野他（2024）では、アスリート留学生には、学習時間の確保、日本語学習意欲、日本語学習経験、授業中の学習態度、学習習慣・経験において特性が見られるとしている。具体的には、部活中心のため授業外の学習時間の確保が難しいこと、学習意欲面では個人差が大きいことを指摘している。また、部活内の通訳や英語の使用で事足りるとして日本語力はさほど必要ないと考える学生から、日常生活や部活でも積極的に日本語を使いたいと考える学生まで見られ、授業中の学習態度はこれらの「意欲」に強く影響を受けるとしている。日本語学習経験では、日本語未習者と高校で来日して自然習得が進んでいる学生が混在し、学習到達度には、来日前の母国での学習経験や学習習慣の違いも影響するとしている。

## 3. 調査方法

2024年2月から3月にかけて、アスリート留学生を担当する日本語教師6名を対象に、倫理的配慮を説明し了承を得た上で半構造化インタビューを実施した。質問項目は、1) 属性、2) 日本語教育部門と学内の連携、3) 日本語教育、4) 教材に関するものであったが、その過程において教師（調査協力者）が考えるアスリート留学生に対する日本語教育のあり方に関連する自発的な語りが見られた。本研究では、これらの語りを抽出し、調査協力者が現場で直面する課題に対し、どのような教育観、教師観、学習者観を持っているのかに焦点を当てて分析する。

※1 大東文化大学国際交流センター教授

※2 帝京大学教育学部教育文化学科教授

※3 帝京大学日本語教育センター准教授

※4 山梨学院大学グローバルラーニングセンター特任准教授

#### 4. 結果および考察

インタビューで得られた逐語訳を意味が成立する文節ごとに区切り、教育観に関連する語りを抽出し、類似する概念を統合・再編してカテゴリー化を行った。その結果、最上位カテゴリーとして「学習者主体の授業への転換」が生成された。上位カテゴリーは、1) 教師の思いや教師が想定するストーリーの押し付けへの問い直し、2) 学習者の特性（学習習慣、意欲、学習能力）に即した授業展開への転換、3) 学習者が日本語学習の意義を見出す働きかけときっかけ作りの視点、4) 学習者が大学・学部コミュニティの一員となる機会の創出、に分類された。1) については、「日本語を話せた方が生活が充実するのではないかと思っていたが、本人たちは自分たちのプレーでメンバーと繋がっていて自らの存在を肯定的に捉えていることが分かった」という語りに示されるように、教師が想定する日本語使用の姿と学習者が実際に持つ視点には差異があることが明らかとなった。2) に関しては、「これを勉強しなくてはいけないんだよ、というのは違うのかもしれない」といった語りから、教師が学習のゴールを設定していたことへの気づきがうかがえ、3) では、学習者が自らの考えを深めながら主体的に学習に取り組む機会を提供する学習環境への転換が示唆された。4) においては、「普通の大学生」としての経験が、競技生活後の活躍に重要となるとの認識が見られた。

#### 5. まとめ

インタビューからは、授業設計において、新たな教育的視座に基づく発想の転換や、教師自身がメタ的な視点を持つ必要性を認識していることが明らかになった。これらの語りは「学生の主体的・対話的で深い学びを促す授業」や「個別最適な教育」といった概念に繋がると推測される。しかし、その具体的な方法、例えば、学習者が考えるニーズや日本語の位置づけに教師の視点をどのように統合するのか、必要な学習環境（授業設計や学習評価）をいかにデザインし、展開していくかについては、今後の課題と言える。また、調査協力者の語りには、経験則に基づく「教育とはこういうもの」「このようにすれ

ばうまく学べる」として当然視してきた前提を再考する必要性に関する語りが多く見られた。その根底には、大学におけるアスリート留学生の日本語学習をどう転換し、どのように拡充すべきなのかという葛藤が垣間見える。一方で、アスリート留学生に長年関わってきた調査協力者からは「この数年で、彼らの気持ちを大切にしようというのはすごく変わってきたこと」とし、学生の様子を見ながらその場で学習内容を柔軟に変更する実践が語られるなど、新たな方法を試みていることも確認できた。

各大学に在籍するアスリート留学生が少数であることや、彼らに対する教育実践の方法や成果が個々の特性に大きく依存している点がこの分野の日本語教育を考える上での課題となる。また、大学や部活が目指す日本語習得の到達目標が明確に示されていない点も課題として挙げられる。調査協力者からは、大学間の情報共有の促進や目指すべき教育観に関する多層的な議論の必要性が強調された。

(masamune@ic.daito.ac.jp)

#### 注

注1 正宗（2023）は、アスリート留学生を「秀でた競技力を持ち、大学の運動部で競技活動を行う外国人留学生」と定義している。

#### 参考文献

- 1) 立川和美：外国人スポーツ留学生に対する初級日本語教育に向けた基礎的研究と実践：ラグビー部所属の学生を対象に、流通経済大学社会学部論叢,33 (2), pp. 7-29 (2023)
- 2) 中山由佳・藤原史織・影山陽子：アスリート留学生のための日本語授業デザインと実践，山梨学院大学グローバルセンター編集委員会，第3巻,pp.1-8 (2024)
- 3) 日野純子・正宗鈴香・中山由佳・東会娟・岡本能里子：アスリート留学生が持つ特性と日本語クラス・日本語教育へのインタビューから見えてきた現状と課題，2024年度日本語教育学会秋季大会,ポスター発表<sup>®</sup>
- 4) 正宗鈴香：アスリート留学生のための日本語教育構築に向けて-日本人部員へのインタビュー調査の質的分析から-,専門日本語教育研究,25, pp.51-58 (2023)

# 専門用語の説明における定義記述語彙の可能性

Is it Possible to Define Technical Terms, Using the Defining Vocabulary for a Japanese-Japanese Dictionary?

森口 稔<sup>※1</sup>

MORIGUCHI, Minoru

キーワード：専門用語、定義、定義記述語彙、日日辞典

Keywords: technical term, definition, defining vocabulary, Japanese-Japanese dictionary

## 1. はじめに（背景および目的）

辞書は外国語教育の重要アイテムである。そのため、英語教育においては、Oxford Advanced Learners Dictionary や Longman Dictionary of Contemporary English など、英単語を別の簡単な英語で説明する単言語辞典が出版されている。また、その説明に使う単語はあらかじめ決められており「定義記述語彙」または「定義語彙」(defining vocabulary) と呼ばれる。一方、日本語教育においては十分な見出しを持つ日本語非母語話者向け日日辞典はまだ出版されておらず、この定義記述語彙を定めた日本語関連の辞書も見当たらない。

発表者は、これまで日本語非母語話者向け日日辞典がどうあるべきかについて、他の数名の研究者と協同し、見出し語リスト、定義記述語彙リスト、語義記述および例文のサンプルを作成してきた。本研究では、この定義記述語彙を用いて、専門用語の記述がどの程度可能か、また、定義記述語彙にどういった語が足りないか、実際にいくつかの異なる分野の専門用語を用いて検討する。

## 2. 日本語非母語話者向け日日辞典について

定義記述語彙を使った専門用語の記述に入る前に、本研究の前提となる日本語非母語話者向け日日辞典について説明する。便宜的に、この辞書を Dictionary of Contemporary Japanese for Advanced Learners (DCJAL) と名付ける。

我々の研究は DCJAL そのものを完成することではなく、そのあるべき姿を明示することにある。具体

的には、DCJAL が記載すべき見出し語リスト、定義記述語彙リスト、収録項目の執筆サンプルおよび執筆マニュアルの作成である。執筆サンプルには、品詞、語義、用例、慣用句、類義語、同音語、学習者向け注などを含む。現在、見出し語リストは 28060 語、定義記述語彙リストは 4766 語、マイクロ構造記述サンプルは 539 例となっており、概要としてはほぼ完了したと考えている（定義記述語彙リストの作成については、森口・坂口 (2024) に詳しい）。今後、実際に辞書として編纂するためには、出版社との協力が必要な段階となっている。

## 3. 専門用語とは何か

本研究の目的は、専門用語に対する、上記の定義記述語彙の可能性を探るとともに、専門用語から見た際の定義記述語彙の不足を見つけることである。そのため、まず、専門用語を簡単に定義しておく。

森口 (2013) では専門用語について「一般に知られているかどうかにかかわらず、特定の分野で使用される概念を指す語句」と「一般にはあまり知られず主に特定の分野で使われる語句」の 2 つの立場を紹介しており、本研究では後者を取る。専門用語と見なす基準は、国語辞典の見出しとコーパスでの出現頻度を目安とした。次表の「掲載辞書」は『日本国語大辞典』『広辞苑』『明鏡国語辞典』『新明解国語辞典』の 4 冊のうち、見出し語として当該用語を載せている辞書を略称で示す。コーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) を使用した。また、分野および用語は、発表者が理解可能な範囲のものを選んだ。

※1 長浜バイオ大学非常勤講師

表：定義を試みる専門用語

	掲載辞書	BCCWJ
ゴンドワナ超大陸	(なし)	0
真核生物	日国、広辞苑	46
ダンバー数	(なし)	0
脱活乾漆技法	日国	0
株価収益率	日国、明鏡	18
深層学習	(なし)	0

#### 4. 定義記述語彙を使った専門用語の定義

上表の専門用語について、生成 AI に下書きをさせ、可能な限り DCJAL の定義記述語彙を使ってそれを修正した定義が以下である。定義記述語彙にない表現には下線を付し、文末の数字は文字数を示す。

「ゴンドワナ超大陸」 (地質学)

約5億年以上前に出来て約1億8000万年前まで存在していた大陸。地球の中の動きによって、その後、現在の南アメリカ、アフリカ、オーストラリア、南極、インドなどに分かれた。(84)

「真核生物」 (生物学)

細胞の中に「核」を持っている生物。この「核」の中に遺伝子が入っている。動物や植物はすべて真核生物である。(52)

「ダンバー数」 (霊長類学)

人が親しく付き合うことのできる友達の数。イギリスの科学者ロビン・ダンバーが考えた。人間の脳力には限りがあるため、だいたい150人くらいと言われる。」(74)

「脱活乾漆技法」 (美術史学)

8世紀ころ、仏像を作るときに使われた技術。表面は加工しやすい材料が使われていて、内部は空洞になっているため軽い。(56)

「株価収益率」 (経済学)

株の値段がその会社の儲けに比べて高いのか安いのかを調べるための数字。その株の値段を、1株あたりの利益で割って計算する。この率が低いと、株の値段が利益に対して安い可能性がある。(87)

「深層学習」 (人工知能)

非常にたくさんのデータを使って、コンピューター

が自分で規則や法則を見つけられるようにする技術。人間の脳の働きを真似て作られ、神経細胞のような物が多く層を作っている。(83)

#### 5. 考察

上述の結果を見る限り、少なくともこの6語に関しては、50~90字程度の簡単な説明であれば定義記述語彙での説明がある程度可能であることがわかった。DCJAL の定義記述語彙には主な地名も入れており、それが活かされていることもわかる。

しかしながら、「親しい」「空洞」「~あたり」など一般的とも言える語が含まれていない。また、「DNA」や「漆」がないため「真核生物」や「脱活乾漆技法」の説明が明確でない。

2章でDCJALの概要がほぼ完了したと述べたが、定義記述語彙に不足している語があることや、専門用語の説明への応用についても充分ではないことが今回の実験から明らかになった。また、定義の執筆は多分に職人芸的な要素があり、定められた語彙で説明する方法を執筆マニュアルに詳述することも必要と思われる。

#### 6. おわりに

今後は、定義記述語彙をさらに充実させるとともに、生成 AI に定義を下書きさせる方法の効率化も検討していきたい。

(moriguchi.minoru@ruby.plala.or.jp)

#### 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K02792 および JP21K00636 の助成を受けたものです。

#### 参考文献

- 1) 森口稔、坂口昌子：日本語非母語話者向け日辞典の定義語彙リスト作成について、国際言語文化学会学会誌, 8号, 47-58, 2024.
- 2) 森口稔：テクニカルコミュニケーションへの招待, 三省堂, 2013.



# 生理学語彙リストの見出し語設定方針の検討

—長単位からの再分割と形態素解析結果との比較から—

A Study on Methods for Creating a List of Technical Terms in Physiology:

Headword Selection Based on Morphological Analysis Results

○河住 有希子<sup>※1</sup> 藤田 恵<sup>※2</sup>

KAWASUMI, Yukiko FUJITA, Megumi

キーワード：専門用語、生理学、見出し語、点字、視覚障害

Keywords: Technical Terms, Physiology, Headwords, Braille, Visual Impairment

## 1. 背景および目的

本研究の目的は、視覚に障害がある日本語学習者が点字デジタル機器を用いて使用することを想定した生理学語彙リストの、見出し語設定方針を示すことである。本研究は三療（鍼灸あん摩マッサージ指圧）の国家試験を点字で受験する留学生の学習を支援するためのものである。同試験受験者の多くは日本語母語話者かつ墨字使用者であり、点字を使用する日本語学習者の学習リソースは限られている。今後の教材作成や学習支援のために、まずは点字の特性に配慮した専門語彙リストの作成が求められる。

語彙リスト作成にあたっては、河住他（2024）が三療国家試験直近 10 年分の問題における生理学分野の出題項目（以下、出題項目）を分析し、複合名詞が出現語彙に占める割合が多いことを指摘している。また、複合語においては形態素解析エンジンによる区切りと点字分かち書きの区切りが異なる場合があり、点字の特性への配慮が必要であることを示している。以上を踏まえ、本研究ではテキストの出現形に対応した最長のまとまりの語と、複合語の構成要素となり、1 語として学習する意義が認められる最小の単位の語を見出し語に含めることとした。

また、大量のテキストデータから語彙リストを作成するには形態素解析エンジンが有用であるが、形態素解析の問題点は小川他（2024）などでも指摘されている。そこで本研究では、形態素解析エンジン（MeCab を使用）により作成した語彙リストと、

筆者らが一語ずつ語義を確認して作成した語彙リストとを比較しながら、見出し語設定方針と、効率よく必要な語を抽出する方法を検討する。

## 2. 検討の手順

本研究の専門語彙リストは出現形のもとの語と、最小単位の語によって構成される。最長のまとまりは、国家試験の出題項目を目視で確認し、例えば「動脈血二酸化炭素分圧」「心房性ナトリウム利尿ペプチド」のような構成要素の多い語も含む 623 語を抽出した。議論を要するのは、1 語として学習する意義が認められる最小単位の抽出方法である。本研究では次の 3 つの方法で最小単位の専門語彙リストを作成し、それぞれを比較した。

- 出題項目に対して、文言を加工せずそのままの状態形態素解析を行い、出力された形態素一覧から名詞、名詞的に用いられる形状詞および接辞を抽出して 889 語のリストを作成（語彙リスト 1）
- 最長のまとまりで抽出して作成した語彙リストに対して、形態素解析を行って 639 語のリストを作成（語彙リスト 2）
- 最長のまとまりで抽出して作成した語彙リストに対して、筆者らが語義や英語訳等を参照しながら、学習する意義が認められると考える最小の単位の再分割して 605 語のリストを作成（語彙リスト 3）

## 3. 形態素解析結果における問題の所在

出題項目に対して形態素解析を行った結果（語彙リスト 1）には、区切り位置の揺れが見られた。例

※1 日本工業大学共通教育学群准教授

※2 日本国際教育支援協会専門員

例えば「温熱性発汗」は前後の文脈により、「温・熱性・発汗」「温熱・性・発汗」「温・熱・性・発汗」の3通りの分割が確認された。また、ヘモグロビンは「へ（助詞）も（助詞）グロビン（名詞）」、「コレシストキニン（筆者注：消化管ホルモンの一種）」は「コレ・シスト・キニン」に分割されるなど、カタカナ表記の語は、不適切な分割が多く見られた。これらのことから、原文を加工せずに形態素解析を行った結果の語彙リスト（形態素リスト）には、見出し語の一貫性や適切さに課題が残ることが分かる。

一方、複合語の最長のまとまりで作成したリストに対して形態素解析を行った結果（語彙リスト2）では、分析対象が文脈を伴わない「語彙リスト」であるため、過剰な分割は残るものの、区切り方の揺れはなくなる。過剰な区切りを防ぐために、一語として抽出したいものに括弧を付す等の工夫で、解析の精度を上げることができる。

#### 4. 見出し語決定方針の検討

対象となるテキストに対して機械的な形態素解析を行うだけでは、学習に資する語彙リストを作成することは難しい。そこで、最長のまとまりで抽出して作成した語彙リストに対して、筆者らが語義等を確認しながら再分割したリスト（語彙リスト3）も作成した。

再分割においては、南山堂医学事典（第20版）または小学館日本国語大辞典（第2版）に見出し語として掲載されている語の最小単位での分割を基本とし、語義や点字表記規則に応じて例外を設定した。例えば次のものは分割しないこととした。

- ・語によって指示対象が大きく異なる場合（例：細胞質の質は水や酵素でタンパク質の質はアミノ酸）
- ・分割すると語義が表しきれない場合（例：毛細リンパ管＝毛細管＋リンパ管、心電図＝心臓の電位の変化を記録した図）

なお、点字の区切りが対概念の理解に役立つと思われるものは、分割後のそれぞれの語が参照した辞書に見出し語として掲載されていなくても分割することとした（例：二酸化炭素は点字では「ニサンカ

□タンソ」と分かち書きされる）。

また、点字表記の分かち書きにおける区切りと英語訳での語の区切りが異なる場合は、様々な検索方法に対応できるよう、想定されるすべての区切りを見出し語に含めることとした（例：「細胞外液中」は点字では「さいぼー／がいえきちゅー」と分かち書きされるが、英語訳は in extracellular fluid（細胞外／液／中）であるため、細胞・細胞外・外液・外液中・細胞外液中のすべてを見出し語に含めた。

これらの基本的なルールを設定することで、出現形の最長のまとまりとしての623語に加え、605の再分割した語を、出題項目における名詞および複合名詞として抽出した。

#### 5. 考察と今後の課題

出題項目（原文）に対する形態素解析では名詞、名詞的に用いられる形状詞および接辞で889の形態素が抽出された。一方、最長のまとまりで作成した名詞および複合名詞のリストに対する形態素解析では639の形態素が抽出され、この結果は、筆者らが手作業で再分割した結果（605語）に近い。第4章の基準に従い、注意を要する語のリストを予め作成しておくことで、形態素解析エンジンを利用した、語彙リスト作成プロセスの効率化が期待できる。

今後は、最小単位と最長単位の間での分割を検討する。例えば「緊張性頸反射」のような構成要素の多い語は、最小単位では「緊張・性・頸・反射」と区切るが「緊張性－頸反射」に区切るなど、要素間の結びつきの強さや造語性の観点から、学習に役立つ分割の基準を検討したい。

(y\_kawasu@nit.ac.jp)

#### 参考文献

- 1) 河住有希子・藤田恵：三療を学ぶ留学生のための複合語に配慮した生理学分野語彙リストの作成—国家試験過去問題の出現語彙調査より—, 日本語教育学会 2024年度秋季大会予稿集, pp. 311-313 (2024)
- 2) 小川満梨奈・山本裕子・岩崎理紗：アニメ・ゲームのスク립ト分析における形態素解析の問題点, 言語資源ワークショップ発表論文集, pp. 332-341 (2024)

# 外国人家事支援人材に対する渡日前研修の実態調査

Survey on the Actual Condition of Pre-Departure Training for Foreign Housekeeping Staff

○今西 利之<sup>※1</sup>      ○渡辺 史央<sup>※1</sup>  
IMANISHI, Toshiyuki    WATANABE, Shio

キーワード：外国人家事支援人材、渡日前研修、実態調査、日本語学習支援  
Keywords: Foreign Housekeeping Staff, Pre-Departure Training, Fact-Finding Survey, Japanese Language Learning Support

## 1. はじめに

『日本再興戦略改訂 2014』（平成 26 年(2014 年)閣議決定)に基づき、平成 28 年(2016 年)から「家事支援外国人受入事業」が開始された。<sup>※1</sup> 令和 7 年(2025 年) 1 月 10 日現在、6 自治体(東京都、神奈川県、千葉市、大阪府、兵庫県、愛知県)が特区活用自治体、7 事業者が特定機関として認められ、フィリピンからの外国人家事支援人材が継続的に渡日、就労している。特定機関には、外国人家事支援人材に対する当該業務に関する研修(日本語によるコミュニケーション能力及び緊急時の対応能力の向上を図る研修を含む。)を実施することが義務付けられている。

本発表では、特定機関 A 社の自社研修施設、及び特定機関 B 社に外国人家事支援人材を送り出している送り出し機関 C 社行う研修の視察、及び研修担当者へのインタビューに基づき、外国人家事支援人材に対する渡日前研修の実態に関する調査報告を行う。あわせて、同人材に対する日本語学習支援のための教材開発の方向性を示す。

## 2. 渡日前研修調査の概要・結果

### 2. 1. 特定機関 A 社

特定機関 A 社は、フィリピン(マニラ)に自社施設を設け、そこで約 8 週間の渡日前研修を行っている。インタビューは、同社のフィリピン駐在日本人社員に行った。

施設は日本の家屋をイメージさせる内装(一部は写真の掲示等で対応)で、外国人家事支援人材 20～30 名が共同生活をしながら、キッチン、寝室、ト

イレ、シャワールーム、屋上などで日本での作法(お辞儀の仕方、屋内では靴を脱ぐ等)、業務に必要なさまざまなスキル(掃除や洗濯の仕方等)の習得を主な目的とした研修を受けている。

午後の 2 時間で教室型の日本語学習が行われる。日本語母語話者であるインタビューーと同社の外国人家事支援人材として日本に 5 年間滞在し、帰国後も引き続き同社に雇用されているフィリピン人社員が教師となり、インタビューーによる自作日本語教材で授業が行われている。業務で用いる単語(掃除、洗濯等に関わる語彙・表現)や定型表現(「お待たせいたしました」「ご準備させていただきます」「バスルームはどちらですか」等)の暗記とロールプレイを基本とし、その中に顧客からの要望(「時間があつたら冷蔵庫拭いてください」「あのコンロがベタベタしているから拭いてください」等)を不意に挟み、それに対して対応する練習が行われている。

当初は、体系立った研修は実施していなかったが、インタビューーが赴任する数年前から研修内容の策定を試行錯誤しながら行い、内容が固まってきたとのことである。日本語教育についても、当初は『みんなの日本語』を教科書としていたが、業務では使わない学習項目が多く、現場(日本の研修スタッフや顧客)からの要望に添って現場で使う日本語の表現を考え、その習得に必要な文法項目を『みんなの日本語』から抽出し、自作教材に反映させている。また、敬意表現の学習、習得が重視されている。これは、過去に自然習得した「ありがとう」「～でしょ」「～だよ」などを使った外国人家事支援人材に顧客からクレームがあつたからとのことである。

### 2. 2. 送り出し機関 C 社

※1 京都産業大学外国語学部教授

C社は、技能実習(育成就労)、特定技能等の外国人材の募集、研修、送り出し、渡日後のサポート等を行うフィリピン政府認定送り出し機関で、特定機関B社への外国人家事支援人材の送り出しを行っている。インタビューは、経営者であり、送り出し及び現地での渡日前研修の責任者に行った。

C社は、日本語がある程度できる人(日本語能力試験N5～N3レベルに相当)を送り出し人材として採用する方針である。採用者の日本語学習歴は、日本語教育機関での学習経験がある者、自学自習を行った者、過去の日本在留時に自然習得した者などさまざまである。採用に際し、インタビュー自身が全員に面接を行い、C社が考える外国人家事支援人材としての資質・能力等を評価しているが、日本語能力は重視されていない。

研修は約3ヶ月間で、お辞儀の仕方、日本では靴を脱いで屋内に入ること、SUICAの使い方など日本での生活に関わる一般的な事項、衣類の洗濯表示の理解、洗濯物の干し方、アイロンのかけ方、掃除の仕方、家電・洗剤等の使い方(表示の理解を含む)などの業務に関わる事項を中心に行われている。施設内には、日本の洗剤や道具等が置かれた日本の家屋(キッチン、寝室、リビング等)を模した部屋があり、日本での業務環境に慣れながら、必要なスキルと日本語を身につけていく。研修項目は約数百項目におよび、マニュアル化されている。<sup>注2</sup>

インタビューは、日本語学習について、自身の英語・タガログ語の学習・習得経験から、JLPT等の既存の日本語能力の評価尺度は個々の業種で求められるものと一致しているわけではないこと、また、渡日前に実生活や仕事で用いる日本語を身に付けることには無理があること、OJTが言語習得の最善の方法であるとの考えを持っている。また、日本政府が定める法令に則って日本語学習の機会を設けているが、経営的な視点からみると日本語教育に時間をかけるのは高コストであること、このコストを回収しようとするフィリピン政府の法令に抵触する恐れがあることを指摘し、これ以上の日本語教育の機会を会社として設けることは難しいとの見解であった。さらに、外国人家事支援人材が日本で行う業

務は特定の顧客に対して行われることが多く、顧客と一定の関係性を築くことが最も重要であり、一度信頼関係が築かれるとあまり日本語を使う必要がなくなる、従って、研修では、日本語そのものより、態度、立ち振る舞いを注意し、改善を求めているとのことであった。

### 3. 教材開発の方向性

以上の現地調査、及びインタビューから、外国人家事支援人材の日本語学習のための教材開発では、コストがかからないこと、各社の研修内容を補完し、家事支援業務と直結したモジュール型での学びが提供できること、そして、学習者のニーズや日本語能力に即して、各自が自学自習できるものであることか必要であると考えられる。

(imanishi@cc.kyoto-su.ac.jp)

#### 注

注1 内閣府国家戦略特区 HP <<https://www.chisou.go.jp/tiiki/kokusentoc/kajishien.html>>を参照のこと。

注2 このマニュアルは、特定機関B社からの要望を踏まえながら随時更新されている。なお、企業秘密ということで開示していただけなかった。

#### 参考文献

- 1) 今西利之・渡辺史央：外国人家事支援人材に対する日本語教育シラバス(案)の作成－能力記述文及び語彙・表現リストの作成を目指して－, 第19回 専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.26-27 (2017)
- 2) 今西利之・渡辺史央：外国人家事支援人材に対する日本語教育シラバス(案)の作成, 科学研究費助成事業研究成果報告書, <https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-15K12903/15K12903seika/> (2017)
- 3) 今西利之・渡辺史央：外国人家事支援人材に対する日本語教育シラバスの提案－「掃除」「洗濯」業務での能力記述文と語彙・表現リストの作成－, 専門日本語教育研究, 19号, pp.41-48 (2017)
- 4) 今西利之・渡辺史央：外国人家事支援人材への日本語学習支援のためのニーズ調査, 第25回 専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.17-18 (2023)

#### 付記

本発表は、科学研究費補助金基盤研究(C)「外国人家事支援人材に対する日本語教育・日本語学習支援プログラムの開発」(課題番号 18K00699)、及び「外国人家事支援人材に対する持続的な日本語学習支援モデルの構築」(課題番号 22K00677)の研究成果の一部である

# 非日本語母語話者の介護職対象の日本語教材 開発に向けた、介護の日本語教材の変遷の調査

Survey on Changes in Japanese Language Textbooks of Caregiving, aiming to Develop  
Japanese Language Textbook for Caregivers of Non-native Japanese Speakers

田辺 淳子<sup>※1</sup>  
TANABE, Junko

キーワード：外国人介護人材、介護の日本語、声かけ、教材開発

Keywords: Foreign care workers, Japanese in caregiving, *Koekake*, Teaching materials development

## 1. はじめに（背景および目的）

介護に関する在留資格は、2008年のインドネシア介護福祉士候補者に始まるEPAから、2017年の在留資格「介護」および技能実習、2019年の特定技能1号と増えた。2024年3月に行われた「介護分野における特定技能協議会運営委員会」での厚生労働省の説明資料「外国人介護人材の受入れの現状と今後の方向性について」によると、これら4つの資格で5万5千人以上の外国人介護人材が在留している。資格の拡大により、人数のみならず、国籍・母語、介護・看護知識、日本語レベルなども多様化し、外国人介護人材向けの日本語教材も大きく変化している。

著者は2008年からEPAの訪日後研修の日本語教育を担当し、2016年からは介護の声かけの研究・教材開発を行っているが、田辺（2017）の調査では、日本人介護職も外国人介護職も声かけの重要性を認識しているものの、外国人介護職の9割以上が就業前に自分の声かけに不安を感じており、声かけに慣れて自分から言えるようになるまでに1~6か月要したと6割以上が回答した。外国人介護職の声かけに関する不安・負担を減らすことは、より良い介護サービスの提供、利用者の満足度の向上、日本人指導者や同僚の負担軽減にもつながると考え、2018年に声かけに特化した教材を出版し、現在はインターネット上に教材「声かけデータバンク」を開発している。時代の変化に対応した教材開発ができるよう、これまでの介護の日本語教材の変遷を調べた。

## 2. 方法

看護と介護の日本語教育研究会が公開している「介護と看護の日本語教育教材リスト（24年11月11日版）」のうち、介護に関する教材で筆者が入手・閲覧できた52冊を使用した。その中から外国人介護職対象の学習教材と判断した<sup>注1</sup>46冊を調査対象とし、学習用途別に「介護知識・技術（コミュニケーションを含む）」「国家試験対策」「漢字・語彙」「その他」に分類した。その中で声かけを含む教材に関しては、教材内で扱っている介護場面および声かけ表現数を調査した。介護場面は、「着脱」「移乗・移動」「入浴」「そのほかの場面」「場面設定なし」など23の介護場面に分け、各教材にどの介護場面が含まれているか調べた。声かけ表現数は、介護場面ごとの声かけ表現数を述べ表現数でカウントし、各教材の総声かけ表現数を調べた<sup>注2</sup>。

## 3. 結果および考察

EPA制度による介護の資格が創設される前に出版された外国人介護職向けの教材は、2005年に出版された1冊のみであった。2009年以降はほぼ毎年新たな教材が出版されている。これは、ほかの職業に関する専門分野の日本語教材の出版数と比べて、多いと言えるだろう。

本調査対象の46冊のうち、42冊が市販書籍であるが、EPA以外の介護に関する在留資格の創設以前、2016年までに出版された書籍は10冊で、残りの32冊は2017年以降に出版されている。

<sup>※1</sup> 愛知学院大学日本語教育センター講師

46冊を学習用途別に分類すると、日々の介護業務に直接関係のある介護知識・技術（コミュニケーションを含む）に関する教材が24冊、国家試験対策に関する教材が6冊、日々の介護業務と国家試験対策の両方にかかわる漢字・語彙（用語集を含む）に関する教材が15冊、その他が1冊であった。

46冊のうち、他言語への翻訳（一部翻訳も含む）があるのは32冊で、従来EPAの介護福祉士候補者の母語・公用語であるインドネシア語・英語・ベトナム語が中心であったが、2019年以降は多言語訳化が進み、本調査対象の教材では13言語が確認でき、1冊の教材内では最大11言語への翻訳が確認された。

本調査対象で2017年以降に出版された32冊のうち、介護の知識・技術（コミュニケーションを含む）に関する教材は18冊だが、「はじめて」「やさしい」「よくわかる」や短時間で学習が可能であることを示す言葉がタイトルに含まれる教材が全体の約6割、11冊であった。一方で「発展」「応用」「もっとできる」等をタイトルに含む教材は0冊であった。

声かけに関しては、対象の46冊のうち、29冊で取り上げられている。声かけは、国家試験対策の教材内では過去問題を除き取り上げられていないが、漢字・語彙の教材内では扱っているものも多い。ただし、教材内での取り上げ方、扱う介護場面数、声かけ表現数には大きな差がある。介護場面は、食事、着脱、移乗・移動、入浴、排泄が多く取り上げられていた。介護場面ごとの声かけ表現数が多かったのは、排泄、入浴、着脱、移乗・移動、食事であった。

声かけ表現数は、少ない教材の場合、特定の介護場面を設定せず、書籍1冊内に声かけ表現が10～50程度散りばめられていた。多い教材の場合、複数の介護場面において介護場面ごとの声かけ表現リストや流れのある会話（介助動作に沿った会話）を掲載し、総声かけ表現数が300を超えていた。上述の「はじめて」「やさしい」「よくわかる」などがタイトルに含まれる教材は、介護知識・技術に関する教材であっても総声かけ表現数が少ない傾向にあった。

#### 4. おわりに

教材内の声かけの調査は、教材内の場面設定（章

のタイトル）と声かけが合っていない、声かけかどうか判断しにくい、相槌や返答を声かけと扱うかどうかなどの問題点があり、数え方次第で声かけ表現数の値が変動する。しかし、介護の資格拡大が介護の日本語教材にどのような影響を与えているか概要を把握することはできた。

新制度として「就労育成」制度が新たに創設され、今後、介護や医療の知識がない、日本語能力が低い非日本語母語話者・外国人介護職への教育・研修のニーズがさらに高まると予想される。一方で、介護に長年従事する外国人介護職の増加も見込まれるため、さらに学びたい・キャリアアップしたい外国人介護職への対応も必要であると考えられる。基礎から発展まで対応できる教材の開発を目指し、研究を進めたい。

(tanabe@dpc. agu. ac. jp)

#### 付記

本研究はJSPS 科研費 21K00611 の助成を受けている。

#### 注

注1 外国人介護職の現状や問題について書かれた書籍や教材の指導書・教師用手引き等は学習教材ではないと判断し、本調査の対象外とした。

注2 教材内の声かけの練習問題は、例として提示してあるもの、選択肢がそのページに掲載されているものは述べているものでカウントしたが、別ページ・別冊子に解答が記載されているものはカウントしなかった。

#### 参考文献

- 1) 看護と介護の日本語教育研究会  
<http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/kangokaigoN-SIG/>  
 (2025.1.24 確認)
- 2) 厚生労働省 外国人介護人材の受入れの現状と今後の方向性について  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001240343.pdf> (2025.1.24 確認)
- 3) 田辺淳子：介護に従事する非日本語母語話者のための介護の場面別声掛け音声教材（シャドーイング教材）の開発・作成，平成29年度全国老人福祉施設研究会高知会議要覧，pp.341-351（2017）

# 日本留学試験読解問題の出題分野の分類および 文字数と文章難易度の分析

Classification of EJU Reading Comprehension Questions and  
Analysis of the Number of Characters and the Readability Score of the Text

○佐々木 良造<sup>\*1</sup> ○林 希和子<sup>\*2</sup>  
SASAKI, Ryozo HAYASHI, Kiwako

キーワード：EJU、読解問題、出題分野、文字数、文章難易度

Keywords: EJU, Reading comprehension question, Subject area, Characters, Readability score

## 1. はじめに

日本留学試験 (The Examination for Japanese University Admission for International Students; EJU) は、2024年12月現在、932校の高等教育機関 (大学・大学院・専門学校等) で入学試験に利用されており (日本学生支援機構 n. d.)、日本留学のための試験として重要な試験であることは論を俟たない。

EJUは2002年の開始以来2024年11月まで43回実施されている。2010年度の試験でシラバスの改定が行われたものの、試験そのものについて十分検討されているとは言えない (門倉2009)。本研究ではEJUの読解問題を検討するために、読解問題文の長さ (以下、文字数) と文章難易度 (以下、難易度) に焦点をあて、定量的な分析を試みる。

まず、執筆時点で入手可能な2002年度第1回から2023年度第2回までの読解問題を対象として問題文の文字数と難易度を調べる。そして、出典情報に基づいて問題文の分野を分類し、分野ごとの文字数と難易度を分析する。難易度の算出は日本語文章難易度判別システム (李2016) による。

## 2. 問題文の文字数と難易度

分析の対象となった読解問題は全部で734題、文字数の平均は412文字、難易度の平均は2.61 (中級後半) だった。うち、出典のある問題 (以下、出典あり) は595題、出典のない問題 (以下、出典なし) は139題であった。出典ありと出典なしの文字数と難易度の平均

表1 文字数と難易度の平均値 (出典ありと出典なし)

	出典あり ( $n = 595$ )	出典なし ( $n = 139$ )
文字数	429 <sup>*1</sup>	339 <sup>*1</sup>
難易度	2.60 <sup>*2</sup>	2.65 <sup>*2</sup>

\*1  $M = 24631$ ,  $p < 0.05$ ,  $r = 0.27$

\*2  $M = 43228$ ,  $p = 0.40$ ,  $r = 0.03$

表2 文字数と難易度の平均値 (書籍と書籍以外)

	書籍 ( $n = 539$ )	書籍以外 ( $n = 56$ )
文字数	430 <sup>*3</sup>	412 <sup>*3</sup>
難易度	2.58 <sup>*4</sup>	2.78 <sup>*4</sup>

\*3  $M = 16670$ ,  $p = 0.19$ ,  $r = 0.05$

\*4  $M = 13388$ ,  $p = 0.16$ ,  $r = 0.05$

値を表1に示す。

マン・ホイットニーのU検定を用いて平均値の差を検討したところ、文字数は5%水準で有意で、出典あり (429文字) のほうが出典なし (339文字) より長かった。難易度の平均値に有意な差はなかった。

そして、出典ありの問題のうち書籍からの出題が539題、新聞・雑誌・ウェブサイトなど書籍以外からの出題が56題あった。書籍からの出題と書籍以外からの出題で文字数と難易度の平均値に有意な差はなかった (表2参照)。

## 3. 出題分野の分類および文字数と難易度の分析

書籍から出題された539題のうち、日本十進分類法 (Nippon Decimal Classification; NDC) の情報が得られた535題を対象とし、松下 (2011) の分類にしたって、NDCの情報から「人文系・社会系・理工系・生物系」の4分野に分類した (表3参照)。

4分野からの出題割合が均等かどうか適合度の検定を用いて検討したところ (表4)、人文系・社会系・理工系・生物系の4分野から均等には出題されていない

\*1 静岡大学国際連携推進機構 特任准教授

\*2 大阪大学日本語日本文化教育センター 非常勤講師

表3 分野ごとの出題数と割合(%)

	人文系	社会系	理工系	生物系	計
出題数	123	199	85	128	535
割合	23%	37%	16%	24%	100%

表4 適合度の検定 (4分野からの出題割合)

	人文系	社会系	理工系	生物系
観測値	23%	37%	16%	24%
理論値	25%	25%	25%	25%

表5 分野ごとの文字数と難易度の平均値

	人文系	社会系	理工系	生物系	平均
文字数	393	434	442	454	431
難易度	2.75	2.51	2.49	2.62	2.59

ことがわかった ( $\chi^2 = 51$ ,  $df = 3$ ,  $p < 0.05$ )。

次に、分野ごとの文字数と難易度の平均を検討する(表5参照)。文字数の平均は人文系が400字未満で他の3分野は440字前後だった。人文系と社会系、人文系と理工系のように、2分野ずつ文字数の平均の差を検討したところ、有意水準5%で人文系が他の3分野より短いことがわかった。

難易度の平均は理工系が2.49(上級前半)で、他の3分野は中級後半であった。文字数と同様に難易度についても平均の差を検定したところ、人文系と社会系、人文系と理工系の平均に5%水準で有意な差があった。人文系と生物系、社会系・理工系・生物系間の平均に有意差はなかった。平均の差の検定はマン・ホイットニーのU検定を用いた(統計量は紙幅の都合で省略した)。

#### 4. 考察

EJUの読解問題のうち、出典なしの文字数の平均は400字より短い傾向にあるが、これらは2018年度以降、出題されていない。(林・佐々木 TBA)。出典なしの問題文は作問者書き下ろしの文章であることも考えられる。問題文の文字数に幅が出ないようにするためには、問題文は書籍からの抜粋のほうが望ましいと言える。

次に出題分野で見ると、4分野のうち社会系からの出題の割合が高く理工系からは低いこと、人文系の問題文は文字数が他の3分野の問題に比べて短く、

難易度が社会系・理工系より低いことが明らかになった。出題分野の傾向と問題文の長さの傾向を考えると、出題割合の低い理工系の受験者には不利になる可能性が考えられる。そして、人文系以外の分野は人文系より文字数が長く難しいため、こうした傾向は人文系の受験者に不利に働くかもしれない。

また、問題文の難易度が中級後半から上級前半であること、長さの平均が400字前後であることは、EJUの目的である「日本の大学等で必要とする日本語力(中略)の評価を行うこと」(日本学生支援機構 n. d.) に適っているかどうかとも検討が必要だろう。

#### 5. 今後の課題

今後は分析の対象を2010年度のシラバス改訂前後で分け、特にシラバス改訂後の問題を中心に分析を進めたい。また、読解問題に加え、聴読解問題も分析の対象としたい。

(sasaki.ryoza@shizuoka.ac.jp)

#### 謝辞

本研究はJSPS 科研費 23K20472(代表:太田亨・金沢大学)の助成を受けたものである。

本研究では、科研費(課題番号 25370573)の成果物である「日本語文章難易度判別システム」(<http://jreadability.net>)を利用した。

#### 参考文献

- 1) 門倉正美: 日本留学試験のプロフィレンシー—「複テキスト性」という観点の提案, アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル vol.1, 1-16 (2009)
- 2) 日本学生支援機構: <https://www.jasso.go.jp/> [2025/1/18 最終閲覧]
- 3) 林希和子・佐々木良造: 日本図書コードを用いた日本留学試験読解問題文出典の分析, 第27回専門日本語教育学会研究討論会誌, ページ未定, (TBA)
- 4) 松下達彦: 日本語を読むための語彙データベース (VDRJ) Ver. 1.0 (教師用) [2019/12/1 取得], <http://www.wa.commufa.jp/~tatsum/> [2024/11/27 最終閲覧]



# 見出しの読み取りが学部留学生の要約文作成に与える影響

—新聞社説の論説文を原文として—

Effects of Editorial Headline Reading on Undergraduate International Students' Summary Writing

湯浅千映子<sup>※1</sup>

YUASA, Chieko

キーワード：要約、初年次教育、アカデミック・ライティング、学部留学生、見出し

Keywords: Summary, First-Year Experience, Academic Writing, Undergraduate Foreign Students, Headline

## 1. はじめに（背景および目的）

学部留学生は、大学初年次の「文章表現法」などの授業で、大学4年間の「学修」に必要なアカデミックスキルの基礎を修得する。筆者の担当科目（初年次教育）では、課題図書の内容をまとめ、要旨を引き、意見を述べる「ブックレポート」の完成を到達目標とし、情報の探索、文献資料の読解、引用の方法やレポートの書き方などを段階的に学ぶ。こうした初年次の「学修」では、「読む」と「書く」の横断的な技能である「要約力」がその中核を担う。特に「ブックレポート」は、間接引用などのアカデミックスキルの要素を内包する。学部留学生は、レポート作成の学びの中で「要約力」を駆使しつつ、「能動的な読み」（二通 2006: 101）を実現させる。

日本語学会編（2018:990 佐久間まゆみ氏執筆）は、「要約」を「一般に、理解主体（読み手・聞き手）が目的や内容に応じて、元の文章（「原文」）・談話（「原話」）の主旨を変えずにより少ない言語量（文字数・発話量）でまとめる言語行為」と定義し、「④原文・原話の主題文と中心文の把握」、「⑤要約文の内容の再構成」などの7種の要約の過程があるとした。学部留学生は、日本語学校などでの学習経験を通じ、資料内容を理解し、意見文を書く方略を身に付けている。その方略の一つに、資料に付された「見出し」をヒントに文章内容を推測して読むという方法がある。文章・談話の「表題」（タイトル・見出しなど）も、究極的には要約の一種である（日本語学会編 2018:990）。原文の要旨（「主題文」）に相当する内容の「要約見出し」の場合、「見出し

の内容を読み取ることで、原文の要点を把握し、原文全体の文章構造を理解する助けとなるだろう。

湯浅（2021・2023）は、学部留学生と日本人大学生を対象に、新聞社説の原文から「大意」と「要旨」という長さの異なる要約文を作成する「要約文調査」を実施した。本発表では、この調査を発展させ、学部留学生を調査協力者とし、「見出し」の有無や「見出し」の特徴の違いに着目し、「見出し」の理解が要約文の作成にどう影響するかを検討した。学部留学生を原文の「見出し無し」群と「見出し有り」群に分け、「大意」と「要旨」を収集した。その後、原文と要約文を比較し、学部留学生が書く要約文の文章構造の類型とまとめ方の傾向を見ていった。これにより、学部留学生が「ブックレポート」の構成要素の一つにもなる「要約」を行うために必要な学習方略を明らかにする。

## 2. 調査と分析の方法

【調査方法】調査協力者は、研究倫理の理念に即し、調査の趣旨に賛同した学部留学生約130名（母語は、中国語、ベトナム語等）。この協力者に対し、「2019年4月27日付日本経済新聞社説『訪日リピーターを増やそう』（791字・9段落・24文）を読み、160字と40字にまとめなさい」（大意と要旨）と指示した。第1次調査（2019～2021年）は、「I見出し無し」群と「II見出し有り」群に分け、第2次調査（2022年）は、IIをさらに原文見出しと同じ「見出しA」（「要約見出し」）と、原文見出しとは異なる「見出しB」（「観光立国を実現するために」・主題文③の副詞節から発表者が作成）の計3群とした。

<sup>※1</sup> 大阪観光大学国際交流学部教授

文③「政府が<sup>3-1</sup>掲げる<sup>3-2</sup>観光立国の<sup>3-3</sup>実現には<sup>3-4</sup>外国人の<sup>3-5</sup>  
<sup>3-6</sup>リピーターを<sup>3-7</sup>増やし、<sup>3-8</sup>日本の<sup>3-9</sup>ファンを<sup>3-10</sup>増やす<sup>3-11</sup>  
 必要がある」(11 CU)

図1 原文の主題文(文③)の「情報伝達単位(CU)」

【分析方法】まず、市川(1978)に基づき原文の文章構造分析を行った。原文は、「I. 開始部」にある原文見出しと同内容の主題文③が原文全体を統括し、「II. 展開部」で「訪日リピーター」を増やすための方策や事例が示され、「III. 終了部」で補足的に「地方観光」に言及するという、2段構成の「頭括型」となっている。次に、佐久間(2010)の分析方法に従い、原文と要約文を「情報伝達単位(CU)」(16類35種)に区分し、両者のCUを照合し、特に原文の「主題文」のCUや「見出し」の中のCUを中心に、要約文中に原文のCUがどの程度残存するかを、要約者総数に占める割合で比較した。残存するCUの形態を「ZG(原文と同じ)」、「ZP(言い換え)」、「ZE(誤用)」に分け、形態の変化の有無からCUの残存傾向(出現頻度)を見た。

### 3. 結果および考察

学生S(母語:ベンガル語) / II「見出しA」群

【160字大意】①外国人の<sup>3-5G</sup>リピーターを<sup>3-6E</sup>増やし、<sup>3-7G</sup>ファンを<sup>3-9G</sup>増やす<sup>3-10G</sup>必要がある。<sup>3-11G</sup>②リピーターを<sup>9-4G</sup>増やす<sup>9-5E</sup>観光立国への<sup>9-6G</sup>道が<sup>9-7G</sup>見えるため<sup>9-8P+10-1P</sup>リピーターの<sup>10-2G</sup>時間や<sup>10-3G</sup>お金の<sup>10-4G</sup>使い方を<sup>10-5G</sup>知ることだ。<sup>10-6G</sup>③地域の<sup>20-1G</sup>住民が<sup>20-2G</sup>外国人の<sup>20-3G</sup>増加により<sup>20-4G</sup>生活環境が<sup>20-5G</sup>悪化していれば<sup>20-6P+20-7E</sup>空気は<sup>20-10E</sup>生み出せないはずだ。<sup>20-11G</sup>④住民が<sup>22-1G</sup>ガイド役などで<sup>22-2G</sup>参加すれば<sup>22-3P</sup>地域を<sup>22-4G</sup>理解してもらおうし<sup>22-5P</sup>持続的な<sup>22-8G</sup>経済振興に<sup>22-9G</sup>つながる。<sup>22-10G</sup>

【40字要旨】①オーバーツーリズムの<sup>24-2G</sup>問題を<sup>24-3G</sup>解消するうえでも、<sup>24-4G</sup>リピーターが<sup>24-5G</sup>地方都市に<sup>24-6G</sup>向かう<sup>24-7G</sup>流<sup>24-8E</sup>作り<sup>24-9G</sup>たい。

図2 学部留学生Sの要約文の例

II「見出し有り」群・「見出しA」の原文の要約では、160字大意の中に主題文③のCUを含むものが半数以上を占める。中には、原文冒頭の文①から③までを「抜き書き」する例も見られた。I「見出し無し」群の要約では、その半数が主題文③の内容を

持つ大意であった。一方、IIの「見出しB」の原文の要約では、主題文③のCUを含む160字大意が半数以下となり、主題文の前後の訪日客数の記述(「過去最高」・「鈍化」など)のみでまとめる例や要約が未完成で、途中で終わる例が見られた。分析を通し、学部留学生が原文の「要約見出し」を参照し、原文の理解を深めている様子がうかがえた。

(c-yuasa@tourism.ac.jp)

#### 注

注1 「ブックレポート」の構成は、河野(2018)の「テキスト批評」(1目的の提示、2要約、3問題の提起、4議論、5まとめ)による。「2要約」では、テキスト順に原著者の主張を把握し、まとめる「順要約」を行った。

注2 二通(2006:101)は、「大学のレポートや論文では、文献や資料など外から得た情報を参照しながら書く」ことが多く、「長い文章から必要な情報を取り出す」・「要旨を読み取り自分の言葉でまとめる」などの自分自身の問題意識に基づく「能動的な読み方」が必要になるという。

注3 市川(1978)の「文と段の接続関係」により、「文段」及び「中心文」・「主題文」(「結論表明」など)を定め、それらの位置から「頭括型」などの「文章型」を認定した。

#### 参考文献

- 1) 市川孝: 国語教育のための文章論概説, 教育出版, (1978)
- 2) 河野哲也: レポート・論文の書き方入門 第4版, 慶応義塾大学出版会, (2018)
- 3) 佐久間まゆみ編著: 講義の談話の表現と理解, くろしお出版, (2010)
- 4) 二通信子: アカデミック・ライティングにつながるリーディングの学習, 門倉正美ほか編, アカデミック・ジヤパニーズの挑戦, ひつじ書房, pp.99-113 (2006)
- 5) 日本語学会編: 日本語学大辞典, 東京堂出版 (2018)
- 6) 湯浅千映子: 新聞社説と要約文の表現類型—学部学生・学部留学生による140字大意の比較—, 日本語/日本語教育研究, Vol.12, pp.213-228 (2021)
- 7) 湯浅千映子: 学部留学生と日本語母語話者の大学生の新聞社説の要約文の比較—40字要約文から見た主題文の把握—, さいたま言語研究, 7号, pp.136-151 (2023)

# 日本語学習者用の辞書に求められる情報とは

—情報の提示順序に着目して—

Information Required in Dictionaries for Japanese Language Learners:  
Focusing on the Order of Information Presentation

○吉 甜<sup>※1</sup>  
JI, Tian

○佐野 彩子<sup>※2</sup>  
SANO, Ayako

○石黒 圭<sup>※3</sup>  
ISHIGURO, Kei

キーワード：スマホ、辞書アプリ、学習者用辞書、情報の提示順序

Keywords: Smartphones, Dictionary Apps, Learner's Dictionaries, Order of Information Presentation

## 1. はじめに

日本語学習者の多くが、スマートフォンや PC を用いて、辞書アプリ、インターネット上の辞書リソースを利用している。しかし、これらは、必ずしも学習者にとって分かりやすい内容や記述であるとは限らない。学習者向けの辞書については、鈴木ほか (2020) で学習者目線に立った辞書ツールの整備が不十分であることが指摘されている。また、石黒ほか (2023) による学習者の辞書使用にかんする実態調査においても、学習者が使用している辞書リソースでは、提示される情報が多すぎたり、不適切な情報が含まれるために、学習者が必要な情報を見つけられなかったり、混乱してしまう状況が観察された。そこで、本研究では、石黒 (2023) の調査データをもとに、学習者が用いた辞書における辞書項目の提示順序の問題を中心に検討し、将来の学習者用辞書の開発に役立てることを目指したい。

## 2. 研究方法

海外の 10 大学と日本国内の 1 大学の協力のもと、日本語学習者 110 名を対象に辞書引き調査を実施した。1 週間 (連続する 7 日間)、調べた言葉の検索行動を、デバイス内蔵の画面収録機能で検索画面を録画してもらった。また、語彙検索の行動の詳細について、どのような目的でどのように言葉を検索したのかを語彙検索行動情報シート

に記入してもらった。

本研究は、このシートで学生が「検索目的を達成したかどうか」の回答 (全体数 4,575 件) において、「達成できなかった」と申告された 757 件のデータを中心に、辞書リソースにおける情報の提示順序や方法に課題があると思われるものを質的に分析した。

## 3. 結果および考察

既存の辞書リソースの問題点を、表記、語釈、例文という 3 つの側面から分析する。

### 3. 1 表記について

検索結果に複数の表記が提示される際、一般的に使用されている表記が最上位に提示されていない問題がある。ドイツの学習者 A は、辞書アプリの Takoboto を用いて、「しっかり」の意味を調べた際、普段は使用しない「確り」や「稔り」が上位に大きく表示され、ひらがな表記の「しっかり」が最下位に表示されていた (図 1) これでは、普段、漢字表記が用いられていると誤解されかねないだろう。

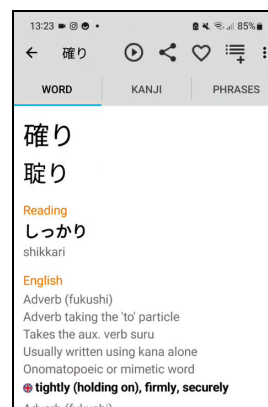


図 1 「しっかり」検索結果

※1 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

※2 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

※3 国立国語研究所 教授

また、同じ学習者が“Waschbär (あらいぐま)”の日本語表記を、漢字かカタカナで書くべきかを調べた際、最上位に「洗い熊」と大きく表示され、「洗熊」<sup>注1</sup>「浣熊」が続き、「あらいぐま」「アライグマ」は中段に小さく表示されていた。画面下部には、英語で“Usually written using kana alone”と説明があり、最上段の「洗い熊」とも食い違う説明になっていた事例もあった。この他にも、表記の問題では、中国語で入力、検索すると日本語の検索結果に中国語の簡体字が表示されてしまうような文字・表記の不統一の問題も散見された。

### 3. 2 語釈について

語の意味を調べても、調べなかった内容とは全く異なる専門用語の説明が表示され、学習者が混乱してしまった事例もある。中国の学習者 B は日本語の文章にある「甲乙」の意味と読み方を知るため、辞書アプリ有道 (Youdao) で検索したところ、邦楽で音の高低を指す専門用語「かるめる」が先頭行に、一般的に使用される「優劣」の意味がその下に説明されていた (図 2)。学習者は続いて「かるめる」の意味も複数回検索するが、理解できなかったようである。語釈は、一般的な語釈から特殊な語釈へ、使用頻度の高い語釈から低い語釈へと並べられる (国広 1997) が、学習者向けの辞書では、学習者の習熟度や学習目的に応じて不要と判断される語釈については省略するなどの工夫も必要だろう。また、学習者にとって理解の難しい内容は、適宜、図やイラスト等を挿入して意味理解を補助するような工夫も重要であると考えられる。



図 2 「甲乙」検索結果

### 3. 3 例文について

辞書の例文は本来、語釈を理解するための重要な手がかりであり、文法的に正しく、使用場面が想像しやすい、自然な表現でなければならない。しかし、例文の中には明らかな非文も少なくなかった。中国の学習者 C が辞書アプリ MOJi 辞書で「把握」の例文を検索した際、複数の例文のうち「\*いつもペンを把握する」という非文が最上位に掲載されていた。また、例文の中には、この他にも誤りとは言えないまでも翻訳調でわかりにくい例文なども掲載されていた。

### 4. おわりに

学習者の語彙検索データをもとに、表記、語釈、例文という 3 つ情報の提示順序を中心に分析すると、いずれにおいても改善すべき点が見られた。学習者向けの辞書開発にあたっては、単に情報を羅列するだけではなく、どの情報をどのような順番で提示するかについて、慎重に検討する必要がある。今後、より多くの事例を分析し、学習者が必要とする情報の提示順序や方法を最適化するための具体的な指針を検討していきたい。

(jitian@ninjal.ac.jp)

#### 付記

本研究は、科研費 (JPK21K18375) および国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」の研究成果の一部である。

#### 注

注 1 「洗熊」の表記も掲載されている (『日本国語大辞典』第 2 版 小学館)

#### 参考文献

- 1) 石黒圭・佐野彩子・吉甜 (2023) 「世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」『社会言語科学』26-1 pp.5-20
- 2) 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
- 3) 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子 (2020) 「海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明—ICT 時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して—2017 年度実施のアンケート調査の結果と分析—」『日本語・日本学研究』10 pp.23-48

---

第27回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2025年3月8日発行

© 専門日本語教育学会 2025

専門日本語教育学会事務局

名古屋経済大学国際交流センター

宮島良子研究室

〒484-8504 愛知県犬山市内久保 61-1

TEL: 0568-67-0511

E-mail : office-stje@kir.jp

発行：第27回専門日本語教育学会大会実行委員会

石黒圭（国立国語研究所） 会長

生天目知美（東京海洋大学） 代表幹事

三谷彩華（江戸川大学） 大会実行委員長

青木優子（東京福祉大学）

岩崎拓也（筑波大学）

田中啓行（中央学院大学）

張未未（東京大学）

李婷（日本大学）

---



専門日本語教育学会